

アイタ夫では死る／＼。音ウント計りに色息絶たり道の親父も悔りし詞ヤ、南無三三。こいつ死んだはと色口に手を當てコレ幸ひと彌二郎兵衛が帯くる／＼と引ほどきすつほりはいだるギンユリ丸裸ウらんとつ場よりとつかはと經帷子に角ばうし手早にフシませて詞サア是でちつとは腹がいた。膏藥代の其代り着物荷もつを引さらひ千松こいと手を引てオトシ足早にこそ立歸るウハル次第に中更け行く地夜嵐に連て降來る雨の音合野寺のかねのこウ中／＼とギンいと物凄き並木の陰ハル松の雫が霏ひのぞつと身にしみ彌二郎兵衛息吹返し起上りあたり見廻し色／＼て。ハクシヨ詞寒い／＼。ヤ爰は何所じやしらん。おりやママ一體どうしたのじや。エ、先御油の宿を離れて。北八を威してやろと。狐のまねをしたは。夫から小僧が來たを化物だと思ひ。打のめしたは。北八は逃たはそこで親父にきんを締上られ。夫から後は何にも覺へぬが。ハアこいつは夢かしらん。オ、寒い／＼。ヤア向ふにらんとつ場が見へる。して見りや夢ではない。マどうした事と無廻し詞ヤ、おれが着てゐるはコリヤ是經帷子。そして額

に三角な紙が當つて有り。ヤヤそんならおりや死んだか。エ、おちから落しじやなア。扱は金を締上られ夫で死んだか悲しやなア。そんならこゝは冥土の道かいやい。淺ましい心細い身に成た。こんな事なら鼻にも。とつくりと暇乞もしやう物。こんなに早く死ふとは。しらなんだ／＼冥土の道は暗いと聞たが。ほんに眞暗だ。どうぞ極樂の方へぶら／＼行たいが。そうは行まい娑婆にゐる内。念佛一遍申た事はなし。親の日に魚を喰ひ。うそ計りついて借た物は返さず。どうして極樂へはおほつかない。併し極樂の近所迄行たい物じや。ア、心細い／＼ウレヒカ、リかう成事とは露しらす合ハル嚙や後にて女房が。けふは御無事の便りも有か合翌日は使の人もやと日を數へ合指折て待焦れたるかひもなふ。死だと云ふ事聞たなら嘸悲しかろ入口惜かろ逢ひたかんべい顔見たかんべいナゼ逢せては下んせん魂魄あの世へ歸るなら今一度嚙の顔見たや夫迄もなく今爰でおれが死んだら後編にさぞや合一九様が困るだろ引合夫も悲し、嚙アも可愛し心一つを二道にカン冥土の道に迷ふとは何の因果か中情なや合ど

ふぞ今一度生き返り嚙と聞の添伏がしたいはいのと身をもだへす／＼り合上たるアハフシ水鼻と涙と合よだれとごたまぜに落て流る、三つ瀬川すへはハルオトシみな切る風情なり。

一六 彌二郎兵衛 富士松魯中述

〇市子の段

三下り草枕タベ／＼に敷捨て合かはる野山の八重霞合箱根をこへてふる里は山また山にナラス隔りし。中地ふじを目先に三保が崎。ウさすがに旅は浮島が中原吉原の名にしおふ白酒歌の拍子よく合ウタふじの白雪は朝日でとける合娘島田はねてとけるとけたらどうするエナラスとけて流れてツキユリ行く水にウ浪の中地花さく富士川を。ウ漲り落す高浪に往來の人をユリナガシ留めけり。色爰に彌二郎兵衛喜太八はのらりくらりと旅鰻。カノ唐人の川留に合煙草すば／＼フシつぶやきて詞コウ彌二様。繪の付かぬめくり札の様に。よくねる。ナント此川も。い、かけんに明そうな物だ。サレバ。段々と旅人は多くなる。宿の手當は悪し。モウ／＼あき／＼とした。違いねへ／＼。コレ彌

二様。何と出来ない相談だが川端へいつて。清姫をやらかしたらどうだ。ナニ。清姫とは何の事だ。ソレお前日高川の淨瑠璃を知てるるで有ふ。チ、イ／＼其船渡してたべ。早ふ／＼と。ヤ是は面白い。そんなら爰で下稽古に。おれが船長になり。懸合にやつて見やう。サア／＼喜太八。始ろ／＼三重着にけり早色月代も差登り色隈なく見ゆる向ふの岸小船繫で船長がハル笠傾けて眠居る。色嬉しや此川越行ば。上方迄は一のしと。聲をばかりに。詞チ、イ／＼此川早ふ渡してたべ。早ふ／＼と呼はるに。色寐耳に悔り彌二郎兵衛詞誰だ／＼。早ふ／＼とけた、ましようおこしやアがる。たつた一人の船賃とるとて。此川留に船を廻せば。腕も堪らず第一危ない。川が明たら渡して遣る。イヤ、川の明るを待ならば。此様に息勢引ばり頼みはせぬ。伊勢參宮から京大阪迄。ぶらり／＼と行ねばならぬ者。ちやつと渡して下さんせ。ナニ上方筋へ行といやれば。今度江戸から來た二人のなまくら者。ヤ夫なれば猶ならぬ。コリヤ此川留の内。有丈の路銀残らず遣切らせ。行きがけから乞食させるのじや。渡す事はな

らぬく」と。フシつくとどなり。コレナウ夫はカン胴慾じやたとへ此川こした連。そなたに損も難儀もかけまい思ふ所へ早ふ行たい元よりしれた苦しがり。ハル江戸を出る時尻くらいギン神田の土地をこそくと夜逃同然漸々と。才覺したる此路銀遣ひ果した其上は右や左の旦那様いかに酒がすぎじや迎薦かぶりも中くらい。乞食をしても大食ひ少し計りじや食たらず餓死ふよりの外はない不便と思ひ。カン此川をこして下され渡してたべ慈悲じや情じや是じやくと手を合せ拜みつ詫つ身をもだへヌエフシどなりちらすぞ間拔なり。詞やあだやかましいとんちき野郎。叶はぬ事をぐづかはと。とこ吠たり喋つたり。息筋張るので寐られぬ。たゞし渡さにや餓死氣か。コリヤ面白い。おりや今迄。人間の干物を見た事がない。さらば人間の干物が。所望じやくと。喧嘩フシ仕かけと見へにける。色今は詮方難儀の場所。詞ホ、ウ渡さぬ迎是迄來て。のめく、江戸へ歸らうか。川渡らいで濟さうか。此水底へ沈まば沈め死なば死ね。詞念力通ふさで。置べきか。コハル百尋千尋も何の物は渡て見せんと身づくろい

禪しつかと引締て川へざんぶと飛込ふ詞と思ふたが飛込ねへ。ナゼく。泳をしらねへ。アハ、と、大しくちりだ。アハ、と、ギン笑ひの内に弾出す隣座敷の三味線に合耳時て彌二郎兵衛そろりと覗く襖の穴。色小聲になりて詞コレ喜太八。マア滅相な代物だ。ナニ彌二様女かく。ヤ女所か。美しい震ひ付く様だ。ヘンうまく云ふぜ。うまい所か。年増でも新造でもお望次第。コレ彌二様。少し見せねへ。マア待てく。此穴はおれが借切だ。コウくそんな意地の悪い事を云はずと。拜むから少し見せなせへ。マア待てく。是さ少し見せて。マア待て。少し待つたと引合はづみ間の唐紙押倒し隣座敷へ眞うつむけ將棊倒しに轉け込む内には悔り三四人女の聲の仰山に桑原々々世直しと引取三重上を下へと喚きけり亭主も驚きかけり此座の様子合點ゆかず詞おまへ方は何となされましたと。色とはれて替女が金切聲詞私らは三人乍ら目が見へましないから。どうした事かわからぬが。雷様と地震殿が一度に落ちたと思ひました。アイタくく。目こそ見へぬが。鼻筋は横の方へ通つて。

よい鼻とほめられた。大事の鼻を擦削いた。アイタアイタ。是お杖様私は又問屋場の馬が放れて。爰の二階へ。鼠を取に來たと思ひました。アイタく。額へ瘤が出来た。アイタくくと目無鳥口を揃へてフシ轉づれば。色傍に開居る女連。云はずと夫と市子が差出。詞私共は替女様達と道連に成り。泊り合た巫子でござります。アノ二人が唐紙を押し倒し。脊骨の折る程打ました。女と侮り馬鹿にして。濟ぬくと猛り立つ替女は猶更見へぬ目を眞白にむき出しきかぬくと木綿襷神子は疊を笹ばたき叩立られ兩人は向ふへ疵を付ながら入痛入てぞフシ居たりしが。色彌二は亭主に打向ひ詞イヤモ承りまして驚き入ました儀でござります。一體此者儀生國より能存知。體成者に御座候故我等同道に罷出。貴殿方に一宿仕候處實正なり。然處此者寐ほけて小便に起。戸まどい致し。皆様にびろう成事推參仕候段。何共申譯御座なく。是によつて誤證文。奉公人請狀ごた交如件と。色云より市子は。晝日中戸まどいする馬鹿者が。どこの國に有物か。イヤモお疑は御尤此男には取付物がござります。一ツ體

親が殺生好で。親の因果が子に報ひ。鼻と木兎と一時に取付き。晝日中少しも目が見へませぬ。時々木兎の鳴くまねを致します。色と云より喜太八まじめ顔。詞五郎助ホウく。アレあの通り。五郎助ホウく。黙らぬか。誠に困りますと色聞より亭主おつ取て。詞庵相と有ばぜひがない。皆様がふしやうして。然しながら。少しでも疵が有ば。膏藥代の其代り。江戸のお客様は。南鐙一片はづんで。川留の慰みに。替女様に何ぞ歌はせ。又市子様には。お前方の女房様か又色女の生口でもよせてもらひ。夫で雙方中直りとカ、リ聞て皆々氣もほどけ丸く納る車座にギン早持來る酒肴。さいつおさへつさかづきに飲やうたへや一寸先は闇雲替女が高調子神子は鈴振るかん徳利又色替りめのおさるさうさい一ツ拳しよしめく。よいさのお廻り合ツタエ、酔たくく。五勺の酒に。よいくく。よい機嫌カ、リ旅ねのうさも何所へやら。ウさすがにながき春の日もギン忘る、フシ酒の徳ぞかし詞サアく。是から。お市様の口寄せのばんだ。彌二様先へと汲來る下戸はしらぬか水の味市子がまへに合手向山合

紅葉の錦縫箔（ねむき）のふくさとくく下ギンあづさ弓抑謹み敬ひ申奉る。上は梵天帝釋（ぼんてんたいしやく）四大天王。下界にはゑんま法王五道の冥官。二上り我朝は神のはじめ伊勢には神明天照皇内宮に四十末社外宮に四十末社雨の宮には風の宮月讀日讀の御尊天の岩戸は大日如來出雲の國が大神合神の数が九萬八千七社なり。佛の数が一萬三千四靈の靈場驚かし爰に請じ奉る。詞此時此方の先祖代々の佛達。弓と矢のつがい親。一郎殿より三郎殿。ばんも替れ水も替れ。かはらぬ物は五尺の弓。一打うてば寺々の佛壇に響く納受。詞ヤレ懐かしやよく水を手向て下さつた。私が枕添殿も出たからうけれ共。此節は地獄の門番に成て。暇がないから。私計り出申した。コウお前は誰だ。ハア私は水を手向殿の爲にはからの鏡だ。彌二様からの鏡とは。お前のお袋の事だ。ナニお袋に用はなし。ナニからの鏡に用がなくば。私はそなたの枕添だ。コウ符牒ではわからねへ。枕添とは何の事だ。彌二様お前の死だか、アの事だ。ヤレ厚かましくも。よく水を手向て下さつた。私（は）はこなたの様な生地（いぢぢ）無に連添て。一生食や食ふすに。寒く

迎に來ます。ア、是々とんだ事だ。遠い所から必ず必す。迎にくるには及ばぬ。云たい事は澤山あれど。あの世の使がしければ。彌陀の淨土へ歸り申と。口寄が冥土の道からくら闇のはぢをわざく。明るみへならべ立られ彌次郎兵衛（引合佛）になつた山の神死でいとほさき迎はあんまり苛い。カン情ない結構はつこの極樂より。勝手のしれた此娑婆でモウ百年も其上も生ると覺悟極しをどうして亡者になられふぞ。おりやいつ迄も死はせぬとスこほす涙は大粒に入玉やがしやほんのフシごとくなり。折にさはく。表の方そりや川明と夕空に合中待あぐねたる人々はてんでに荷物杖笠と騒立られ詮方もなく。立て彌次郎兵衛ちつとも早くと身拵へ喜太八聞くより。詞コレく。彌次様。フル晩にもしれぬ此日和又留られては大難儀中かねて夜越しと存ずれば川端へ参りし時。合ギン四十七騎の其中にて竹森喜太八と名乗懸け舟賃出さぬ其計略ホホ、適れ。さりフルながら一本ざしでは叶ふまじ油斷大敵イカニ。詞何さく。そこは拔らぬ喜太八が手だて此ひきはだを斯ふ延せばどちらから見ても刀と見へ

成ても裕一枚着せた事はなし單物一つア、裏ほしやく。堪忍してくれおれもアノ時分には工面が悪く苦勞仕死にしたが残りおしい南無あみだ。彌二様お前は泣くのアハ、こりやおかしい鬼の目に涙だアハ、忘れもしないそなたは横根を踏出す私はしつをかくヲ、サあんな因つた事はなかつた思ひ出してもぞつとする南無あみだ。たつた一人の子寶はひいきよして瘦こける。米はなし。日なしはせがむ。家主からは店賃の催促。ア、もふ。云て呉るな。胸がさけるやうだ。南無あみだ。夫に私が奉公して折角溜た着物は。みんな置なくて仕舞ひ。質は逆には流れ中さぬ。其代り。手前は結構な所へ往て居るであらふが。おれは今に苦勞がたへねへ。南無あみだ。ナニ結構所か。小い石塔は建て呉ても。寺参りはせず。付届けもないから無縁同然。今では石塔も。垣根の下になり。時々犬が小便しかける。ほんに長死をする。いろく。な目に合ますは。ヲ、尤だ堪忍してくれ。南まいだ。其つらい中で。そなたの事は片時も忘れぬ。どうぞ早く冥土へ來て下され。やがて私が

る今一本はおまへの脇差コレヲちよつくら一寸とかうさして侍なんぞはどでごんすヲ、ノル出來た。氣の毒ながらおまへは小者荷物かついで彌二郎兵衛参れネイ川端さしていそぎ行く。

一七 井酒屋小七（浮名）初紋日
山科屋菊の井 鶴賀若狭掾直傳

魚詞およそ萬物の敷定れる天命ありこれを。定業といふ。むかし目蓮尊者産土の民の戰死を憐み。はちのこに數人をこめ通力をもつて上天にかくす。佛とよめてのたまわくやみなん。定業なりと。すなはち軍はてのちおろして見るにことく。くはちの中に死す。其つう力もさだまれる。中地命の綱は引とめず。セツキヤウまして上ほんぶのハルスオス迷ひのたね。中ッ佛も元は若盛りウギン羅喉羅が母はありけらし。ハル地たが世にたれかふみわけて。ウのハルほる戀ぢのやましな屋。名もきくの井とふかい中。中地いつわりのなき本町の。井酒屋ハルの小七とて屋敷通ひのオスやさ手代。ハル正月中はやくそくの日數もかさなる身のふしゆび。ッ人こそしらね袖のうみハズミニリナガンふか

きなさげぞ。わりなけれ。色詞のたまく男がらうかより。
 詞申しくだんなこれごらうじませ。あすは十四日年こ
 し。けづりかけ柳のもとのいつちふとい所。かのおたか
 ら物にこしらへた。まづお二人をいわひましょ。とんと
 んとんとん。シドウケななが大がね持のだんなじやによ
 つて。お心も大きし。何かも大きし。とんくとんと
 ん。そこでの菊様も大きなお仕合せじや。ハ、ハ、ハ、
 これはちとぶるんりよく、カリ遠慮るしやくも中の町。
 すゞき屋から。詞お見まひ。アイないぎ申しやす。御き
 けんよふおあそびなされやせ。これは又お慰みにあけや
 す。アイ申しきく様おまへ様へもよふくおこゝろへ申せ
 とでござりやすどれく、これはうまそふな物。マアだん
 なよりさきへしよこなめよふ。ハアてんく。うまくて
 うまくてウタどうもかふもならぬこれはさ。詞ハ、ハ、ハ、
 さあ酒々てうしく杯。又わつさりとのめくくく。
 カ、リサアサおせく、舟やども打こんじたる大騒ぎ。酒も
 たゝみが半ぶんは。ハルオトシのむころにこそなりにけれ。
 色詞すこしはむりをきやくのくせ。サアきくの井。これで

一つおのみ。おがみんすこわらしい。ちやわんじやおき
 なんし。なぜおいやかへ。あけてがわるいからあがらぬ
 はづさ。わたし共でもさうおうに上つてくださるおかた
 が有まい物でもないに。そんならおよし。サア見物にゆ
 かふ。エ、モばかりしうござんすにへ。アイわたしやば
 かさ。利口なら揚屋でさみせんひきやす。おつとよし。
 こゝをわつちが相の手で津の國のく、鼓が瀧に來て見れ
 ば西へもちりからく、たんほ。東へもちりからく、た
 んほ。たつちりてん。たつちりてん。詞申上ます。何
 じやく。御門前に米がござります。何俵ある。昨日三
 俵けふ五俵。サハギヨイたゝ、たんほゝの花が咲とさ末は
 んじやうの千代のみかぐら。ナラスカ、リ地たいこ末社の口
 車。まわりのよいも山ぶきの花のひかりに御きけんを。と
 りん、取もつ中直し。さあおやすみと手を取るやら。す
 ねあふかたほにそりやおわらひ。てふさやよふさやわい
 わいよいくく、おなか。めでたうお床がおさまつたと
 ウカハリオトシみなく、座敷をウ立にけり。地早ふけすぐる
 はるのよの。ハル地短き二人が命ごとよそにはスエルしぬる

三下り。三下りウタさきの世で。人お思はぬむくひにや。か
 あいと思ふ男のくせに。しやうのわるいに内からはせ
 く。詞アレあの座しきで心よふうたふを聞くも此世のな
 ごり。ほんにかくなるしるしにや。此正月の二日にそれ
 そなたのさしぐしをさすひやうしにはのかけたも。思へ
 ばしぬとのしらせで有つたよのふ。サイナおまへがつね
 にこゝろひきに。内かたのしゆびがわるい。死でくれく
 とじやうだんにはんしたが。今宵はほんの事に成つた
 かいな。申ほんの心でくるきやくさんを。ウギンいやとお
 もふもむりなれど。どうかすかねば其夜のつらさ。ギン
 いとど戀しと氣をもみぢ。まゝにならぬは勤めの身じや
 物。ほんにうき世じやへ。ナラスカ、リあれあの歌を聞かしや
 んせ。まゝにならぬはうきよとハおまへとわしが身
 のうへを。うたはれたるもはやむかし。中ッあさなゆふ
 なの身じまひに。ウほうばいさんがたハルてんく。す
 いたス男の噂にも。合わしがおまへをいはぬ間は。客の
 ざしきに入出ててもほんにしばしもあらばこそ。ほか
 のつとめはいやましに思ひをふかくそめこみし。はだぎ

のものにしんじつのうそでない氣をさとらんして。ふか
 いなじみとならしばのもゆる思ひをひや酒におしてとめ
 ときあさごとはてまいにち屋敷がよひする身なれば。
 どふで晩にもあはれる物。おれも居たいは山々と。ソレ
 そふりつばにいふて立しやんす。ウギン其お姿を見おくつ
 て。大もん口に立わかれ。おかほの見ゆるまがりどを。
 まつス氣になればはてしなく。もはや見へそなものじや
 がと。のびあがる内入通らんす。うれしやお顔と見かは
 すまも。はや行過しおも。カンかけの。見へぬつらさには
 んにまだ。いひたい事があつたものと又見る顔を待兼ね
 しに。ひとりきやくにてぬしさんが。ふしゆびなときは
 身づまりと。おやかたやりてにせきせかれ。あはれぬや
 うになりしより。ウよるひるわかすくよ入くと泣て明
 してゐたわいな。たがひにおもふねんりきがといてく
 れからござんしても。内からゆるしてあはせるを。よろ
 こぶまもなくおまへのしゆび。かくなりはつる此世では、
 入よく入く、そ入れぬフシゑんかいな。ニ上リウタたより下
 にふみをおくるさへ。うへのふうじもねんウ入れて。上

かよふ神かけゆくすゑかけて。おもひもふかき川竹の。流れよるべのさだめなやナラス。カ、リさだめなき世に定めある。ちしご近づく身のあわれ 詞アイはやさみせん音もやみ。ほかのざしきもねいりばな。下ギンしづかによるととり出す。カン此しろむくのきそはじめ正月ものにひきかへてッめいどのたびのはれ小袖。ごぞのしはずのむりわざと。ひとつうわさにならぬやう。ウつまも。たもともおびと帯。クリ上むすび合せし二世のユリゑん。みらいはひとつはちす葉の。うてなにのほる三つぶとんよぎ引かつぎふしにけり。

一八 朝鮮屋新七（ちんしち）唐模様形見振袖（からもようがたみふるそで）

鶴賀若狭掾直傳

二上りやんいきろんすう。るんなんどこらつうくつんなんつうかんなりらくつんばあく、合まんるんなん。かんなりらくつんどこらつうくつんばあく。まんるんな。うたふナラスはぎはおくざしき。詞唐（から）の使林長明（しりんちやうめい）。とうりうのうさはらしと。つうじ下くはんをたいこにて。カ、ウたひつまひつけん酒に。ウうつ、ぬかしてゐつゞけも

かぶろやりてまで。われもくとたちいづれば。詞さて此たびとうじんらいてうにつきしんもつしなじな。まづてうせんの大にんじんのもりぐちづけ千樽（せんずん）一疋とらひやう二疋。花さくねつきのきやら五ほん。みのなるゑださんごじゆ十本。小人じまのふうふせいは六寸なり。からし、のけぶとん三十枚。しやくせんだんのすいふろおけ。れんりの木のすりこ木三本。めい、てうのひよこ一羽、かうしじひつの大がくろんご。一里四方のもふせん百枚。五色のこほりざとう千斤。じやかうねこゆめくひばく。じんやうの江のいきせう、二疋。た、し内一疋は下戸にてくるみもちをゑがひとす。おとしばなしをするあふむのとり一羽。八でうじきのらくがん二箱。八尺まはりのこんべいと一折。きりんのかすづけうすじほのにんぎよ。ほうわうのみそづけ。りうもんいきごい。たけ一すんの龍の子一疋。とらのかはのふんどし千筋。其ほかめいぶついろく。又つうじ詞のしだい。ちんぶんかんとはむつかしい事。もてるとはおもしろい事。こはとはびつくりする事。あやなすとはだます

ころにまかせぬすごろくの。さいのめよりも女郎に。ウふられてからの客人もから オトシさはぎしてゐたりけり。色詞ころは人王三十六代。孝極天皇の御宇とかや。とうし來朝ときこへしかば日ほんの手がらくにのはれと。しよこくのまちく、びをカ、つづくし。錦のまんまくきんびやうぶ。ウひきわたしたるさんじきを見にくる人も身をかざり。にぎはふさとはなウがさきの丸山にかくれなき。ウわこくやのにしき木は。上ギンなさへうたてきから人の。ハルあけづめながらおびとかで。上ふるはしぐれか。上入なみだのあめか キンぬれゆへやつすなりかたち。中てうせんやの新七は。ハルウおやのかんきにあいかたの。ウ心をきいてともかくもと。中ふるあみがさに小ぶろしきつつむ。ギンめによみうりとにせむらさきのウッキユいろさはぐ。わこくやの ヌエツカどにこへはりあけ。詞とう人のぎやうれつく。つうじ詞のしだい。ならばにしんもつたから物のしだい。めいさいにしろして上下で六せん。一さつで三せんばんりのあなたまで。つぶさにしれるとうじんのぎやうれつと ヌウりたつる。カ、リ女郎

事。くろめるとはうそつく事。おいらがとはあねの事。おがみんすとはあやまる事。しみく、すいたとはかあいひ事。ぐつとあいそとはいやな事。ふるとはあはぬ事。おたふくとは女をわるくいふ事。とうへんほくとはたはけの事。まだ此ほかにだん、あり。上下でいさいにしますとカ、ル口にまかせてよみたつれば。見にでたほどはめづらしがりハルトシみな、かふてぞいりにけり。詞それと見るよりにしき木ははしり出てひとつらへ。これよみうりさん。おまへにはとうじんのしんもつよりだいぶんこつちによふがある。それしのぶこれおたつ殿。かならず此客にがすまい。チットやりてがいきすぎて。ふるひやつしじやおきなさい。ほんにあきたこのなりと。あみがさとらんと手をかくれば。ア、これくよみうりのあみがさはとうじんのかさかんむり。ぬがぬがれいぎとこしかいめ中の オク、しきへとをりけり。中地ほどなくざしきのしゆび見合せ。はしりきてにしき木は。コレおたつどのしのぶもおくへいて。わしをたづねばよいやうに。たのむくと人をよけカン詞コレよふきてくだ

んした。あ入いたふてくはないてばかりいたわいのと
 スエルいだきつけば。色新七も。共になきたきばをこらへ
 つきのけて。詞唐人のるつゞけく。ならばに身請のし
 だひ。しんもつたからものに目をくれて。ほかのきやく
 はひとりもとらぬかわひやくまい。ひごろのことばはう
 そのかわ。てもあついつらのかわ千枚。かのくぜつもち
 はもちんぶんかんじんのとこいりには。つうじことばも
 いらぬけな。もふからの女房になればほんのこれがあわ
 びのかいからおもひじや。どうでにつほんじんの手に
 いらぬ。あつちものじやとフッあてこする。色ひとすぢご
 ころにせきのほり。かほはあかぢのにしき木は。おとこ
 のむなぐらひきよせて。詞コレ新七さん。お前とわしが
 このなかは。いまさらいふではなけれど。申ふとあひ
 かかりししよかいから。合上しみくすいたおとこやと。
 合おもふてわしがはづかしい。合おびもこころもうちとけ
 て。ねむらであけのおきわかれ。すぐにそのよにこなさ
 んも。ござんす裏なきおころにッほれてあふとてほう
 ばいに合なぶられるのがたのしカハリギンみにつとめのう

んのがほ見てうれしなきあとの。ゑかうをたんとたの
 みんヌエッすすとすがりついてなきければ。申カハリおとこ
 もなみだにこゑくもり。詞オ、どうりく。心におもは
 ぬあてこともそなたのふかいこころざし。しつてうたが
 ふそのわけを。はらたてずときいてたも。あひそめてよ
 りかたときも。たがひにかほ見ぬ事もなく。のほりつめ
 たをひとくくの。るけんきかねば親いちもん。さうだん
 きわめあとの月。かんどううけてうちを出で。しるべの
 かたもことはりゆへ。たれよせつけるものもなく。こゝ
 へもさすがこられねば。フッ申ほうく流浪するうちにも。
 ハルとかくわすれぬそなたのかほまいちど見て。ッそれを
 此よのおもひでにしぬるかくごにはぢをすて、あひにき
 た。いまきくとをりのそなたのきならいつしよにおれと
 死ぬるきか。それがきいたいくと。なみだながらの。
 カン詞のはし。カンスきいて女はうらめしげにッギンおとこ
 のかほをうちヌエ色ながめ。詞そりやお前どふぞいの。た
 とへこの身に此やうな。なんぎな事がないとても。お前
 がしねといはんすに。何のいやといひそふな。わしとお

さもわすればはて。申よごと日上ごとくウちよつとでも。申
 おかほ見ハルぬまはないものが合ッひとつきあまり遠ざか
 る。あいてこぬのかふしゆびなかと。入あんじてふみに
 たづねてもッしれぬうはさをギンゆふなぎにやくや入もし
 ほのッまちびとも。いくたびかかくすがたゑに。たてた
 るはりのかひもなくなみだの水のいきぐちや申あづさの
 合ゆみのつるハルきれて。あわぬきならば今いちど。よん
 でとらへてはらいつばい合うらみをいふてくひついで
 と。けふまでおもふたこなさんの。かほ見りやいとしい
 うれしさにうらみもわすれてるるものを。かへつておま
 へがあてこすりわしがこころをしらぬかなんウぞのギン
 ふにあのにくらしいくちはいのふ。合申いまおくにるる
 とうじんづら。いろくくどくうるさくにむりにのんだ
 るひやぎに。つかへおこしてふりつけれど。けつくの
 ほつてうけだして。つれてゆかふといふわいの。ッお前
 にそふならおにすむやま。人くううをのよるしまでもッ
 かなしい事はッなけれども。あのおそろしいよそのくに。
 なんとゆかれふわしやしぬる。かくこのうちにもこなさ

もふてくだんすか。あんまりむごいうらめしい。とはい
 ふものこのカルよふに。申ウみじかいゑんとはしりも
 せで。上あふたびごとにほんほんに。女房にもつてくだ
 んすかと。くどいことばにむつとぎのウギンあちらむかん
 すひぞりから。くぜつはあすのめつゞけの。たねとなつ
 たがお身のあだ。カハリうぶがみ様がすいならば。合いつ
 ものやしろへよらんすときなせ。すへながふそふよふに
 むすんでおいてくだんせぬ。合上かみも合ほとけもまゝな
 らぬ。うきよはあだとおもい切り。みらいのながいちぎ
 りこそ。上ギンさいこのねんにあるものを。カンほんにそ
 ふぢやとすがりつき。いだきしむればいだきカンハルヲッ
 しめたがいの。なみだぞはてしなき。色詞女はなみだお
 しぬぐひかみそり二てうとりいだし。うはぎのかたをぬ
 ぎければ。下にめなれオンぬからフッもやう。色詞このふり
 そではかゝさんのいまわのきわまできさんした。とゝさ
 んのかたみぞと。わしがもらふてけふまでも。ふたおや
 にそふ心で。はだみはなさぬこの小そで。おやおもふ
 ていとまごひと。ひたいにあてつだきしめつヌエ忍びな

みだの色おりこそあれ、うしろのふすまおしあける。おとにおどろきふりかへれば。とうじんきやく林長明。でるよりはやくすがりつき。カンやれなつかしのわが子やと、なくもなけれずふたりはびつくりとびのくをひきとめ。詞ヲ、おどろくはもつともく。われこそそちがて、おやよ。しさいはせんねんらいてうせしおりから。このさとの女になれそめ。あさからぬちぎりにてそちをもふけ。きこくのおりからかたみにと。其小袖をおくりしが。さては母は死したりしか。色わが子とも知らずひよつとまあ。いかなるふぎもあるならば、わがくにのはぢちくしよう。いはれん事のはづかしやとはらくとなきけるが。詞娘にそへばその元も。我子におなじむこしうと。娘故のうきくらういたはしさよ。幸ひ身受のそうだんせり。すぐにうけだし我方よりきつとこんれいたさせん。まづそれ迄の内いはひ。こんれいのぎしき取むすばん。ていしゆくとよばはる聲、ウカリ、おめでたいとのけいはくごへ。ふたりはうれしさわらひごへ。かんどうせせうも相すんで。おつけ世間おしはれて。ふ

てきて。直段もきはまりあす銀も受取るはず。それともたつて望みなら銀持つて朝の間に持しにござれと云て下され。そればかりにきましたと。色云すてかへるを。詞これ申し。其刀は此月中。外へうるなるまいと男どしの云ひがため。今さらそうおつしやつては。おまへも立すこちも立す。何分待つて下さんせと。わぶれど聞す詞イヤ立つ立たぬと云つてからが銀づく。此身代で五十兩持つ力なし。現金に賣がこつちは由兵衛殿。もどつてなら断りにきたと云て下されと。にべもしやくりもないしやうを。ハルヲト見さがしてこそ立かへる。地詞小梅はくはつとせきのほし。情なやあの刀外へやつては夫が立す。とはいへ急に銀はなし。ウレヒガ、りけふに限りて。カン由兵衛殿戻りのおそやと門に駈け出で。立ッかへりては及ばずもしあんしがくの銀ごとは。胸もせほねも一時にスエルさけるよりなをつらかりし。ハッマはや入相の鐘故に。中地命とらる、長吉は。ハル夏の盃かやともしびを。ともす時分にきスエルかゝりて。詞姉様お内にござるか。色立いるおと、はじやまながら。すけなふも云はれすほ

うふのさかづきおや子のさかづき。よめむこしうとうちそろひ。クリ上からとにほんのよろこびごるふしぎの。ゑにしときこへけり。

一九 梅の由兵衛 長吉殺し 茜染野中隠井

鶴賀若狭掾直傳

色くちにつの。中地たまるるみやうや梅やしづ。ハル由兵衛はそとへ出あきなひ。タ、キ小梅は内へあつらへのちやぞめ手染もも、かはに。中地みのいるしごとキオツめうばんと。長地出きねばのばし人の手もかりやすかけてギンしほり出すツナギ身のあぶらよりするわざはしづも ユリナガシききやうとそめなせり。カ、リおりから来るはとぎやの佐介。色とくいまはりをさしおいて。詞用有つてきました由兵衛殿は内にかと。色たれじやをまたすつと入る。目ばやく小梅は走り出。詞主はあきないのるす。何ぞ用なら言ひおいてと。色あいさつすれば 詞コレおか様。せんど新地でお目にかゝつた西口のどぎや。これの由兵衛殿に頼まれたしのぎ藤四郎の刀。此月中は外へうるまいとやくそくはしたれ共。にはかによいかいてが出

れくと。詞オ、よふおじやつたの。いつみへてもあいそもなし。ぬのこのうらもそめておいたちか内仕立つてやらふ。ぢよさいではない忙しさと。色ことわりいへば長吉は姉のかほを打ながめ。詞お前はいかふやせがきた。心持でもわるいのか。但しは何ぞくに成かわづらふて下さるなといへばスエ小梅は打しほれ。詞オ、兄弟とてよふとふてたもる。此中そなたにも咄した大切な刀。銀渡さねば手に入らず。ほかへやつては一ぶん立ぬと。ぬしもわしもいかい辛苦。これを思へばお主程世に大切なものはなし。言ふ迄はなけれども。すいぶんと奉公大事。おやかたのものちり一本をまつにせまいちがへまいと。心願かけつとめたも。由兵衛殿が其むかしぼう公した其ばちで。今思はずもかふした難儀。そなたもおつかいのもどりなら早ふいんでおへんじいやと。カ、ヨいけんと共にいなしかけ。ウ臺どころへいかぬ苦をスエフシ又もあんじてるたりけり。詞いへく、わたしはひるからひらのへ。かわせのかね請取にいて。日がくれたればここにでも。先にでも泊つてこいとばんとう殿の云ひ付

け。則ち金もコレこゝにと。色首にかけたる小ざいふをどつかりおろせば小梅は悔り。詞シテ其金は何ほ程ある。小ばんで丁度百兩。アノ此金が。ム、たんとあるのふ。有る所には有あまり。子供のそなたに持あるかせ何とも思はぬしんだいに半時でも成つて見たい。人が見るとつい取るぞや見せるが目の毒。ちやつと首にかけてるやひるから出たらひもじからふ。ドレちやを入れてまゝおまそと。色立んとすれば。詞イヤ私がわかつてたべませふ。ちやのある所もしつてゐると。色かい立つてかまの下カカルたきに行かけうしろかけ。見おくる姉はあの金を。ハルならばせめてはんぶんの。ウ主はどふしておせいごと。みやる表へうそギン引くと。カ、リ一ツかの桶にみやうはんの。ハルつゝとはうきをかんばんにわが門迄も。上ギンうめやしぶ。ハルあかね。金のツナギさいかくがてらには日ツキユリぐれて道もいそがしく。色もどるやいなや。詞山兵衛殿西口のときやがきて。刀のかいてが俄にできあすの朝迄かいとらさばさきへ賣るとのことわりやくそくちがふとせつばしてもとかく金づくかねしだいと云切つてい

にましたと聞くより悔り夫うらしてよい物かと。かけ出るをノウ待て下されと。ウレ引とめてなみだぐみ。詞其いきほひでやつてはけんくははんぶん。なをさきにいちがたつ。やぶれかぶれにするきかと色おさへなだめて。詞コレ私^{わし}がさし出た事ながら。元此刀はぬすみもの。こゝでのかいてをぎんみしてお上のさたにするならば。とうぶんは金入すに手に入事も有ふかと。きを付れば由兵衛。詞おろかの事をいふ人そうろけんにかけれぬしさいといふは。先だつてお國よりせんぎは古手やの三ぶが方^{かた}。ぬすみうりしは此方^{このほう}にめあてあるとの御状。いかにもこちでも出所をさがしてみればぬすみてはおく様の兄御。お國にござる伴^{ばん}七殿。とらへてみれば我子も御同ぜんの御兄弟仲。おく様はだんなへたゝす。だんなはお上へ言譯なく。せつぶくかあほうばらひ。そこを思ふてないせうで取もどしくれ。ウレ詞山兵衛。命のおやぞのおたのみ。おきづかひ遊ばすな此月中にかねこしらへ。お手^てに入ふと受合ふた詞をほうぐに賣れましたとどふ云はれふいきてもしんでも。御恩の旦那やおく様がおいた

はしい女房と。入かたればウレいともになみだぐみ。詞そふあれば尤もわしも思はぬつみつくり。最前^{まへ}吉がかはせ百兩受取てきました。とみせた時の其ほしさ。よその子ならばもぎ取て夫にやつて悦ばせ。くを休めてしんぜふにと。見ると思ふたおふちやくぎ。是を思へばどこやらで娘殺して金取たとうはさもこんな事であると。色さんけ咄しも聞とがめ。詞何と云ふ長吉が金持てきたアイそうしてもういんだか。いへく道^{みち}の用心を思ひ今夜はこゝに泊つてゐますム、く。よいしあん。わけて此中は物騒^{ぶつそう}なあすとふからいんだがまし。扱^{あつか}と何しよカイ。おれもあす渡部^{わたなべ}ばしへいてま一度むしん云てみよ。イヤまづとうぶん手つけを渡し二三日つないでおこ。オ、夫が上ふんべつ一寸延ればひろ延るあんじて濟ぬは金事と。了簡^{りょうかん}付るもスエテ夫のき休め。色由兵衛も胸打ちくつろぎ。詞何と小梅。十二文呑でねよかいの。ホンニいつそ夫もよからふドレかふてきませふと。色小だなのとくりかい取て心せくまゝ足早に。辻^{つじ}迄行て手に持し入物^{いれもの}。色みれば。是は花立。はつと思ひ立止り。詞いつにない此そさう。

一本花の入る事がでけふ端^{はた}かときにかゝり。徳利を取に戻らふか。先で入物。からふかとカ、リ行つ戻りつ十樂の。ハル町の横町思はずも酒や。の合、ヲクリ方へ走り行く。色詞山兵衛は門口の掛金かけておし入の。脇ざしそつと懐へかくしてかつてをさしのぞき。詞長吉きてか。こたつに火もある寒いにこちへと。色ねこなでの。こへに引れて。詞オオ、お戻りなされしか。姉様どこへと立出る。イヤ女房は今使にやつた。こゝへくと色かたわきへ連行き。詞コレ長吉今のは有るか。持てるるか。今のとは小ばん。小ばんは懐に有るかと云ふ事。親方の物大事にかけたがよいぞやと。色云ふにさすがは年足らず懐のさいふ取出し。詞金はここに肌放さず。首にかけてをりま^す。地中とみせたが因果。コハルぞがみの立つ程ほしく。ノル女房のかへらぬ内と脇差に。手をかけてちやつと引。抜かけては。おし隠し。心は早鐘時のかね。初夜かハリはんじかヲトシ半亂^{はんらん}のみだれのやいば折し折から。色女房小梅は門の戸を叩いてわしじやこゝ明てと。云ふは慥に姉が聲。待んせ明ると長吉が。立て行を後から。コハル

ソルせきにせきたる三刀四刀。うんとつけにかへる音。胸にこたへて門の戸を。引しやなぐれば掛金外れ。ハシルあいた口さへ塞ぐ間の。ないにうろたへ由兵衛こたつふとんを手おいかぶせ。詞酒々かふておじやつたか。オ、早かつたのふと。いふ聲も齒の根も合はぬ。ユリ風情なり。詞オ、おそいか早いかしらね共、みればいかふ寒そふな。一つ參れと茶碗さし出し。受る人もつぐ人もギン共。にふるふて一いきにぐつとほしたるひや酒は。ねつてつをのむ思ひにてスエル五體に汗をひたしるる。ウレヒ小梅は色め色詞みて取れば門口しめてあたりを眺め。入胸に満くる涙をば。スのみ込みく、聲シヨルかきくもり。詞コレ由兵衛殿。長吉はもう死切たかいきがするならあはせてと上わつと泣出すこへ高しと色おどろきかへ。詞ム、扱はやうすをさつたな。金が必要ればだんな様やおく様を見殺し。小の蟲をころし大おんほうするこよいのしぎ。おんびんにしてくれよ。お刀さへ取戻さば弟の敵ぞんぶんにならふ女房と。ことを分け理をスエル分けて云聞すれば涙をおさへ。詞おんびんにせぬきなら。直にこへを立

なりと苦を助け跡では直に身を投て入さいごはおばせの野中の井戸。ウレヒわしや來しなに。死る所迄みてきたはいのと。カンすがり付きしや入り上たる有様に小梅は身も世も有ればこそ。ハル其やさしい志聞けば聞か程なを悲しい。二親に別れてより。そなたもわしも難行苦行。ウまあ是程で年が明くとはいくつと指を折り入かぞへ待たる此姉がつれそ夫が殺そふとは釋迦でも入よもや。下ハシルマ御ぞんじ有るまい。世界のるんぐはがたまつて夫婦共なり兄弟とも生れてきたかと。クル身をもだへ引歎き半ヌエくどけば由兵衛は。身を切るつらさこたへかね。詞我思ひもふけし事なればいかやうにうらまれども。むりとはさらく思はねども。追付なはめのはぢをうけ跡よりつゞく此からだ。切れともつけとも今では言はぬ。うらみはめいどではらしてくれと。せまりし一句にヌエほつきせしが。たへ行いきの今はのきは。詞由兵衛様。姉様の事入頼みまするとふところの金。なけ出しておちいれば入わつと泣出す色小梅をおさへ。詞コリヤこりや女房ほかへもれてはむごいめ見たるかひもなし。は

るはいの。モ私さへほしやと思ふた金。ウレヒカリ取るはむりとは思はねど殺してとはあんまりな。入むごいしかたじや入由兵衛殿。せめて死目にあいたいと。かけシヨリよつていだしおこし。詞これ姉じや小梅じやわいの。嚙わし共ににくかる。がこへをよふ聞てたも。最前咄した刀の事。外へ賣らすとお國のお主御一家中から奥様から。どうお成なされふやら。そなたが死んで此金が御用に立とい。いくたりともなく命助り。佛も及ばぬ。カン慈悲なるぞや。色お念佛申してたもと入すめなけば目をひらき。詞ノチく姉様。わしは切られいでも死なねば成ぬ事がある。そりやなぜにウレヒさればいの。詞此中きた時だんくの咄し。やせるも金ゆへひんゆへと。聞いた時の其悲しさ。どうぞと思ふ心から。わしや此金は盗んできたのじやはいの。下ウレヒくるとしんじよと思ふたが。親方の物ちり一本そまつにすなとの御るけん。どふもやらふと得言はいで見せびらかしてましたはい。ウレヒカリたつた一人の姉様何ほ程かうかうにしてもしあきはなけれども。ハルでつちの内は自由にならず。ウ盗でやく死骸を隠したしと。ハルマ云へば。ぜひなくウレヒ涙をおさへ。詞我と我てに死ばしよを見てきたと云ふたがゆいごん。野中の井戸へはうむつてやつて下されオ、それそれついこのまゝでやろかいの。イエ〜〜かはいそふに。せめて肌には白帷子これきせてやりましよと。色おし入あけて取出し合。地カ、リけつこウはつこの下帷子。詞此子にきしよとてかいおいたが經合。カン帷子にするはづかと。合入セツキヤウ涙合。ながらにき入せかへる引。合水はぢきにと由兵衛が引。合澁紙だして上包。長地よおけのかはりしづ桶のふたはなくとも二人して合。荷ふて行がそふれいの心。ギンざしぞと抱へ入れ合。長地かふならふとはしらすして入姉さんわしは此これにすみを入たらおとなやく。モウウおまへのくにならぬとギン嬉しがのをきくに付け。くる入正月のやぶ入にはおとなしいかほ。カン見やう物と引ハシル思ふた事いふたことゆめに成たか悲しやともだへ。半ヌエなけば由兵衛も。上地これ今生のわかれとも。しらす別るゝ兄弟の。中はうす茶や。ギン梅やしぶ入ひるの賣こへ引かへて。なむあみだ〜。上なむあみ

だなむあみだ入く合。十楽町の夜の露。のべの。おくりぞあはれなる。

二〇 春日屋時次郎明烏夢泡雪

山名屋浦里

鶴賀若狭掾直傳

タビロ「タぐれごこの。中浮ギンくもに。地心をのせし四つ手かご。ハルほんにそろふ合たかたウと肩。カンおもき戀路もギンガ、リかろくくと。かけると思ふおのが身も。かけられてゐる心どし。ウあへば別れが思はれて。烏はさのみ引にく合からで。ハルあの鶏がめかりせぬ。ウ早く歌ふも客による合。ギンしんきくがさしつめて。中ウッ胸のつかへも今ははや。下おすにさがらぬ揚屋町引。地五丁まちく。ウウ中うはさギンある。時次郎は。山名やを。ハシルせかれて忍ぶたかの目にかゝるうき身ぞ。カ、リ夜の。ユリつる。トメウタカ、リ吉原すめ口ギン々に。上死んでしまへば時鳥めウいどの鳥を聞物を。死なぬ先から先の世を。思ひやりたる涙川ヲトシ心の。カハルそこは人しらじ。調夜みせじたくにそれくの部屋へ櫛箱かゝみ立中のよいどし三人しんぞうまじり寄合て。うき身のうへに取ませて。

客の噂もスエ數々に。調ゆふべの色くぜつ此中の涙ばなしのためいきに。昔戀しと云ふもあり。いつもの事とは云ながら取分けふの身ごしらへかはい、男に見せるのが。ヒロヒウらやましいと云ふも有り。しんぞう子供色あどけなく。調けふは私はすかぬ客やく束でござんすが。どふぞばんにはこぬ様にと。色調くはんおん様をおがんだりまじないもする疊さんくるとあたればおきなをす。咄のこしをおかしさこらへ。調すいたすかぬはまだ早い。なじみの一人づつも取りとめよふとはせず。人の名代に出る計りが手がらじやないと。カ、リ姉女郎の一聲に。ギンねづみッ舞して。合ゆかふなる小袖た、めばま一人は。ウざしきはくやら鏡立かたッ付けまはるぞ忙がしき調さあくもふ見せが出たぞへ身拵がすんだらばはやふ出さんせくと。やりてのかやがの、しれば。カ、リ皆一時にばらばらと。おりるはしごのおとたへてざしきッくもしづかなる。江戸「春雨の。ねむ入ればそよとおこされてナラスみだれそめにしギン浦里は。文セッどうしたゑんでかの人に。長地あふたしよてからかはいさが身にし入みじ

みとシツムほれぬいて。ウこらへせうなきなつかしさ。ウナギ人目のせきのよぎの中。明てくやしきびんのかミスエなで上げく。調ノウ時次郎様此様にせきせかれさぞ氣づまりにござんせう。夫をこらへて下んすも私かはいと思ふての御心ざし。嬉しうござんすかたじけないと。色いだきしむればい引やおれゆへと引しめて。物をも云はずしめあひて後は涙にくれけるが。男涙をはらりとながし。ウ調いつまでこふしてゐたとてもかぎりもなき二人が中。ながるるほどそなたの身づまり。此程だんく、咄す通り國の親仁の江戸表地頭の方へ出す金、二百兩はさておいて。其外一門出入やしき。かたりつくしてこのありさま。そなたもといひたいがいとしいそなたを手にかけて。どふなるものぞながらへてわがなき跡で一ぺんのゑかうをたのむさらばやと。云すて立つを取付いてあんまりカンむごいなさけなや。ハシルこよひはなれて。こなさんのまめでみさんすその身なら。またあふことのおらふウかと。たのしむことも有るべきが。しのふとかくござんした身をいかな氣つよい女子じやとてどうして

はなしやられふぞ。かねてふたりがとりかはす。きしやうせいしはみんなあだ合どふでしなんすかくごなら。三途のかはもこれ此のやうにハルふたり手を取りもろともと。なぜにいふてはくださんせぬ。わたしをこ入るさぬおまへの心。うれしいやうでわしやいやじや。此程おまへの顔かたちやつれさんしたその折から合ゆふべのこのむつ言に。死後をつしむ此白むく。これほど迄思ふもの。ハシル捨てゆかふとはさりすとてはおによりこわい御心。わしややりはせぬはなしはせぬ合ころしておいて行かんせと男のかたにくいついて。身をふるはしてなきるたる「やりてのかやが聲として此子供は火を見るとねむるかと聲はしたなくの、しりて。浦里さんく、ちよつとおめにかゝりまじよと呼たつればうら里はつとおもへどもそしらぬ顔して。なんの用でござんすといへばかやかつこと聲。いや外の用でもござんせぬが。アノおまへの客衆は聞けばゆふべからるつゞけにござんすけなが。若い衆にとふてもどの客衆でやら知ぬといふ今のくぜつのせりふも時次郎様にきはまつた旦那が呼んすサア

ござんせと。浦里が手を取て引立る。となりざしきにて
 い主待兼ね。たぶさをつかんでくる／＼と手にからみ。
 どふで口ではきかぬやつと。つみもむくいも後の世も。
 しらがあたまのこめかみも。はり切る計りのやつはら立
 ハルト引立てこそおりにける。詞あとに大ぜい男共。あ
 の客故にあの様にうきめにあはしやるうら里様ことにか
 かりもよほどあり。それにかくれて二階へあがり。るつ
 づけなどとはふといやつ。引すりおろしてふみのめせと。
 緋ぢのやみのくらがりを。カ、リ無二無三に引出しふむや
 らぶつやらむしるやら。た、きすへられぜひもなく／＼。
 箱ばしごやう／＼つたひおりけるを。直におもてへ突
 出し。門の戸はたとさしかためぜうさすおとぞきびしけ
 れ。詞内にはてい主が浦里をにはの古木にく／＼り付け。お
 りふしふりくる雪ふき帯おつ取り打つ音に。かぶろみ
 どりが取付て旦那様もう御かんにんなされませと歎か
 ぶろも共にしぱり。うら里涙の顔ふり上げ。詞私が身は
 ぜひもなしみどりに何のとが有てあの子は赦して下んせ
 と。色いへばてい主も不便さと思へどわざと聲あらく。

思ひきられぬ。いつそ添れぬものならば一しよに死にた
 い時次郎さんころして下んせしにたいわいのふ。雪きの
 ふのはなはけふのゆめ。今はわが身につまされて。合ッぎ
 りといふ字はぜひもなやツつとめする身のまゝならず。
 わかれとなれば今さらになせともなきはなれぎは。合
 エ、此くるしみに引かへて。あの二かいのさみせんはい
 つぞや主のるつゞけに。ねまきのまゝに引よせて。たが
 ひに語るたのしみのこよひは引かへ今頃はどこにどふし
 てるさんすやら。とにかくそはれぬ二人が身のうへハッ
 アあぢきなき浮世じやナア。歎すいた男にわしやッ命で
 も。ハル何のおしかろぞつゆの身の合。きへばうらみもな
 きものを詞「コレみどり嘸そなたはかなしかろ。おれがに
 くかろこらへてたも。わるい女郎につかはれて。思はぬ
 くるしみかんにんしや。こよひにかぎり此ゆきは。なん
 のむくひぞさむかろかはいやのふ。イエ／＼わたしはさ
 むふはござりませぬが。次郎さんはあのやうに若衆にた
 たかれさんしたが。おまへはくやしうござりませう。わ
 たしもかなしうてならぬわいのふ。よふいふてたもつた

詞ヤイうら里客をせく事客の爲女郎大せつしんだいが大
 事。あの客もいまだ若き人あまりしけ／＼かよはれて
 は。親がかりならかんどふ受け。主持ならば親方のてま
 へしそこなふはしれたこと此程年切かへしもあの客衆じ
 やとある。此上は心中か駈落か行すへ迄が不便さゆへ。
 たとへかたきのすへにもせよ。わがか、へとなりし女郎
 ことにかぶろの内よりきりやうは人にすぐれたればほか
 の子供とちがひ。心をつけてそだてしもの。なんのにく
 い事がある。こゝをようわきまへて思ひなをして奉公せ
 よ。たびたびいけんをくはへても、夫をそれとも聞入ぬ。
 其くるしみも心がら。おのれがつみおのれをせむる。み
 どりめもおのれがつかふかぶろなれば。ほかの者に見せ
 しめ思ひ切る心なら今でも繩をゆるしてくれん。コリヤ
 男共氣をつけいとひすて、ハッおくの一間に入りにつ
 る色「うら里あとを打ながめ。涙にくれていたりしが。詞
 エ、なまけあるお詞なれど。是ばかりはどうも忘れぬ
 お赦しなされて下さんせまだ此上にとのやうな。かなし
 いくるしいせめくでもわしやいとやせぬ。どふなつても

カ、ルそなたまでもそのやうに。ぬしをおもふてカ、ンたも
 るもの。わしが心をすいりやうしや。ウレヒカ、リなんのい
 んぐはに此やうにいとしいものかさりとては。中けいせ
 いにまことなしとはわけしらぬ。ウやほの口からいきす
 ぎの。ハルすいのすいほどはまりもつよく合。たゝなつか
 しいとしさのぐちになる程こひしいもの。下たとへこ
 の身はあは雪とともにきゆるもいとぬが。ウ此世のな
 ごりいま一度アハッあひたい見たいとしやくりあけ。き
 やう氣のごとく心もみだれ。ウレヒなみだのあめにヌエゆ
 きとけてせんご。せうたいヲトシなかりけり。詞おとこは
 かねてようるの一腰くちにくはへて身をかため。しのび
 しのびてやねづたひ。それと見るよりかなしさの。つた
 ゑてたはむ松がゑもこよひ一夜のかけはしと足もそゝろ
 にさだめなき「見るにうら里うれしやと。ハルかなしさ
 こはさあぶなさに。とび立ばかりに思へども。身はいま
 しめのつたかづら。ふりつむゆきにとぢられて。せん方
 なくもうぐひすのねぐらヲトシたゝよふばかりなり。カ、リ
 なんなくしたへおり立てふたりがなはを切ほどき。詞コ

レ／＼うら里。こゝでしぬるもやすけれどのがるだけはおちて見ん。此へいをこす計りさいはい是なるのゑだ。つたゑて行んもろ共と。カ、リたがひに手早く身ごしらへ。ウレヒみどりも共にと取すがる。かはいや此子は何とせん。オ、心得たりとみどりをこわきにひつかへ。かい／＼しくも時次郎まつの小ゑだを浦里にこつかともたせあたりを見まはし。合しのびがへしをひつばづし。カ、リはしごとなしてさしおろしやう／＼三人へいの上おりんと思へど女の身。詞ノリ浦里は胸をすへしぬるとかくごきはめし身の上。何か厭はんサア一しよと。手を取くんで一足とび。けにもつともとうなづきてたがいにめをとぢ一思ひ、ひらりととぶかと思しめはさめてあとなく明がらすのちの。うはさやのこるらん。

二一 浦里明鳥後眞夢 富士松魯中章調

ナゲシしのびねの枕ふたつを其まゝにとりもなをさぬまさゆめの引中地やぶれてうつ、浦里は。合ッハくるはをぬけし身すがらや 中よいのくぜつのハツムもつれ髪。文セフシ取あぐる間も中たんほねまきながらのかへ帯引合人目

お親もとへたしかにとゞかん。最期所もアレなるはか場。ウレヒカ、リ訪 弔も御回向引も逆縁ながら血のゆかり。外の千僧供養よりうれしう二人が死出の旅。ハルさはさりながらわれ故に。そなたも親にさきだつ不孝因果な縁とあきらめて詞心残りの事あらば。かへすがへすも云ふてたもと色さすが亂れぬ男氣も泣ぬ顔するフシ目に涙。カ、ル聞て女は顔詠めアレまた患癡な今さらに牛申私が心も合しりながら。はかないおやのせに立てしつむ苦界の浪まくら 中夜毎日ごとに幾萬人かよひ廓のそのなかに。不圖逢か、りしはじめから仇と情のしがらみに入惚させたのも神さんの結ばさんした縁とゑん。中友朋輩や親方の氣がねに月日フシ 小車や。客へ手くだの入ほくる誓紙かくのもゆび切るもしん實男のかあいさに。ハルつくすまことはたれとてもギン勤する身のならひにて合わたしにかぎる事かいな合世にありたけの實情を盡しく／＼てカン諸共に死ね死ふとがほんになり合 たかひに胸の疑ひもはれて未來へ女夫連、なんの心がのころぞと笑顔にかくごフシあらはせり。カ、ル男は見るに忍びかね。ハル其いさぎよ

に立つを時次郎上かねは上野かあさくさの森をはなれて花川戸ハル 吾妻はしと手をとりに二人が影のまた二人月につらきいし原の川邊づたひにおほろなみ 合ッダ灯影かすかにかへりぶねうたふ小歌のしめやかに合ッダ川竹の合浮名を流す鳥さへも 合つがひはなれぬをしどりのなかにたつ／＼きすご／＼と別れのつらさにヒョウ袖しほるほんにしんきな上死神にカ、リ明日はなき名を立川や引ギン我からまねく扇ばし合中此世を猿井大島の森のしゆみにユリナガシたどり着く詞コレ浦里。あやふき場所を。やう／＼のがれこゝまで来て。死る今はの心がかりは。兼々咄す二百兩は。地頭へおさめるねん貢金故。親人に御なんぎかかるとは必定。また此一腰は小鳥丸となづけ。凶事有る節は自づと聲を發するよしにて。家につたはるたからの一刀。これにて死すれば血汐にけがし。人手にわたるそのときは。不孝のうへの不孝のうはぬりと。した／＼め置たるかき置をさし添へ。アレニ見へる慈眼寺の當住は。俗縁の伯父なる故。かけながら頼み置ば。死後にはかなら

い心ざし此身とともにさへる身をそれほどまでにカンラれしいかうれしうなうて何としやういま見おさめと顔とかほ 合アハフシしらむひがしにつく／＼と。見かはし見かはし抱ハルオトシしめつきぬ名残に時うつるカ、リはや寺々のかねのねにハツト心を取直し見咎められじと立上りイヤヤ最期を急がんとあはれ散行く若さかり 引合若むらさきのしごき帯ひきさき／＼ほんのうの絆にくびれ死んづと消る其身のおきどころギン下そこか爰かと思廻す幕所露にしたられるやなぎの枝これぞほとけのギンユリ御手のいとたすけたまへとくわんねんししごきうちかけのびあがり妙法蓮華經妙法華經唱ふる聲ともろともすでに斯ふよと見あぐれば ヨハルいづくよりかはむらがる鳥鳴き連れなきつれ羽をふるひ二人が上にとびめぐり目先もくらむ鳥羽玉の三重圍はあらぬか合わかちなく斯てははてじと氣を勵まし追つばらいはらひのけ石ふみはづし縊れるはづみめぐり／＼と柳の枝折れて其儘うちかさなり入消ゆく霜や朝あらしついはかなくフシなりにけり音におどろき寺中の人々住持もろともかけきたりそれと見るよ

次郎目出度春をぞむかへける。

りはしりよりよびいけく、水ふきかけあまた手あつきか
 いほうの其かひさらになかりけるその間に見おはる書お
 きに上人立より數珠おつ取り、ギン妙法極意の加持曼陀羅
 たからかによみあけく、死骸にさづけたまふにぞ入經力
 法力たちまちに不思議や二人はフシ息出たり色上人聲かけ
 詞皆騒ぐまいく。是なる若者は我血縁。またこの一腰
 はかれが家に代々つたはる。小がらすの名刀、聞しにた
 がはず時次郎が最期をたすけんとむらがり寄りしかハ、
 ありがたしありがたし。若氣のいたりと云ながら忠孝を
 顧ず、色情に命捨つるは人道にそむけり。さるによつて
 存命なる時は非人に落す世の掟。おそるべしく。幸ひ
 なるかな山名屋はわがだんゑつ。殊に信者の義にあれば
 事おんびんに取はからひ。兩親へわび言立て時節を待つ
 て夫婦の語りひいたせん。かつ又一たん絶し二人が命
 蘇生しは。妙法の利益劍の奇特。のちの世までもつたへ
 んため。しるしのいしにたて置んとおふせは實にもこと
 わりやいまにくちせぬギンユリ比よく塚不思議のゑにしと
 津々うら里タリ上かたりつたへ聞つたへ入ひらくや花の時

新内節正本集 終

第六卷 歌集

- 一 越風石臼歌
- 二 古今栢毬歌
- 三 部々逸節根元集
- 四 笑本板古猫
- 五 粹の懷
- 六 大津繪節

一 越風石臼歌

越風石臼歌序

昔者。明王之治天下。必以平正。謂先正其心。而後天下平。是故去憂莫若樂。節樂莫若禮。禮樂德之則也。正德莫若詩。詩以正心。其心正。而後其事治。正者安之也。則者象之也。安之者心也。象之者心也。正而安。則而象。故治而平。夫人戴大圓。履大方。鑑大清。視大明。心安於中。事治於外。雖有貴賤上下。無人而不有心者。心之官思。思之所發為詩。詩者歌也。言志以永言。故治則安以樂。亂則怨以怒。心之中又有心。一往一來。相代於前。無物不喜怒哀樂。心藏斯四者。情性所吟詠。無不詩歌者。予欲徧探國風。詳觀好惡。越後田子文所採錄作解詁。其辭美。其音雅。蓋所刪定五百首。足以辨土風。先時服仲英嘗賞之曰。越後國風。不減吳歌。田子文解。足傳後世。遂曰。世變俗易。以今觀古。方言俗語。委巷歌謠。

多不可解者。惜哉。源氏伊勢之二語。古今拾遺之諸集。當其世訓詁以傳。有甚可觀者。至今千載之下。衣服器械。古之有而今之亡者。不知何者。家君亦曰。以國字作者。又解以國字。其解不通。宛如異方之書。譬若令紅毛人言。令蝦夷人譯之。令天竺人聽。非重譯。誰得晤之。以今言。解古辭。衣服言語。月移歲換。以柄之方。納鑿之圓。何得入焉。予善田子文錄而解之。懿其志。嘉其事。其詞雅馴。有三百篇之遺音。讀斯編。足以觀越後之國風。國有人哉。蓋越俗有心所憂悶而作。其心中又有有心。啓發憤懣。潤飾言辭。啓發者心也。潤飾者心也。其俗美哉。詩者志之所之也。在心為志。詩以言志。歌以永言。古之道也。因讐對而雕刻之。總十二卷。藏之名山大川。傳之通邑大都。梓在日本橋之南。

安永辛丑春三月

東都河保定併書

河 經

越風石白歌 卷一

穀山 陳煥章子文解
東都 河保定興夫校

染川之什詰訓第一

和歌三十一言、徒歌二十六言、俳歌十七言、皆人世之所
移易、政刑之所舉錯、千載之下、坐而觀之也、善哉、先王
之採、以觀土風、居然而能辨八方、和歌、王孫公子之所
賞、而庶人不得爲之、飾其貌、文其辭、俳歌、逸民閑人所
能、而君子不得作之、薙其髮、奇其衣、徒歌、越俗之所傳、
石白屑粟、偶而挽之、說以忘勞、粉末食之、其詞二十六言、
吟咏情性、遺其思者也、

思ひ染川わたらぬさきはかほど深きと白浪た

染川、水名、染始同、白浪、與弗知同、謂漸至深也、其始
淺、其衷深、其終溺、人情所不免也、溺水猶可拯也、溺人

不可拯也、古人所發歎於斯也、

染て悔しや、藍紫にもとの白地がましぢやもの

染初逢也、和言初染同、藍與逢同、紫與村里同、村落疎
也、市井密也、逢藍會同、謂不私市井之人、而私村落之
人、相逢之不數也、悔不愼其始也、白地謂不知也、斯歌、
即敦忠之意、彼以三十一言、此以二十六言、體裁不同、據
懷何異、俳諧十七言、十四言、樂府引曲、古詩歌行、近
體、五七言律絕、皆此之意、唯安以樂、與怨以怒之別而已、
墨子所悲、豈是乎、

つとめする身に實の有らば花に子の登る山吹に

勤謂青樓之娼、鬻姪爲業者也、其女日夜恣淫慾、故情不
一、是以妖態萬狀、無情實矣、然此言非無疑、睹貌而相說
者、人之情也、雖曰憐金而不憐人、吾不信也、按此歌詞、
處女非諷情人也、妓女繩情人之辭也、由是觀之、剋臂以

誓、之死矢靡慝、反情之薄也、

小野の小町よ露深草の垣に立名は吹く嵐

小野小町、美人也、善三十一言歌、名施天下、帝寵無類、

然性淫亂、搜以和歌、無情不適、深草少將、聞而慕之、

欲一當之、見而歡之、願肌觸之、日夜欽羨、思切中心、

寄懷於歌詞而贈之、小町不顧視之、少將夜夜穿垣窺之、

小町私見而戲曰、來百則從之、少將喜而信之、往九十九

夜、至則期欲畢、志將遂、其喜不可勝言、明夜之期、長

如數十年、憊而眠、車轉墜、壓殺之、小町明日出見之、

愍不勝悲、其哀傷感動人、自是小町、怏怏然心不樂、色

衰寵還歇、妬深人亦棄、至死不能忘于懷云、此歌文辭深

遠、假借二人、反覆議論、言不出二十六、而深草少將、

小野小町之情態、溢於言外、以達己之思、而施於後世也、

盖男子之所作、怨女子之不從也、女驕而侮己、歎情未達、

而人口籍甚、小町以比彼、少將以當己、人言以喻嵐、刺

處女驕侮也、立名於垣、謂少將往而所倚之牆也、欲之小町

之所、而立於巖牆之下、體未觸於肌膚、而人言匈匈、名立

於垣上、實仆於車下、名實之失、可憐之至也、是及門未

至家、升堂不入室、嗟乎、其室則邇、其人甚遠、豈不爾思、

子不我即、死而又死、所以使人痛惜也、

私はけやきで木は堅けれど人の櫃の木になれくと、

櫛木名、木氣同、堅固同、人謂他人、櫛木名、與餘同、

櫛櫃相似、故興木、木謂氣質也、昔有剛腹者、與人爭曰、

縱有櫃子、何如櫛實、櫛有子、甘美食之、補脾胃、櫛無

實、枝葉相類、木皮相肖、大數十圍、然櫛者固櫛者弱、

剛柔各異、

竹にふしある浮世はいやよ人の檻がき結たがる

竹有節、謂不通也、浮世、浮與憂同、竹節之間曰餘、餘

與世同、檻垣之檻、與增同、結與言同、歎人言之甚、欲會不能也、故會不數也、與其恐人言、不如無私、凡物有形而有影、宜哉、人之疾、而誹謗之、然似恐而實不恐、詭譎之聲音顏色、距人於未然、罵其人曰、不洗已碗、而滌人之器、不芸吾田、而糞鄰之地、不爲可爲、而致不可致、佚樂無度、終廢萬事、能距諫、以罪言者、婦人之情也、按此歌詞在意不恐人言、可醜之甚也、詩曰、仲可懷也、人之多言、亦可畏也、是婦人之態也、思ふころのいつはりなきは虎と見る箭の石に立つ

用熊陶子事、蓋不知身之賤、慕貴家之女也、至誠感神、何以不遂、又李廣射雕之事、皆誠而精、則石猶飲羽、況於人乎、吾州之野人傳云、人、或有務於耕稼者、早旦往田、執杵以爲耒、耕田三畝餘、手足疲倦、將休息、檢之即杵也、驚愕怪之、再耕之、不能復耕也、其初爲耒、操心

專一、力行不疑、是以杵爲耒之用、既知非耒、則杵亦不能爲耒也、何則心爲之主也、又有一人、蚤晏將薙草、執曲木以爲鎌、刈草七八束、覺刃之澁、將礪之、用砥石磨之、膚與石不親、怪而熟視之、見一木之卷曲、再刈之、又不得薙草、是皆誠與精、通於天、誠乎此者、刑乎彼也、其心無僞、則何難之有、

思ひかけたら無驗にはせまい石に立つ箭の有ときく
是必男子之言、有難焉之意、然箭之徹、石猶沒羽、況於肉乎、

石に立つ箭の有とは聞けどなぜに届かぬ我思ひ
届至也、歎吾思未遂也、届遂和言同、盖斯男性急、怒女之決志、不早從己欲也、此女持兩端、而首鼠於貧富之間、非關美惡矣、思不遂者、無金銀以射之也、金銀之射人、捷於矢、

もみち踏む鹿憎ひといへど戀の文かく筆と成る

黄葉謂茂美知、愛其人、及屋鳥、憎其僧、及袈裟、人情乎、人情也、

染川之什十首首二十六言、

富士之什話訓第二

富士のすそ野に朝白うへて露と花との色くらべ

朝白、謂牽牛花也、富士山之麓、四方曠野、周遭千里、

謂之裾野、和歌所詠、千載不可易也、其山高峻、堪四彼、

三山、六其五嶽、而三仙山、不能爭其麓、五大嶽、不得、

敵其秀、狀若芙蓉之花、故一名芙蓉山、又曰不二山、言、

一而不二也、眞天下之名山哉、其神也靈也、五嶽三山、

何得比焉、此歌之意、歎可仰而不可慕也、種牽牛花、何必、

富士裾野、以至微之花、對至高之山、蓋以賤且短命、慕、

貴且長壽也、然則不高尙其志、願難得之貨乎、故言花與、

露爭色、以遣己之情而已、花以比芙蓉山、露以喻區區一、

身、或曰、牽牛之花日出而萎、豈得引蔓、而施於絕頂哉、

あはでくもりし心の鏡遇て霽さむうたがひを

不遇而暄、其詩曰、一日不見、如三月兮、遇而霽、其詩、

曰、既見君子、云胡不喜、會則霽、別而暄、處女之情也、

心鏡佛語、纏綿四肢、綢繆百骸、不可須臾離也、可離非、

情也、故霎時不來、疑惑忽生、雖霽復暄、死而後已、然則、

何益、誰謂、人性善、或曰、惡、予於是、見人之性、同、

一致、無善惡、

君は松むし私はこふろぎといひて鈴虫ふりすつる

松蟲蟲名、松與待同、蟋蟀、不無相通、與來相近、鈴蟲、

其音鈴鈴、如振金策、因名焉、此歌戲謔之辭、且無用之、

言、

君は我身を秋蟲にてもまたぞこふろぎ時々

前篇之對、其意屈曲、秋與飽同、蟋蟀猶曰來也、假辭於鳥獸草木、及寒暑四時、多遺宿懷、攄畜思者、花に短冊つけるはよいが餘所に主有る枝おるな、

隱語也、男女嬉遊、諷諫情人、使之解語、蓋情之易通、無近於色者、速郵之傳命、

君はさやけき十六夜月よ私は廿日の月をまつ、

月着同、十六夜月、出於戌時、其來則夙、恐人之知也、

二十夜月、出於亥刻、將寢之時、此隱語也、如謂月有二、

而實爲同月、是妙入神之處、豈欲莫而不願夙哉、以十六、

與二十之月倒語論時之遲速、微而顯、婉而成章也、

君はうぐひす私はほととぎす誰もはつねの身を瘦す

君者鶯、宇與憂音同、喻憂心有忡、言憂心悄悄、慍于群

小也、郭公、輔土者、熱焦之貌、女子過時不嫁之言也、

初音初寢同、身瘦、憔悴枯槁、不勝憂苦、紅顏美少之男

女、始相通、輾轉反側、相共悟語、憂樂相半、俱恐他人

之姦、疑信戰、子胸中、宜乎憔悴、飲食不下喉

わきてつらきは山杜鵑聲も形もいづこそや

遠不若邇、離不若會、會則娛樂、遠則憂苦、此歌有乖迕

於彼心、其家鄰、其人隔、所謂堂上遠於百里、堂下遠於

千里、門廷遠於萬里、歎欲見而不見也、杜鵑有二種、其

一冲天飛鳴、其一隱於茂樹、其聲聞、而形不可見、山杜

鵑蓋謂此乎、

どふかかふかの待夜の所作に來るかこぬかの疊算

疊席也、手持烟管、放之席上、俯則來、仰則不來、算猶占也、

蓋鷄卜睡占之類也、又無心推指於席上、數其目、目偶則

來、奇則不來、待之切、占來不來、人情所宜然也、

桔梗の手拭おとせばひろふ直に受れば人が居る、

桔梗草名、花色紫翠、可甚愛憐、擬爲染色、美女紅白之

顔、尙之以桔梗色之手拭、人觀之、皆曰好、遺路則拾之、直受則人知之、巧詐似淺、而其意深遠也、直、易折之語、折、恐人之誰何、或曰、直猶親也、受讀爲授、言男女不親授、陽執禮、而陰行邪也、

富士之什十首首二十六言

碁槃之什第三

こばん引よせ晝寢の夢に白と黒との智慧くらべ

夢裡爭術、互競風流、以相歡娛、古人有晝寢、而夢遊於華胥國者、神遊而已、是亦神爭也、豈容勝負於其間哉、不知喜勝、不知怒負、不亦樂乎、

紺のふくさに鬢伽羅こめておとす振にて君にやる

紺色方巾、裏物之絹、納鬢奇羅、而伴遺以贈情人也、此亦前篇之答、鬢奇羅、謂香膏也、以調鬢者、已既用之、有餘而贈之、納者裹而緘之、遺者與之、伴遺而實與也、

程の有とは戀路じやないぞ近き遠きはいはぬこと

非言遠近險易也、執志純一、何爲不成、吉行百里、軍行三十里、足行有程也、戀路無程也、何則行不以足而以情也、越俗謂陰莖爲中趾、以居左右兩大足之中也、言中趾所行、不知幾千萬里、其怒之發、山河之險不足畏也、盜賊之難、不足憚也、雷霆之激、不足恐也、風雨之烈、不足苦也、足力何得及焉、故萬金之產、可破也、千里之郭、可崩也、百乘之家、可傾也、雖有湯池鐵城、不繫中趾者、亡、雖困倉實、府庫充、不維中趾者滅、子侮其親、臣叛其主、父放其子、已縊其首、皆繫維之不固、暴怒之不制、而從中趾之欲也、或曰、心之在體、君之位也、九竅之有職、官之分也、其君令、其官從、君不敬位、失其體、非中趾之所知也、詩曰、誰謂宋遠、曾不崇朝、蓋衛趾宋、數百里、思而不止、其何遠之有、行則至、是亦戀路也、論遠

近^ナ妄^{ナル}哉

あかね染には藍にて重ね色の深きをこひといふ

茜^{アキ}、不^ズ厭^ガ同、藍^{アイ}逢^イ同、戀^{コイ}慕^ム之^ノ甚^キ曰^ク情^{コト}、情^{コト}濃^ク同、欲^{ホシ}相^ア久^ク之^ノ

詞、

戀^{コイ}をするなら猩猩^{シキウ}緋^ヒ染^ゾめたとひ朽^クても色^{イロ}さめぬ、

猩^{シキウ}猩^{シキウ}緋^ヒ染^ゾ、染色^{シキ}名^ナ、猩^{シキウ}與^ユ生^{シキウ}音^{オン}同、言^{コト}猩^{シキウ}猩^{シキウ}之^ノ血^{ケツ}、取^テ以^テ染^ム緋^ヒ、

緋^ヒ皴^ソ色^{シキ}不^ズ渝^ラ、興^{キョウ}者^ハ、與^ユ子^シ偕^ニ老^シ、之^ノ死^シ矢^ハ靡^シ它^ニ、百^{ヒャク}歲^{サイ}之^ノ後^ノ、

歸^キ于^ニ其^ノ居^ニ、死^シ則^ト同^シ穴^{ツツ}、生^シ生^シ相^ア從^フ、讀^ク曲^ク懊^ウ惱^{ノウ}之^ノ歌^カ、皆^ハ斯^ノ意^イ、

未^ダ知^ラ文^ブ生^シ於^ニ情^ニ、情^{コト}生^シ於^ニ文^ニ、使^シ人^ヲ悽^シ然^{トシテ}、增^セ伉^ニ儷^ニ之^ノ重^ク、古^コ今^{イマ}、

之^ノ人^ノ情^ニ、無^ク不^ズ踐^ム此^ノ域^ノ者^{ナリ}、

戀^{コイ}をするなら露^{ツユ}草^{クサ}染^ゾに藍^{アイ}の重^{カサ}なる深^{フカ}き色^{シキ}、

露^{ツユ}草^{クサ}、染^ゾ色^{シキ}之^ノ名^ナ、三^ニ以^テ藍^{アイ}汁^{シユ}澁^シ之^ヲ、其^ノ色^{シキ}好^ク雅^カ、尤^{モト}可^ク愛^ス也^{ナリ}、

藍^{アイ}愛^イ同^シ、澁^シ緋^ヒ一^ニ再^ニ、而^{シテ}重^ク之^ノ斯^ノ三^ニ、則^ト其^ノ染^ゾ色^{シキ}之^ノ深^{フカ}、皴^ソ色^{シキ}不^ズ渝^ラ、以^テ喻^フ他^ノ人^ノ欲^{ホシ}姦^ム之^ヲ、而^{シテ}愛^ス儂^ニ之^ノ深^{フカ}、不^ル能^ハ姦^ム也^{ナリ}、

君は野にさくあざみの花よ見ればやさしやよればさす

野^ノ花^ハ咲^ク平^ノ原^ノ、非^ル爲^ル人^ノ不^ル見^ル而^{シテ}不^ル艶^{ナラ}也^{ナリ}、君^{キミ}子^シ修^ム道^{ダウ}德^{トク}、非^ル爲^ル人^ノ

不^ル知^ラ而^{シテ}不^ル務^ム也^{ナリ}、阿^ア佐^サ美^ミ草^{クサ}名^ナ、多^ク棘^{トゲ}、見^{レバ}之^ノ則^ト可^ク愛^ス、取^{レバ}之^ノ則^ト

可^ク畏^ル、君^{キミ}子^シ易^シ近^キ、不^ル可^ク狎^ム之^ノ意^イ、此^ノ謂^フ情^{コト}不^ル親^シ、而^{シテ}拒^ス人^ノ之^ノ甚^キ也^{ナリ}、

高^{タカ}き思^{オモ}ひは朝^{アサ}顔^{ガホ}ならず既^{スデ}に裾^{スズ}野^ノへよる君^{キミ}は

思^{オモ}猶^{モト}志^シ也^{ナリ}、志^シ高^{ケレバ}則^ト情^{コト}深^シ、情^{コト}深^シ則^ト思^{オモ}篤^シ、朝^{アサ}顔^{ガホ}、謂^フ牽^ヒ牛^{ウシ}花^ハ也^{ナリ}、

引^ヒ蔓^{マツ}似^タ欲^{ホシ}高^ク極^ク天^ノ也^{ナリ}、裾^{スズ}野^ノ、謂^フ富^{トヨ}士^シ山^{ヤマ}下^ノ也^{ナリ}、朝^{アサ}顔^{ガホ}、興^{キョウ}志^シ之^ノ

高^{タカ}、望^{ノゾ}大^{ナリ}也^{ナリ}、裾^{スズ}野^ノ、比^ヒ美^ミ人^ノ之^ノ衣^エ裳^ニ、取^テ裾^{スズ}在^ニ下^ニ、己^ガ之^ノ所^ノ欲^{スル}

亦^モ在^ニ于^ニ下^ニ也^{ナリ}、

よるべなき身は夢こそたのめ打な妻戸を夜の雨

寡^カ婦^フ之^ノ哀^{アハ}吟^ン也^{ナリ}、其^ノ意^イ可^ク悲^シ哉^{ナリ}、與^ユ伊^イ川^{カハ}歌^カ、啼^{ナク}時^{トキ}驚^{オドロ}妾^{メカ}夢^{ユメ}同^シ、

彼^カ言^ハ鶯^ウ兒^エ、此^ノ言^ハ夜^ヨ雨^{アメ}、婦^メ女^メ之^ノ情^{コト}、以^テ夢^{ユメ}爲^ス寶^{ホウ}、不^ル信^シ眞^{マコト}而^{シテ}信^ス

夢^{ユメ}、言^ハ不^ル可^ク見^ル之^ノ人^ノ、恃^テ夢^{ユメ}以^テ見^ル之^ヲ、然^{ラバ}則^ト何^カ寶^{ホウ}如^ク之^ノ、淺^シ之^ノ爲^ル

婦^メ女^メ、不^ル信^シ可^ク恃^ム、而^{シテ}恃^ム不^ル可^ク信^ス、古^コ今^{イマ}皆^ハ然^ル、鄭^{テイ}長^{チヤウ}者^ノ有^リ言^ハ

第六卷 歌集

神遇爲夢形接爲事、故晝想夜夢、神形所遇、雪になりたや函根の雪にとけて流れてけはひ水

函根、在相模州、與伊豆州境、設關、消氷釋也、假粧坂、在相模州、妓女窟、古者有虎少將者、美人也、曾我五郎時宗愛之、相憐將死、後人欽之、聞之古老、曰時宗遭世之喪亂、爲飾矛戟甲鎧、欲得三百金、然金非降於天、非湧於地、筋力勤苦之所得也、偷樂苟且之非所得也、千謀百慮、不知所出焉、虎少將聞之、有戚戚於其心、撞無間之鐘、而要之、傳云、撞其鐘者、忽得其所欲之物、雖然終身償其責、不得安其心、不在遠、即在此、非有鐘名無間者、心專志一、則所撞之物皆爲無間、金石匏土、絲竹草木、無物非其鐘、又云、無間、地獄之名、執志之純、精通於地獄、金爲之碎、釜爲之出、故身死而魂沈於無間地獄、服其罪、雖有其名、無行其實者、虎少將把杓擊洗鉢、其音

鏗然、其母在樓上、見其苦困、不堪感動、擲三百金、散亂空中、五金於此、五金於彼、終贖其所質之物、又飾矛戟甲鎧、以爲軍容、或曰撞無間鐘者、美人千鳥、非虎少將矣、千鳥憂梶原源太景季、無三百之金而狼狽急遽、然無所求焉、褰長袖、禱上下之神祇、舉杓擊石盤、相靡生火、金下於高樓、飛火交黃金、翻於簷前、輝於盤上、於是乎千鳥其喜可知也、諸子所傳、多齟齬者、未知孰是、斯歌男子之辭、所思住假粧坂、己爲函根山白雪、春風氷釋、逐桃花水、流到美人之所也、其情甚鄙、其詞甚都、有妖冶之閑雅、無君子之操行、碁槃之什十首首二十六言

越風石臼歌卷一終

唐訓詰江戸風

五言絕句。七十八首。江戸之言。平仄能調。應知大都之繁華。天府之富。

御用車留外。現金懸直亡。橫町新道際。明日女中湯。
 小便無用札。此處不遺塵。馬骨初持店。三軒向兩鄰。
 菜飯女川側。男山田樂焚。即席御料理。一人前百文。
 菜飯鄰田樂。男山對女川。囊中南鐮出。藝者二人前。
 虎皮禪不取。女子氣中橋。久物相場好。常談復每朝。
 生蕎深大寺。豆腐有山懸。名物且無類。蒲燒江戸前。
 揚弓先塞目。千客萬人來。竊食簞張裡。吉原甘露梅。
 干木揚枝賣。軍書講釋師。名人止源水。皆拂御山時。
 引越女房美。一言猶未曾。主人田舍者。千客萬來燈。
 花開天氣好。只待大鐘鳴。今日御裝束。松原晝飯行。
 愛宕御緣日。春風火用心。吉原新細見。武鑑袖中探。
 今夜先梳髮。明朝欲入湯。鐵漿紅粉傳。將出復新粧。
 店賃滯三月。大家催足嚴。釣舟今夜約。明日早張帆。

和尚平生吝。室中多匿魚。一文猶惜費。御畜漬芝居。
 一丁燈疾走。呼煖去窓前。名代鹽梅好。猗嗟旨御田。
 萬金猶未慊。貪欲出家身。妄念妨成佛。蘇生御聖人。
 芝金杉有緒。幸手屋衣裳。依所應為繪。東男京女郎。
 佛神精進一。上下口相侵。四季御齋日。群呼尻用心。
 梅檀二葉香。若殿入鎌倉。白旆風吹靡。大當樗里場。
 吾殿有乘出。獺皮尻馬行。早朝初待客。例刻御都城。
 水切薪高直。札懸明日休。繩張砂利上。御用外車留。
 舟有遊山語。芝居構矢倉。侍親言膝下。何事女為郎。
 三四月更代。町家大有商。年中殺不絕。江戸御蕃昌。
 主人江戸子。寒暑未曾知。家內芝居咄。女房偷樂肌。
 女房振舞好。賓客若雲霞。里是烏丸巷。枇杷葉本家。
 名傳為大蜺。春盛業平橋。能似阿娘隱。小僧居內招。
 親分無腹臆。中酌兩方尤。兔角先堪忍。三三拍手休。

播磨鍋早速。相模女承知。國各有風俗。聲音不可移。
 承娘以名劍。覺悟問如何。御寶物紛失。當番油斷多。
 身代誰人始。父言心拜居。諭娘忠孝道。覺悟且何如。
 去年娘破瓜。山伏亂如麻。猿子橋騷動。七創心夜叉。
 一簣非女意。誠說贈山吹。欲告華無實。哀哉世未知。
 揚詰兼齋日。大騷身上傷。佛神皆立願。親類悉勸當。
 高聲何馬骨。御用大寒朝。人子宜憐愛。立身今富饒。
 折節機嫌候。馳回當世人。一箱添熨斗。先拂御鬢塵。
 光德寺雖大。何由無裏門。女郎憎不再。詢客有流言。
 河伯多貪穴。雷公竊攫臍。人誰無好惡。酒色古今迷。
 飲食出詩會。奧方生子顏。即題無趣向。復不出來還。

唐訓詁江戶風止。

或曰、當作外車止、爲車留外、拙矣、答曰、工也、八仙歌、賀知章去姓、當作白酒一斗

詩百篇、夫李白一斗、李白芥人形一斗、而非酒也、竊食、家語在厄、

名人、呂子觀學、

團方言、男女之際、謂之一丁燈、

御田、女名、善淨瑠璃、人悅媛且旨、獨言而行、以音出于口、聽者譽之、曰唐茄子御田、

團田、顛之誤也、夏曰所顛、冬曰御顛、暑曰冷、寒曰媛、一曰、今賣蕎麥者、曰顛屋、

同一物、

名代者、夏冬、名之變更也、

團一丁燈、謂燭也、

凡食、塗味噌者、豆腐曰田樂、魚曰魚田、蒟蒻曰御田、唯茄子曰鵝燒、昔和尚、嗜鵝之

茄子燒、故茄子不言田也、穴掘家、說誤也、

漢衛綰傳、實無它腸、桑柔詩、自有肺腸、

詩序、移風俗、

周語上、召公以其子、代宣王、呂子適威同、古樂府、莫愁破瓜時、謂女十六、

吉原待客、冢宰齋日、或曰、冢宰對客、吉原齋日、作待客篇、或作齋日論、

此章、寫鵝之奔奔、有三百篇餘響、千古絕調、

詢、昭十一年、

(以上頭註)

古今栢毬歌

一

庭上柳に雀がとまつてくく、おんなきめんなきめん
はなかいでおんがなく、一のみを越よか、二のまをこよ
か、三のまの月の出しやるまへに、お方をよほか、刀を
よほか、刀が抱いてねらるゝものか、恥づかしや、ござ
らんかはづかしや、ござらぬ今日はけふく、大事の大
事のおてまりさまを、もみのふくさに包みまはして、金
糸でしめて、しめた所にいろはを書いて、お手の上から、
お手の下までおわたし申した、慥かにくくうけとり申し
た。

二

むかひ祖母さま縁から見れば、菊や牡丹や粉團花の花や、
行けばようきたあがれ茶々のめ、うすべりたばこ、たば
このめとはよいはしやつた、花のお娘はなぜ飯たべぬ、
戀か悪阻か積聚の虫か、むしやござらぬ腹にな、月子が
ござるく、てんく其子が男子であれば、寺へやつて

女郎かはす、あたりの娘に手はさす、まめで勤めて居
る程に、必ず案じて下さるなく、丁ど是で百。

四

むかふ通りやる熊野道者が、肩にかけたる帷子、かたと
すそとは梅の折り枝、なかは御前のそりはし、そりはし
のはやるものとて、ちよきりこきり小女房は、どこでう
たした、吾妻かい道でうたした、あづまかいどうの、茶
やのむすめは、日本てきときこえた、一つではち、を
のみそめ、二つではちくびはなして、三つでは手ならひし
そめた、四つではしよけい覚えて、五つでは糸をよりそ
め、六つで布はたおりそめ、七つでは小袖したて、八
つで學問しそめて、九つでよめりしそめて、十でとのご
とねそめて、十一で玉の様なるわ子をもうけて、せわに
そなたをすつとんと。

抑々此てまり歌は、いつの頃よりいひもて來れるにや、
其始め久しくして、今に絶えせざる事、これ教への端と
なれる文句なり。吾妻かい道の娘が十一歳にて子をうみ

手習させて、ばくちうたせてうちまけさせて、寺の縁か
ら、つき落されて、二帖や三帖の疊紙おとした、そりや
誰が拾うた、大阪ばくろ町名左衛門が拾うた、名左衛門
よんで來い盃せうぞ、名左衛門うせいでたまめがうせて、
たまめ何しよぞ川へながせく、川へ流して糸くづ拾ふ
て、うんでつむいで手がせにかけて、手まりにまいて一
二二三よ、丁ど是で百ついた。

三

鶯がく、たまく都へ上るとてく、梅の小枝に晝寢
して、ひるねの夢はなんと見たく、こちのざしきはせ
まけれど、むしろ三枚ござ三枚、六枚屏風をひきつめて、
ゆうべ呼んだ花嫁御、奥の座敷に直らして、金欄緞子を
ぬはすればく、衿とおくびをえつけいで、ほろりく
とおなきやるは、なにが悲してお泣きやるぞく、何も
悲しはござらぬが、わしが弟の千松が、七つ八つから金
山へ、かねがないやら死んだやら、一年待てどもまだ見
えずく、二年待つてもまだ見えず、三年三月の夜の夜
半に文が來た、ふみの文章なにとかくく、傾城かはす

たるにはあらず、男子三十歳女子二十歳ならざれば婚姻
せざる事、子を設けても育つる道を知らざればなり。女
子二十迄の事どもを十一までにつめいひたるものな
り。「むかひばさまの文句は人あしらひをほめたるな
り。「ばくちはかるたさいには限らず、碁將碁皆ばくえき
なり。かたよるまじとの教へなり。「お方をよぶか刀をよ
ぶかはよめの調度敷金などをむさほるを人ぎ、はづかし
はござらぬかと戒めたるなり。其外下女のたまが川へ流
されたる。鶯が梅枝に夢を見たるなど皆教の事どもなれ
ども短紙にのべがたく、こゝに止む。

三 都々逸節根元集

目次

どいづし根元集はし書……………四元

一、宮驛宿中出女御免之事……………四元

二、明和中、宮驛傳馬町之圖……………四元
附、家名駒立之圖

三、尾上惣兵衛心中之事……………四二

四、其奴はドイツジャ〜……………四二

五、その頃の唄いろ〜……………四二

六、よし〜節……………四三

七、お龜の起原（鶏飯屋が事）……………四三

八、鯛屋お仲が事……………四四

九、於哥女根元記……………四四

一〇、お龜御免の高札……………四五

一一、（謠曲）度々逸……………四五

一二、文化三年飯盛女御免の事……………四六
附、上納金、ヲカメの数の事

一三、はしりがね御免、お龜駕籠御免……………四六

一四、（脚本）心中操の相知湯……………四六

一五、（道行）汐能別禮路……………四四

一六、中島、三國の事……………四五
附、三國の圖

一七、妓女、大宮高藏參拜御免……………四六

一八、妓女惣踊の唄（うかれがらす）……………四六

一九、踊衣服の事……………四六

二〇、柳屋黃花樓出來、其席の唱歌……………四七

二一、熱出藝子、船に連行事御免……………四七
附、鯛屋揚屋となる事

どいづし根元集はし書

春秋の佳節に山海にこころをよすめるは、人の常にしあるを、けふは花の下の船に目をくらし、明日は萩紅葉にひさごの左計に酔て、うたひさめくは、唐土もやまとも同じことなるべし。其謠ものとせしはむかしより島原の投節吉原のつきぶし新町のまがきぶしとか聞り。そをつまびらかにわきまふべき文世にさはなれど、山鳥の尾張の國より謠ひ出せしどいづし事をしらせし文は、いまだみず。さればはつかなる紙に其の聞傳へしを書つてめて、好事家のたつきにはものしつるなり。

よるこびながく六ツみづのとのおし

戲道人

殿々奴節根元集

珍文館 老人誌

- 一 宮驛宿中出女御免の事
- 寶曆十庚辰年春より熱田宿中出女御免有之、大に流行せしと見えて、妓女の評判記二五里水と云三冊物の寫本、明和九壬辰年同十一月、秋出來す。されど家名今とは大に相違にて、神戸町には壹軒も無しと見え、傳馬町のみと見えたり。花代も入用共 六百文の由
- 二 明和中、宮驛傳馬町之圖二五里水より抜萃
- 遊女屋斗はかりしるして商人の類はのせずと云。

柳屋長右衛門	此所横町中道町	此所横町	伊七屋又三郎	此所横町日島横町
小松屋長左衛門	角屋與七郎	此所横町	藤屋利八郎	常磐屋左吉
三星屋庄兵衛	いせ屋傳左衛門	此所横町	米屋新七郎	江戸坂忠七
若竹屋金三郎	草屋茂兵衛	此所横町	讚岐屋久四郎	河内屋太兵衛
仙茶屋治兵衛	輕草屋與左衛門	此所横町	田島屋爲吉	海老屋彌次
柳屋長右衛門	三河屋兵助	此所横町	中根屋喜三郎	小竹屋善藏
小松屋長左衛門	新物屋善吉	此所横町	大野屋善吉	
三星屋庄兵衛	小錢屋市右衛門	此所横町	鐵燭屋長次郎	
若竹屋金三郎	鳥田屋善七郎	此所横町	小松屋權左衛門	
仙茶屋治兵衛	錢屋甚兵衛	此所横町	大黒屋林右衛門	
柳屋長右衛門	若松屋利右衛門	此所横町	中根屋喜三郎	
小松屋長左衛門	三の屋次左衛門	此所横町	大野屋善吉	
三星屋庄兵衛	鶴屋榮助	此所横町	鐵燭屋長次郎	
若竹屋金三郎	此所横町出来町	此所横町	小松屋權左衛門	
仙茶屋治兵衛	大野屋善吉	此所横町	大黒屋林右衛門	
柳屋長右衛門	早善吉	此所横町	中根屋喜三郎	

柳屋長右衛門	此所横町中道町	此所横町	伊七屋又三郎	此所横町日島横町
小松屋長左衛門	角屋與七郎	此所横町	藤屋利八郎	常磐屋左吉
三星屋庄兵衛	いせ屋傳左衛門	此所横町	米屋新七郎	江戸坂忠七
若竹屋金三郎	草屋茂兵衛	此所横町	讚岐屋久四郎	河内屋太兵衛
仙茶屋治兵衛	輕草屋與左衛門	此所横町	田島屋爲吉	海老屋彌次
柳屋長右衛門	三河屋兵助	此所横町	中根屋喜三郎	小竹屋善藏
小松屋長左衛門	新物屋善吉	此所横町	大野屋善吉	
三星屋庄兵衛	小錢屋市右衛門	此所横町	鐵燭屋長次郎	
若竹屋金三郎	鳥田屋善七郎	此所横町	小松屋權左衛門	
仙茶屋治兵衛	錢屋甚兵衛	此所横町	大黒屋林右衛門	
柳屋長右衛門	若松屋利右衛門	此所横町	中根屋喜三郎	
小松屋長左衛門	三の屋次左衛門	此所横町	大野屋善吉	
三星屋庄兵衛	鶴屋榮助	此所横町	鐵燭屋長次郎	
若竹屋金三郎	此所横町出来町	此所横町	小松屋權左衛門	
仙茶屋治兵衛	大野屋善吉	此所横町	大黒屋林右衛門	
柳屋長右衛門	早善吉	此所横町	中根屋喜三郎	

○家名駒立の圖

此圖にもれたるは皆歩のくらひと思しめせ

中島	鶴ヤ	仙臺
駒竹	蠟燭	柳屋
小竹	伊セ	大黒
伊ヤ	煙草	島田
米ヤ	小杉	若松
伊ヤ	三星	錢屋
伊ヤ	小松	美濃
伊ヤ	中根	三河
伊ヤ	大野	若竹
伊ヤ	角屋	
伊ヤ	三河	
伊ヤ	若竹	

(此美濃屋太左衛門ハ家近キ頃迄有リシガ文政八乙酉年二月十二日自分抱ヘノ妓女ヲ折檻強ク相果候由ニテ被召捕程ナク家斷絶(朱書頭註)

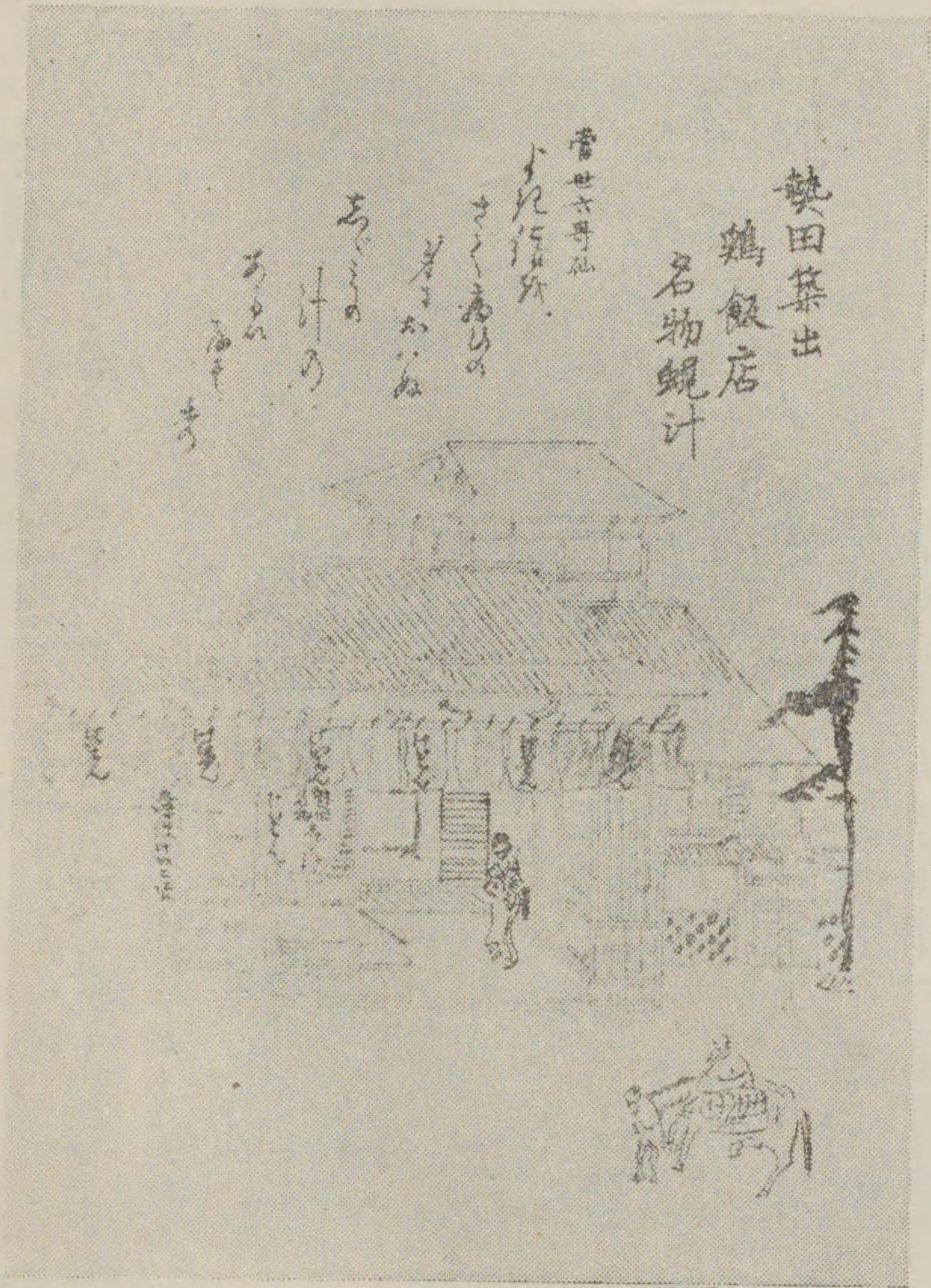
三

安永五丙申年五月二日夜熱田傳馬町之内三河屋の女郎尾
 上と申者、本町筋
 紙屋新助手代惣兵
 衛才^{廿四}心中致し相
 果る。紙屋には居
 不申、浪人のふり
 にて在所濃州大垣
 に遣し候由。沙汰^{しつた}に
 見ゆ

安永七戊戌年正月
 廿八日大松屋若竹
 屋柿屋三軒所拂ひ
 に相成同上。

四

此唄の唄はヤシ
 其奴ハ殿奴者^{ドイフジヤ}く。



「權兵衛が茶の湯でコリヤないく。」

是は、神戸町南はづれ東側の角成し新柏屋權兵衛と云

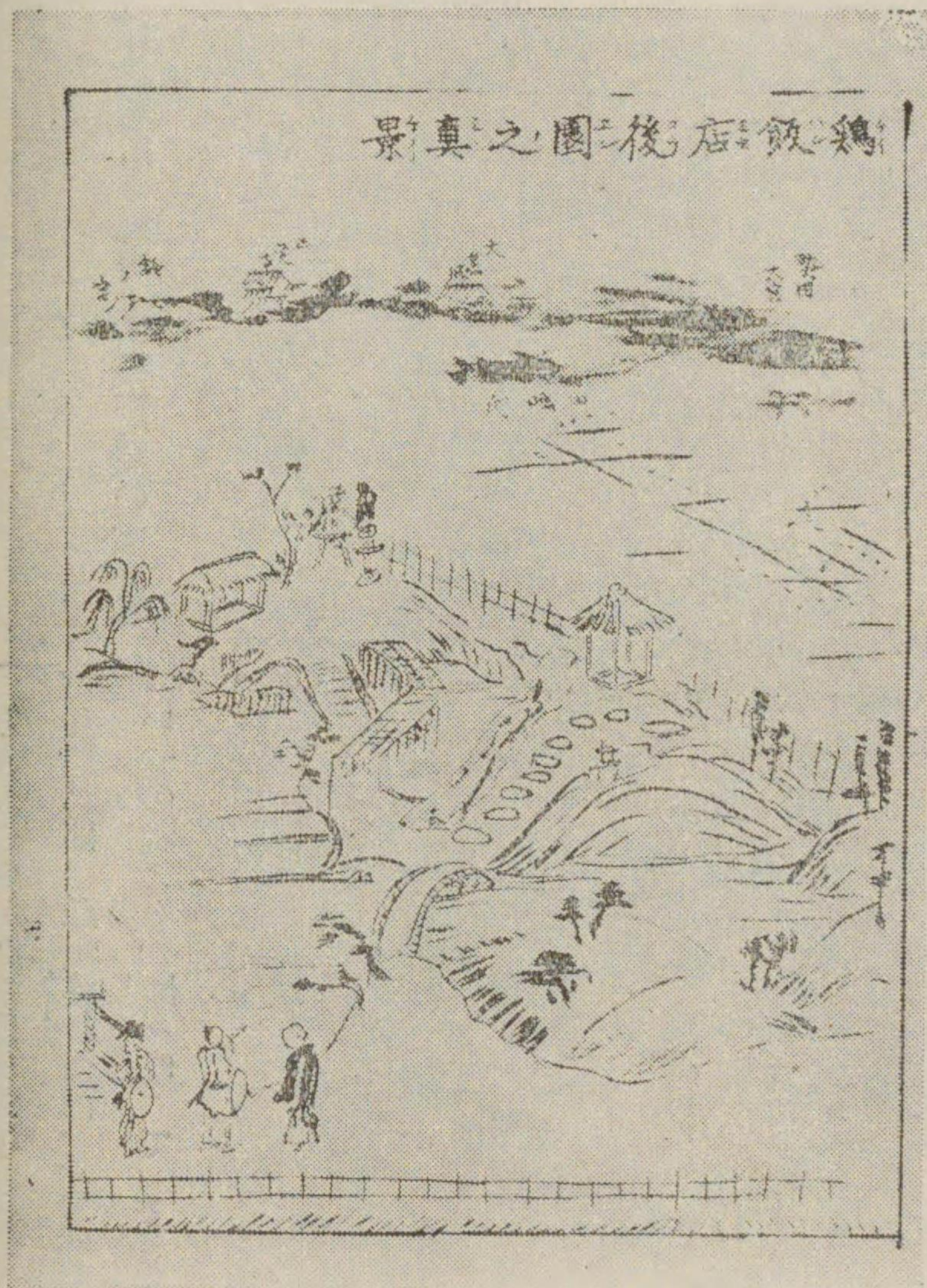
五

と或大一座の客の節、囃子けるが、大に興ありて笑しか
 りければ、此唄^{ウタ}時^{トキ}には、必ず此囃子する事と成居しが、
 いつの程よりか殿々^{ドムドム}吃りて、ドマイツドイ^{ドマイツドイ}と成てよ
 り、浮世はさくさ
 くと折返し囃子事
 とは成しと、翼樓
 老人の話にて、夫
 故誰名付るとはな
 くて、ドマイツぶ
 しとはいひ初しと
 也。其後とても色
 々と囃子^{ウタ}は臨機應
 變にして、其登ッ
 貳ツを爰にしる
 す。

者、元は、狀使ひとやらにて、一向な者成しが、仕合能く女郎屋をはじめしが、追々と身上取上席を取建、茶の稽古をはじめしと、人々笑ひしを、ふと權兵衛が茶の湯でコッナイといひしが、流行となりて、無性にかく流行となりし也。

し候節、其頃世の落首にも、雀海中に入て蛤と成、女郎買十々五ッ過て僧と成。石臼屋 空鯛上人

「してやれく、坊主にしてやれく。」
是は、橘町七面横町角なる石白屋忤儀藏、甚放當にて、此宮の女郎に身上をも傾んとせしを、親々は勿論親類迄持餘し、勘當分に相成建中寺え遣し弟子と致

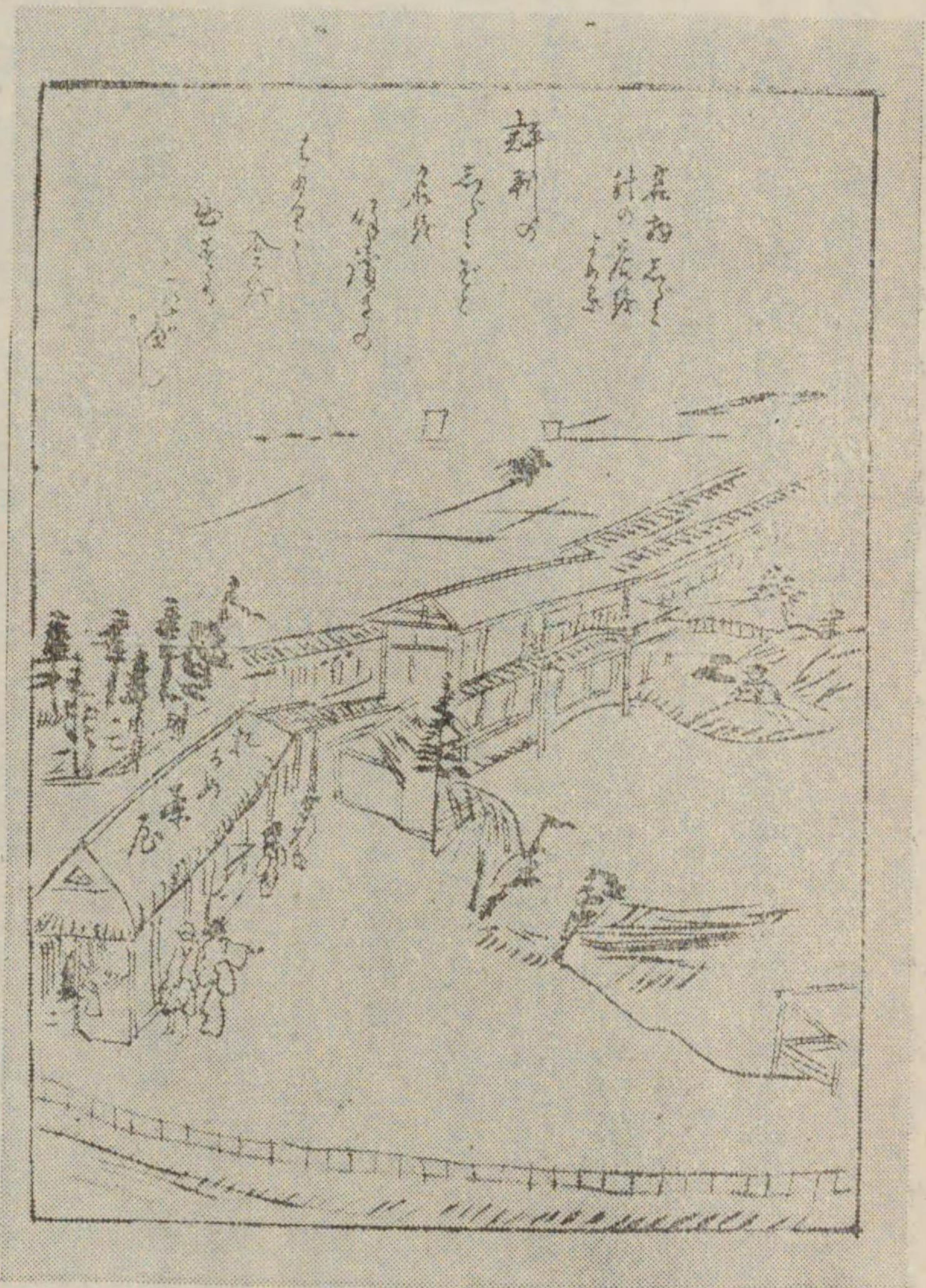


「ひやうたん川へ蹴込で、うつかりびよんと浮て来た。」
「小めくら川へけこんで、杖から先へ浮て来た。」
此外さまんなるはやし有りしが、幼年の頃の事故、ふつと忘れしなり

本質子「雀が岡での

神前に數多の兜あり、其中にこれがたかさださんの兜なり。サ、かほよが目利はよし〜。

「鹽谷判官たかさだは、白木の三方腹切刀、由良之介はまだ來ぬか、ササ追付參上よしよし。」



「十二梯子の二階より、お輕は見卸すのん〜のべ鏡、下で由良之介が文をよむ。サ、縁の下で九太夫がよしよし。」
「向ふより來る小提灯伊吾よく〜と呼でも見たけれど、可愛吉松は誰と寐た、サ、お父さんとねたならよし〜。」
此外は忘れたる後。

をうりたり。元は府下にて鶏飯のうつしを仕出せしが、此地にうつりて、茶屋を始む。其故に鶏飯が店と呼しなり。此うちの下女をおかめといふ。此女かの茶屋の庭に、床臺を出して茶菓子杯賣しが、いつとなくおかめが店とて、流行出せり。何故とならば、此出店の座敷へ上

熱田作

二階足音響
阿龜滿座敷
哥是吉々節
通言有亦無
七

宮の宿のはたご屋なる飯盛女をおかめと呼事は、寛政十二申のとしの秋、熱田の築出しの町はづれに大なる茶屋有て、蜆汁

らんにおかめ御免の高札が御座候由。「頭註」宮よ熱田の姥堂のほしにお龜御札の所の人の來れかし尋ね申さばやと存候。シテ女詞なふくあれなる旅人へ申べき事の候。御身は此所一見の御かたにて候か。ワキさん候始て一見の者にて候。ここかしこ教へて給り候へ。シテやすき間の事。をしへてまるらせ候べし。ワキ「まづ是に大なる茶屋と見えて候が、二階座敷とありながら、軒端も朽あればはて、住人だにも無きと見えたり。こはそもいかなる事やらん。シテ「さん候是につきあほうなる物語の候。昔此所に鶏飯が店とて蜆汁を肴に酒をすゝめ女を出して客をもてなす。されば若き人く。是がためあまたの鼻を落す。其むくひにやあるじも絶てかやふにあればはて候よ。ワキ又此里の遊君をばおかめと惣名に呼候は。いかなる仔細にて候ぞ。シテ「それも此茶屋の女なりしが。これ此所の賣女のはじめなるが故に。遊女の惣名となつて候。思ひ出れば淺ましや此女故に旅人の。鼻を落せし悪業の程。汁と成たる蜆と共に後の世いかとおそろしさよ。ワキカ、ルそれは昔の物語なるを。調さめく」と歎き給ふこそ不

審なれ。シテみづからとても此里の。同じ流れの女なれば。上原其罪とがも澤下のく。名もいちじるき汁の實の。はては悪趣の縁の下に。ヤハル色欲を勸む世渡りのヤハがいけ山椒の目にうかぶ。泪いとまなき。ワキ御心安く思し召せ。彌陀の悲願にすがりつゝ。念佛を。だに唱ふれば。いかなる重き罪劫もたとへ火の中水のそこ二つの河をも安くと。「頭註」野中おろかな事よ。調渡りて浄土へいたるべし。シテ「なふその二ツの河といふは、神戸傳馬のさかひにても。ワキ「思ひきる瀬とシテ「きらぬ瀬との。「頭註」神戸傳馬に川瀬がござる思。同上「二河の流の身をだにもく。もらさですくひおはします。佛のちかひ有がたや。かくとはしらで白梅の障子もあけの夕日影。「頭註」白障子に白梅。来て。紅葉の座敷龍田ならで。「頭註」障子明れば紅葉の座敷。龍田の湯のなみ松に。お茶屋の烏むれ立て。なくも其夜の客による。「頭註」うたへ編お茶屋のからす。なくもその夜の客による。浪間にかくれ失にけりく。狂言か様に候うものは。此あたりに住居いたす者にて候。今宵は新長屋へ参りおくりかけばやと存候。まかり出た。イヤ是に見なれ申るぬ御方の候。何國より何方へ

御通りなれば。此所に休らふては御座候。ワキ御身は所の人にて渡り候か。ちと尋ね申度事の候。近う來り候て給はり候へ。狂言「さて御尋ねとはいかやうなる御用にて候ぞ。ワキ「近頃存よらざるたづねにては候共。此所におるてけいはんの茶屋。蜆汁の由來。又此所の遊女を。おかめと惣名によぶ仔細御存におるては。語て聞され候へ。狂言「是はおもひもよらぬ事を御たづね候物かな。所には住候得共。くわしき仔細は存ぜず候。さりながら承り及びたる通り、御物語り申そふするにて候。語り抑鶏飯と申茶屋は、始は名古屋に住人にて、御座有けに候。唐のきびを煮て其汁を用ひ、是にて飯を炊て、庭鳥飯の似せを仕出し、渡世となしたる故に。鶏の飯と書てけいはんとはよめり。其後此所にひきうつり。爰にて茶屋をはじめつゝ。しゝみ汁を肴に酒をすゝめ。あまたの女を出して客をもてなし、庭にはつき山泉水を造り。春の花秋の月。四季の詠め淺からず。さながら揚屋のごとくにて、御座ありたるとこそ。されば若き人々爰に遊びて。鼻を落し歎き悲む者かすをしらず。其むくひにや、主も

絶はて。かやうの體となりて候。またおかめといつば、是も此店の女なりしが、彼の庭に床茶屋を出し、おかめが茶屋と名もたかく、是此さとのばい女のはじめなるをもつて、遊女の惣名によぶよし承及びて候。唯今の御尋ね不審に存候。ワキ「長々の御物語しう着申て候。尋ね申す事よのぎにあらず。御身いぜん。さもあでやかなる女性壹人來られ、おかめ蜆汁の事を身のうへのやうにかたり。そののちすがたを見失ひて候程に、余りにふしんに存、かたかく尋申よ。狂言「是は不思議なことを承り候物かな。我等推量申に。御身のづうにましますにより、蜆汁の幽霊假りに顯れ、聲詞をまかはしたるかと存候。道をいそぎの御醫者なりとも。今宵は此所に御とう留候て。念頃に跡をとふて御迎りあれかしと存候。ワキ「我らも左やうに存候。狂言「かさねて御用の事候は、仰候へ。ワキ「頼候べし。狂言「心得申て候。ワキ「調さては蜆汁の幽霊假にあらはれ、我に言葉をかはしけるぞや。今宵は夜と友に。念佛申さむ所がら。上頼もしや。みだの三國の町近きく。爰もごくらく神戸なれ。たゞ西々と思ふ身の。

東むくきは更々になき跡いざや。〔頭註〕わしが思ひは只西々と、東むくきはさらにはない。
 とぶらはんく。シテ荒有が鯛屋の萌黄の蚊屋も今は七重の羅網のうちに。無爲の永樂をうけ、猶々念佛し給へかし。ワキ詞「不思議やなありしに替れる女性の有様。扱は成佛するが屋と。シテ詞身には攝取の光明の影。あたりを光し柏屋に。ワキ長門屋の長き無明の闇を破し。シテ「生死の海罪障の。山田屋も逢に隔つ。〔巻〕詞此よろこびの言の葉を。語らん爲に参りたり。ワキかゝるきどくを官のふし。哥舞の菩だいの妙音にて、一ふしうたひ給へとよ。シテいでくさらばと三味線の、糸のしらべも五女の。ワキ調子に法の聲添て。シテおかめのうたを。ワキうたひけり。クリ地夫此里のさはぎうたは、どいつの比如何成人の。うたひそめけん定めなき。うき世はさくくやあとやとく。サシシテ然るにおかめが生れ信濃路や、月の名所を見すてつ、〔頭註〕わしが在所は信濃の生れ。きたりて是や此里のうかれ女となつて。住けるに。クセ其頃何某といへる商人の。こゝにやすみてありけるが、おかめ居寄ていふ様。我はうかれ女の。哥にうさをまぎれなむ。君は商

ひに。お氣やつまるらん、〔頭註〕わたくしやどいつでまぎれるし。痛はしとて、いと念頃に酒をすゝめ。しばしかり寐の床茶屋に。なじみ重なる熱田海の。ふかき契りをむすびしが。
〔頭註〕なじみ重なる熱田の海は、はまり込たる深い仲。されども川竹のうき節しけく来る客の。人目忍ぶの摺衣。裏ふる、間もなさけなや。逢ふ事はたまさか〔頭註〕逢ふはたまさか逢はねば千夜通ひ車のわがことよ。あはでぞ歸る道芝の。つゆ時雨森下に。ちりし落葉の敷よりも、つもる思ひのやるせなく。〔頭註〕わしが思ひはこの森下に、折々毎に門に来て。シテ吹や東風、上れよ暖簾こすのひま。少し節を三芳野の〔頭註〕吹けやこ風、上よのれん、少しお顔が拜した。川をへだつる心地して。いも山せ山ま、ならぬ〔頭註〕わしとお前は妹山背山顔を見ながらまゝならぬ。世を恨み身をかこち、彼の主のつまを追ひ出させ、子はしめころせ、其跡へ我や行ましと悪念の。〔頭註〕おかゝらば出せ子はしめころせ、跡の替りにわしになる。身にむくひてぞ。二世かけし約束かたき石山も、早秋のつきはてし〔頭註〕かたい約束石山なれど、秋の月とは是非もなき。縁こそうき世なりけれ。シテ「過し昔の物語きくにつけても人心。眞如の月夜ばかりかは、闇も有ける戀の道。〔頭註〕きはきらんせいくたびならシハ「實女氣のあともなく、請出されなばかいどりの姿をや

めて。若竹のつまもそばにて針しごと。〔頭註〕うけ出されたらぬしのお側で針仕事。「扱そひとけば、子を右に主を左の中にねて、シテ「川てふ文字にならんと〔頭註〕ぬしを左に我子は右に川、時節をまつのシテ「千代迄も、回戀らじと思ふ甲斐もなき。うさを見せじもみづからが。仲立と成少し故ぞとは。〔本ノマ、〕思ひしゝみの汁鍋や。しやくしの教へ彌陀佛に、すくひ取られしうれしさを。つゝめどあまる袖ふれて、報謝の舞をかなでんく。〔太鼓〕和歌君と我が、舞上シテ君と我が。中をたとは、夜半の雪。〔和歌〕人しらぬ間に深くこそなれく。〔頭註〕わしとお前は夜降る雪よ、人しらぬ間にふかくなる。シテ「深き誓ひにひかれて今は。この鶯にひまや梅の上、色香も妙なりシテ「異香くんじつ、同クル「隣々の桃や櫻の〔頭註〕浮気鶯梅に隣りて、花降る空にシテ「おのづからなる音楽の鼓吹上同ハル「すひた水仙しだりし柳の暇申さむ心は石竹、シテ「氣は紅葉は〔頭註〕すた水仙しだりし柳、同クル「あけを奪ふや紫の雲のあけを奪ふや紫の雲の行衛も知らずぞ。なりにける。

文化三丙寅年三月十五日熱田驛神戸傳馬町飯盛女、表

向願相濟、壹軒貳人差遣候筈、壹人七分五厘と指出
 筈、晦日に宿年寄取集上納仕、尤三味線も御免、熱田
 驛ニ伊勢子百五十人程之由。

一三
 ○文化二乙丑年十一月はしりがね〔船〕花御免。〔此はしりがねと故にかくいふとぞ。〕
 ○文化三丙寅年春、おかめ駕籠願濟ニテ大ニ流行。

<p>永通寶 一チ座元阿しら古柏</p>	<p>菓子屋竹三郎 古錢屋岡野</p>	<p>代尾崎屋吉兵衛 心中操の相知瀉</p>	<p>差潮 一部</p>
	<p>乍 一御町中御龜買様方御機嫌能被遊御座恐悅至極 奉存候隨ひまして此度何かな御なぐさみと奉存 候處、不調法成者共寄集狂亂仕候、誠以親子様 の御叱りも不顧横行候段近頃奉恐入候色々取込 入御覽候間殿方様にも狂亂の評判宜奉希上候。</p>	<p>上口 一御町中御龜買様方御機嫌能被遊御座恐悅至極 奉存候隨ひまして此度何かな御なぐさみと奉存 候處、不調法成者共寄集狂亂仕候、誠以親子様 の御叱りも不顧横行候段近頃奉恐入候色々取込 入御覽候間殿方様にも狂亂の評判宜奉希上候。</p>	<p>四三九</p>

合

此紋所ハ

菓子屋竹三郎

前生ハ鏡山の

岩

藤

心中操能相知瀉

壹差

部潮

○

此紋所ハ

古銭屋岡野

前生ハ鏡山の

尾

上

役者替名之次第

- 一、稻熊 太郎 淺尾 奥山
- 一、若イ者市助 大谷 杉藏
- 一、若イ者喜助 中村葉五郎
- 一、代官五十嵐八之進 三柝爲五郎
- 一、うらなひ見通し 嵐冠十郎
- 一、菓子屋竹三郎 尾上新七
- 一、古銭屋岡野 澤村田之助
- 一、取手大ぜい
- 一、若イ者大ぜい

太夫

春節身請太夫

三味線

同 澄太夫

同 金澤出來助

同 銀右衛門

造り物向ふ淺黄幕、正面辻社白木の鳥井、燈籠、杉松所々に程よく、都て太神宮ようはい所のかゝり、相方大小入りエイヤキにて幕明くと、爲五郎代官の形、取手大勢連出。

爲五郎 一、參れ。

ト、本舞臺へ分、みなく付出る。

爲五郎 一、當春笠着寺の庭前におるて松ケ根より堀出したと有寶塔真かいなる似せ物。是全く稻熊兄弟が仕業。まつた一味のやつら見付次第からめて取れ。

コリヤ

ト、兩人を左右へ近付きまやき。

ナ、合點がいたか。

爲五郎 一、心得ました。

爲五郎 一、かたぐ參れ。

みなくハア引

ト橋がかりへ滑入。ト神前の戸帳を明け奥山稻熊にて、すこき形なり。

奥山

一、てもひやいな事。うまうしこんだ大仕事。コレジャお釜はほり出せぬはへ。二ツ山の金のばれに、づきがまはつて、てもこわやの。ドリヤそろくとふけらうかい。

爲五郎

トのさりく、花道へ行。跡より取手付出よき所にてこしつなぎに成本舞臺へ戻り、しかく有て、無言つたて宜しく、たんくはなやかなるたてに成、ト奥山、跡をくらまし、花道へ行。

くせ物。

くせ物は、此の道すじを。者共つゞけ。

みなく

ハア引

トばた／＼にてはしり這入、とチョン／＼にて見付の道具引淺黄幕切落す。向ふ一面橋が／＼、取付濱へかゝり宿屋の體、うき繪書懸行燈家名印、上の方奥深く大鳥居、下の方高燈籠。霞繪に廊の二階などよろしく、道具しまると、

○口上罷出、東西く、是よりげい事のはじまり、則狂言の外題、竹三岡野心中、操の相智がた、淨るり太夫宮蘭鸞鳳軒、同じく氏太夫、三味せん竹澤右近、いよ／＼道行のはじまり、さやう。

霜がれぬ廓の二階花盛り、うそと實の二表て、この手拍屋跡になし、しのぶ身てらす高燈籠。火かけをさむく白むくや、うへはよもぎが島ごろへ、對の小袖の比翼紋、重る義理にからまれて、つなぐ筏の竹三郎、流れの浮身やう／＼と、ぬけて岡野が歩行はだし、とも呼續の濱づたい、夜寒の里の夜嵐も、ますさへぎるはだとはだ、あた、められて熱田瀉、あすは浮名の辰巳杵、人目堤の松林、千代に八千代の契りさへ、短きるにしふしの間も、あわで此世を過すかと、互ひにわつとなくちどり、袖に波越沖の石、はやふけわたる多渡山おろし、物すさまじき冬の空、哀れをつぐる藏福寺、兼てなき身と思へ共、沙婆の神戸のつきやらで、追つて廓の日の光り、やりすごさんと身を忍び、あし原さしてたどり行。

ト花道上屋の内より、

一、オ、イ、竹さんイノウ、岡野さんイノウ。

ト本舞臺へ来て、並よく

一、喜助コリヤマアどふしたらよからうぞい。

一、ドウと云うたら外に思案はない。中島から三國

の方を尋ねてかい。

一、何をいふぞいヤイ、けち兵衛と云かへ、玉をつかまして立のくくめん、けち兵衛ぐるみに逃さらした。テモけち兵衛ナ奴デハ有ハイ。

一、まちやく。それがしつらくかんが見るに、とへいもない遠方へ行おつたのじや。

一、遠方はどちじやく。

一、てつきりこふじや。からくりの口上ではないが、江戸じやく。

一、江戸はどつちじやく。

一、お江戸は浅草の俵町エイハツく。

一、何をぬかすぞい。イヤしやれ所では有るまいがな。

ト此きつかけて、在所哥になると、橋懸りより冠十郎くわい天窓、ひふの着附、うらないの形にて、

一、按摩針のりやうじ、當卦人本卦相手の筋、墨色失物の考へ。

トよき所にて、

一、しかもべたとひつつるて放れまいがの。左様く、ひついて放れませぬ、何所にります

ナ。

一、外へはいかぬによつて、戸棚の隅の方にかゝん居る。

一、アノ庭の戸棚の片隅に。

一、モシへあなた、ナント御らうじました。

一、井鉢に喰残りのむし菓子じや。

トびつくり。

一、なんと奇妙に見通しかの。あんま針、人相手のすぢ、墨色の考へ。

ト花道へ這入。

一、オ、イ、菓子ではない、人じやハイのふ、イヤ人ではない、くはしじやハイ、菓子がひつついて人がはなれぬハイ。

トわやくばたくにて残らず花道へ這入。と道具引分る、向ふ一面海邊の景色、所々にかざり船いさり火、

一、モシくうらなひの見通しさんじやムりませぬか。

一、オ、誰じやと思ふたら樂亭の若イ衆か。ひるは文珠さんの前で人相手の筋、夜るは廓を按摩けん引、コウかせいでもたまらぬ物は金と草履の裏斗じや。ハ、ハ、ハ、ハ。

一、イヤモきつう精が出ます。早速と私が所のかんじんの道具がうしなへたが、ナント見て下さりませぬか。

一、ナンジャ失物なら、のんで居るぞく。失物なら身共がことじやて。

ト懐中よりめどを出し、いろく有、なんじのたいせつね有によろし。まんじゆのあんべいさと有によろし。ハ、ハ、ハ、ハ。知れた、此失物はうまくさい代物じやて。

一、うまくそうムり舛。

一、色でかためておるわいヤイ。

一、奇妙く、色でかためておりますくらいか、

二重舞臺新開堤のてい。兩人みへよろしく波の音にて道具とまる。

一、コレ道々もいふ通り、春迄互ひにしんほうせば、身請して添してやらうと兄じや人の御情け、有がたい共忝いともいふにいわれぬやうしの身、先立タじや二親より現在の女房お籠、子までなしたをふりすて、ナントマアそなたと女夫にならりやうぞ。殊に義理有菓子屋の家。此言分を云たさに、爰迄は呼出した。爰の道理を聞分けて、そなたは廓へゐるでたも。所詮死なねばならぬ身の上、勤の内の心深はわすれはおかぬかたじけなひ。

と涙きわだつ斗りなり。聞て岡野は友泪、おまへに義理があるならば、わしも女子の義理が有。こふした元は誰が業、みんなわたしがぐちなから、そも突出しの初一座、始めてこんなに愛智濁、嬉し過たるむつごとを、寤覺の里の起ふしの、わすれた事はないわいナア。主が足音覺えそめ、もしや駕籠かと息杖の音出て出る格子先、文の返事も松風の里、使に見せぬいと、上書頼む男の文

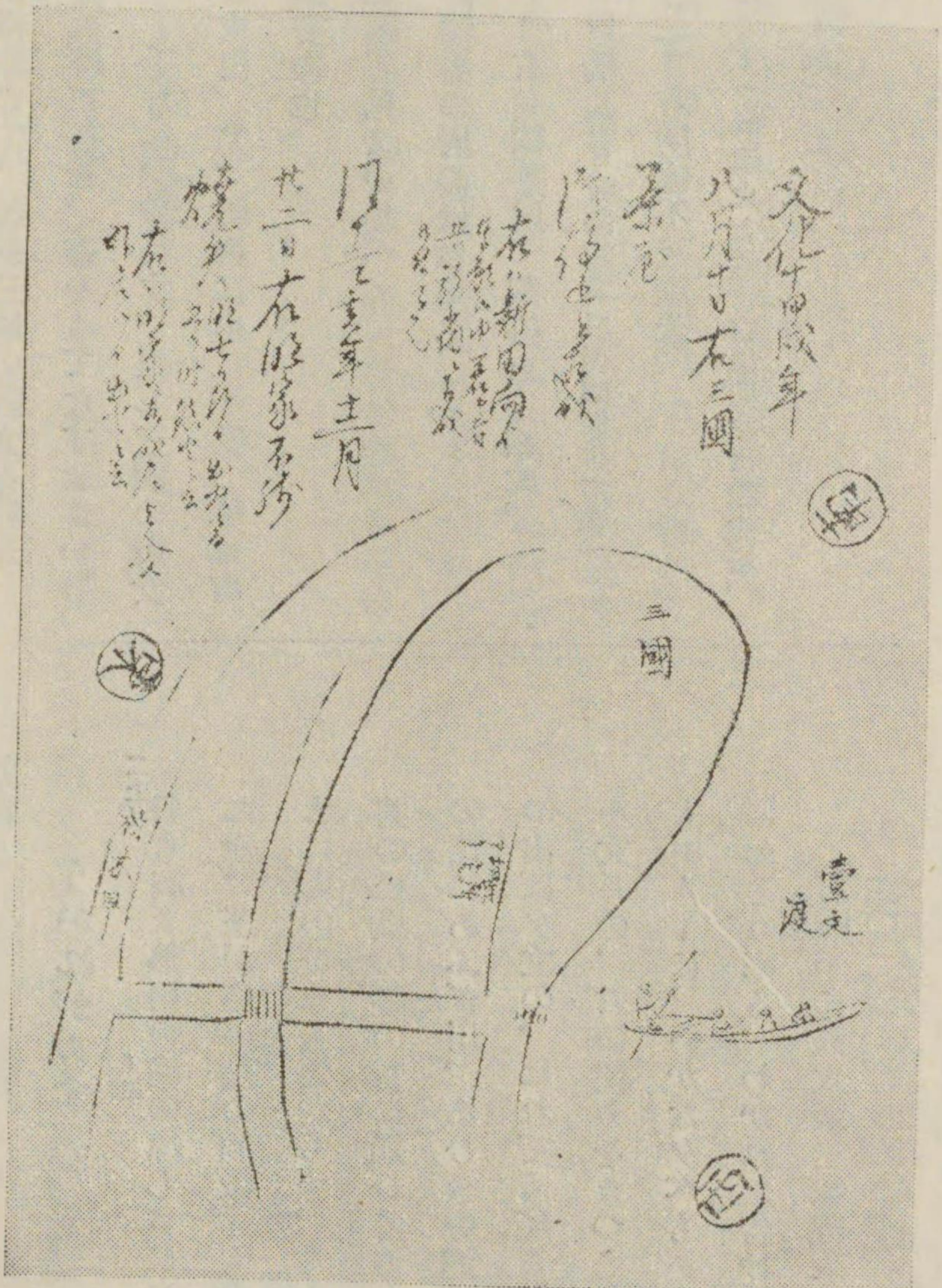
字、眞ことは筆にいわせても、うはべはうその手くだごと、それが口舌と鳴海鴻。二ッ村山のふた道を、そもやかけよと思ふては、年の明のを待ちかねて、かぞふる月日星崎の、いきちとひざりても、ひざりすぎかとあんじられ、笑ひに解るとこよ島、だいて根山も程もなく、明に千我麻のうらめしく、にくやお茶屋の明烏、まだきにないて告口の、侍輩衆や親方に、身請々々とせさせかれ、なんと返事を石田帯、御内義さんを引分て、花櫻田の春に成、どうマアそふて居られうぞ。死る覺悟をどうよくな、浮島原の全盛でもいやしい勤の私でも、情と義理に二ッはない、いつしよに死んで下さんせと俱に知死期を松子島、戀を立ぬく道中の森でぞ落る泪川、男もいそぐ磯打浪、くさり合たる袖袂、むすびとめたるつまとつま、はや東雲の雲見山、おくれじものと諸共に、歸らぬ死出の靈根島、女浪男浪のうづまく中、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、あへなき最期、その名ははつと立浪の、後の哀れと成にける。

千愁萬悽樂亭叶はず
文化十一年甲戌霜降月
作者 近比 吳龍軒
四四四

一五
大坂島の内心中
とりべやまのかへもんく
道行
源 三 汐能別禮路
おかと
讀うり一冊

女肌にはねづみあや、上にちりめん江戸模様、下にいたじめ黒じゆすの帯、年は廿二の返り算、汐にたゞやうぬれ姿。男も肌は唐さんの縞の合羽の色淺黄うら、二十五ッのやくだり、義理といふ字に身を捨小舟、どこへとりつく島とてもなし。斷夫の山はあなたごと死に行く身のうしろがみ、ひく三味線は神戸町、角の駿府の色酒に、

亂れて遊ぶお客有、あのおかしさを聞に付、こぞの初秋此かたは、かどどのそなたをかしわ屋へ、よぶたび毎に名をかへて、忍びあふた事思ひ出す、合羽かづいて茶屋ぞめき、仲居のこ
とに見付られ、め
いわくするも心か
ら、そなたにわし
が無理いふてせい
しさせたを思ひ出
す。おちや御殿の
むらがらす。かわ
い／＼の聲聞は、
みもちなら妻思ひ
出す。たがひにあ
とのほぢさへある
に、まよふまいと



は思ひはすれど、こゝぞ浮世のわかれの岸に、はやうござれと手に手を取て、行けどあゆめど目に見るごとに、

にぞ浮にける。

一六

今をはじめのおはりより、追手の物や來らんと、松湯の軒に身をよせて、汀のしほと消なんと、わつとふたりがせきくる涙、じつとかへて、コレおかどどの、モウ
なかしやんな、わ
しはなかねど、夫
レおや／＼の後の
なけきのたねなり
と、肌とはだとを
からめあひ、壹度
にどつと落る身
の、一足づゝに消
て行。終に此世の
今ふる霜や、折か
らに早寺／＼の鐘
もつきしに、夜は
しら／＼と藏の前

文化八辛未年四月、熱田一文渡場より南に、茶屋新に出
來して、於龜屋同前にして、二階座敷總體家作りも表付
よく、一寸廊ちよらといふ格好にて、越前三國の遊女を呼び、
三くにの唄を太鼓三味線に合せ、客をもてなすよふいひ
ふらして、三國くとなへ、流行す。但し三國の遊女
を呼びしは、名のみ成由、尤、神戸は申に不及、傳馬町
にくらべても下と云安物也。

戀しくは尋ね來て見よ中島へ

神戸傳馬の屑のはね出し

文化十甲戌年八月十日右三國茶屋、御停止と相成。

右は新田向より奉願候由、若き者共放當に相成候付て也。

同十二乙亥十二月廿二日右明家不殘燒失。

明七ツ頃より出火にて五ツ時鎮火と云。右は明家に相成居、
乞食臥居候より出火と云。

一七

○天保七丙申年五月朔日より熱田妓女

熱田太神宮並高藏の宮に參詣の儀 御免にて、已後
他行致し候由

名うごきておもはしからず○森の小鳥と留たる心用ひ
方薄しと其故は當時の熱田奉行森兵太夫と云もの苗字
を用ひたるは失禮なりと笑ひし

一九

踊の衣服左の通

畠山織と云白地に、唐藍にて秋の草花惣模様あり。
裏襟緋更紗糸縫、裾は裏有、紅梅練、帯は紅梅色り
んずさやもん、帯懸うこん縮緬、髪詰様當の通り
にて、指物なし。小筭壹本指。三味線の糸を赤白青
などに染、熱田の名物の藤園子の眞似をするなり。
或人云、席には硝子の簾を懸、猩々緋の敷物を用ひ
云々。

誰か川柳

木を五本よせて踊の舞臺かけ

當時熱田奉行森兵太夫殿、林又右衛門殿、兩人故とぞ。

二〇

○天保十己亥年彌生、熱田傳馬町柳屋長右衛門、黄花
樓出來。其席の唱歌。

一八

○同九戊戌年七月朔日より妓女總踊と云事をはじむ。
其唄

うかれがらす

二上り
名も高き熱田の浦の涼しさにひかれよる身は老せ
ぬや、蓬が島の菊の酒汲ども盡ぬ玉の井の、三下り
えにしのひまも遠からず、ちかまの烟ふきなびく
其の松風の琴の音に通ひくるわの夕景色。ぞめき
の花にあふぎ川、あひきの浦に打つ浪の、だんぶ
の山は夕立の、はれても残る雲見山合はれぬ思ひ
を文月の、君の便りをまつこじま、よびつぐ世話
も中く、いかな夕べもあゆち瀉、ねざめの鐘
におどり來る、わかれな告げそ森の小がらす。

右囃子に鼓太鼓三味線入

大組と云ふは四拾人、小組と云ふは貳拾人。

(朱書頭註)
或人下の歌を評して云。○通ひ曲輪、熱田驛なるに當ら
ず○だんぶ山、根山と云が本名なればやはり根山とい
ひたし○よびつぐ、呼續をよびつぐといへるは名所の

千代のやどり

本調子
柳葉のひと葉を秋のわたし船、あまのかはらのあ
ふせまつ、ほしるにもにはのしら菊の、花をいた
はるきせわたに、合はだあた、めて、まつよひの、
うさをなぐさむひとふしは、合おきな艸さえうか
れ出む、まへやくるへやてふくの、花にうかれ
て此やどに、千代もへぬべしおもかけの、かわらよ
もぎに下露の、めぐみうけんとおもひやる。合三下
りかのもろこしのかぶろぎく、こえし枕を戀風や、
香を吹あけのはまのなみ、合よるくごにおも
ひねの、床のていけの花と見られむ。

浪花

榛園秋津作
菊賀勾當開

二一

○同十亥年八月十五日、熱田驛妓女屋に有之藝子他國に藝子
船へ連行事相濟

同じ頃より周魚亭神戸町柳屋 妓女を止めて揚屋と
成。

四 笑本板古猫

二階すまいのよりあひせかい
 いつかはなれてぬしのそば。
 まことおまへがじやうあるならば
 年のあくまでまたしやんせ。
 あだにされてもじらされるのも
 みんなわたしがのろひゆへ。
 惚れていれどもまだぬしさんの
 心しれねばあかしかね。
 實なよふでも男はうわき
 何をいふても一さかり。
 綾やにしきにくるまるとても
 いやな枕はかわしやせぬ。
 立つを引とめまあまたしやんせ
 はなしのこした事がある。
 ものやおもふと問ふ人あらば
 せめて語らんぬしのこと。

しんなはなしも一座へゑんりよ
 むだでわかれてあと悔む。
 胸になみだをわしや持ながら
 あいそづかしもときの義理。
 目にはなみだをわしやもちながら
 いやな座敷のせじ笑ひ。
 あんなお方といわんとすれど
 かほと心はゆきとすみ。
 むちやなよふでもまさかの時は
 ぬしの顔をばつぶしやせぬ。
 人のいふ事わしや辻うらよ
 きけば添れぬ事ばかり。
 わたしやかうしてこがれて居るに
 おもひ出すやらださぬやら。
 たとへわたしはどふなと儘よ
 ぬしの顔さへ立てばよい。
 ぐちがいやならなぜそのよふに
 あだな心もちなんす。

見捨さんすなはかないとても
 ひんなくらしは世のならひ。
 酒は身の毒しりつゝわしも
 つらる座敷のうさはらし。
 人目のべばわしや恨めしい
 あけていわれぬ身のつらさ。
 はやく年あけおまへの側で
 すきな氣儘がして見たい。
 男づくじやの付あひじやのと
 あだをさんしてすむかないな。
 おもふお人にわしや添ふ事も
 ならぬ浮世にうかくと。
 木にもかやにもおまへを便り
 それに邪見な事ばかり。
 一夜なりともあふたるうへは
 よしにするともきれるとも。
 隠す事までおまへにあかし
 ひよんな苦勞もわたしゆへ。

のろひ心を見てみぬふり
 じらされるのがはらがたつ。
 へだてられるはいとひはせぬが
 かけの噂はわしやつらる。
 あわで此世を過して居ても
 すゑはたがひの胸のうち。
 待もわかれもわしやないよふに
 はやくわが妻こちの人。
 はやく此家をめでたくかしく
 ぬしと二人で暮したや。
 心からとはわしや言ながら
 かうもあわれぬものかないな。
 あわぬむかしへ立かへれとは
 いわんながらもはらがたつ。
 まことおまへがじやうあるならば
 浮氣さんすな(五字欠)。
 つらひ勤のわしやその中に
 末に添ふのをたのしみに。

邪見ばかりがおとこのじやうか

たまになさけもかけさんせ。

にけてみせねば果しがつかぬ

(下句欠)

一夜ながれのあだゆめさへも

さめてくやしきひとり言。

いきで利發で男もよふて

それで實氣もたんとある。

まことあるなら浮氣をせずに

わしに安堵をさせてみな。

人がどのよにいわふとまゝよ

かわらしやんすな逢すとも。

ぬしに逢たびほうばいしうに

なぶられるのもわしや嬉し。

無理な事してとゝかぬよりも

心さだめてすゑながく。

心定めりやまよひはせぬが

よもやく／＼にひかされて。

おもふそちより猶さらわしは

つれて行たやわがうちへ。

あだとしりつゝ、我身ののろさ

人もかふしたものかいな。

ぐちな女じやはてやかましい

永く勤をさせはせぬ。

しばしあわねば姿もかほも

かわるものかやこゝろまで。

永い月日をまたせるからは

おれも丁簡ないじやない。

さきじやいやがりわたしが惚て

おもわしやうとはむりな事。

ういもつらいもわしや心から

人にうらみはないわひな。

おもひきろふと身で身を異見

しあんするほどきられぬ。

ひよんなこの身に縁あるそなた

苦勞させるがわしやつらい。

未練ながらもいまたびは

あふたうへではどうなりと。

人にのろひとなぶられるのも

ぬしの事ならいとやせぬ。

いやな異見もきくわがこゝろ

するにそなたを呼たさに。

遠ざかるのも氣にかけやるな

すこししあんのある事じや。

はらの立ときや喧嘩もするが

あとであやまるほれた情。

人のいふ事氣にかけやるな

わしはそなたをばづしやせん。

かへる裾ひきかほふりあけて

なみだぐんだが氣にかゝる。

わしがおもひでてる日も曇る

さゑた月夜もやみとなる

いきもいきじやがおとこもよゑが

情のないのが玉にきず。

思ひ出すほどわしや戀しさの

腹のたつほどまゝならぬ。

人の心もさつしもせずに

あふとその夜にむりばかり。

わしがかぶるはいとひはせぬが

ぬしはおへやへつらからふ。

のろいやつじやとさけしむわしを

したふあの子が氣がしれぬ。

むりも聞たりいゝわけしたり

まさか未練できれられぬ。

いつかそなたを我家へよんで

いくぢないのがわしや見たい。

きれてくれとはわしや表むき

しんの心はきれはせぬ。

けふの日もたちまたあすの日も

氣をもみぢ葉の立田川。

年季まぢくもし死んだなら

さいのかわらで添ふて見しよ。

ほんか本所にいるとのふみの

返事やるのも片だより。

戀の土橋になさけの仲町

いろをおもてのやぐら下。

ぬしは丈なしかづさの生れ

わたしや信濃で氣がおひひ。

つとめなりやこそ上田に八丈

國じやあかねの裾もよふ。

いやなおきやくと寝た夜は永ひ

鳴てくれよや明がらす。

なじみかさなりや咄しもあるが

まことあかすはぬしひとり。

ぐちをいわすと此手を見たと

かへるこの身はなをつらい。

定めなき世のわしやその中に

まことあかすはぬし獨り。

ぬしに添れざわしやいつまでも

やもめ暮して末をまつ。

永ひのれんに帳場のすまひ

出ばんかけ日をまつらさ。

うそを賣のがせうばいなれど

わたしや正しき虚きらい。

しんなはなしに夜は明烏

かあ／＼と氣のきかぬ。

おもひなをして鏡にむかい

またも泪のうすけしやう。

ぬしをまつ夜は人こそしらぬ

時をかぞへてたゝみざん。

妹背山ではわしやなけれども

川をへだてゝまゝならぬ。

梅もさくらはも牡丹もいやよ

ぬしのうわさを菊かよい。

門に立たる女松と男まつ

中をとりもつしめかざり。

さつきさみだれよもぎうせうぶ

わしはおまるにのほり竿。

星の數ほどお人はあれど

月と見るのはぬしばかり。

ぴんと心にぜうまいおろし

鑑をわたすはぬしばかり。

梅も八重咲ほたんも八重よ

なぜに朝がほ一重さく。

きれてしまへど筆とりあけて

またも未練なへんじ書。

文はやりたし人目は多し

やらすとらすのむねのうち。

うわき鶯梅をばやめて

となり住よし松のはな。

わたしや心に錠まへおろし

どんな鑑でもあいはせぬ。

色氣づいたのつかぬぞなぞと

案じくらししてよこねやみ。

いたこいふよなわたしじやないが

せめて戀路のうさはらし。

かたい心のそのわたしをば

うわきものには誰がした。

足がついたの手がついたのと

お玉じやくしじやあるまいし。

きれたお人に途中であへば

ごみもはいらぬ目をこする。

くだを眞木町とつちかよふて

かほは赤坂かうし町。

あだで邪見で座敷でもて、

そして手のある床の内。

あんな野良めとおしやんすけれど

わしは吉野の花と見る。

形もきりやうも金にもほれぬ

とかく戀路はこころいき。

幾勢留手にとり膝たてなをし

わしがむりかとなみだぐむ。

ねがふ神さんよふきゝわけて

ぬしとそわせて下さんせ。

ぬしのこゝろとやかんのさゆは

わくもはやいがさめやすひ。

うちのしきいを高砂町で

こんなつまらぬ事はない。

ぬしの心とこもんのかみも

すこししめると切れやすい。

通なおまへに不通なわたし

なぜに心があふたやら。

ぬしとわしとのその仲町は

二世も三世もかわら町。

せめて三日もつがひの鳥と

人のうわさが身のねがひ。

墨とすゞりのこひ中々を

憎やしよにんの水をさす。

菊のませ垣ゆひこめられて

今はしのぶにしのばれぬ。

淀のくるまは水ゆへまはる

わしはぬしゆへ気がまわる。

飛たつよふにわしや思へども

さきははな哥しらぬ顔。

わしが心にや鏡まへおろし

帯からしたは明はなし。

しんく亂れてけさゆた髪を

ぬしの添寝でみだれがみ。

色でやせるかしんくがますか

たゞしつとめが苦になるか。

花と見られて咲ぬも悔し

さけば實になる恥かしや。

思ひきらふとわしやおもへども

にくやこゝろも儘ならず。

人の目かほをしのぶの里よ

わしがねがひはかくれ筈。

いきな心にほれたがむりか

女ころしのその目もと。

晝はうか／＼まほろし心

よるは夢路であいの山。

こらゑじやうなきそなたの心

丈があるならすへをまつ。

腹のたつとききれよふならば

戀に手くだはないわいな。

人がそらさば一どはきれて

じやうがたがひのむねの内。

町も所もおまへの名をも

しれて居ながら儘ならぬ。

おまへおもへば三どの食も

むねにつかへて積の種。

待どくらせどたよりのないは

きれてしまへの辻うらか。

すいな人さへ戀路にやまよふ

ましていたらぬわしじやもの。

いもせ山ではたがひにおもふ

わしは背山で片おもひ。

西もひがしも南もいやよ

わたしやおまへの北がよい。

色のいの字もよめないわしが

ぬしに隠れりや氣でよめる。

ぬしのこゝろと時雨のそらよ

わしをぢらす日とくせ。

きやんなおまへの心じやないか

來てはわたしをぶちころす。

うそと理づめできせうを書も

みんなぬしゆへそらなみだ。

人にや夏瘦するとはいへど

實はおまへがしやくの種。

こちら向んせこれこちの人

わたしやおまへのおかみさま。

うわのそらなる心としれど

わしが因果でかわゆらし。

だましくさつたとうふや男

縁はきらずにしてくれる。

まめなおかほを見りや嬉しいが

内のお首尾があんじられ。

わしはつとめであやなせば

野暮めはほんとうれしがる。

つれて逝てはせけんがすまぬ

おもひなをしてしんほしや。

世間かねるは浮氣なうちよ

しんにこる身でなんのその。

無理にしんほうしろうとはいわぬ

まよそんなら不明くらし。

廣いよふでもうき世はせまい

だれにはなそふ人もない。

人に相談するころなら

ぬしの心もしれたもの。

是さしたに居ろくおんな

これにやだんく譯がある。

むねに手をあてつまらぬもの

思ひながらもうかくと。

きれて見せねば世間がすまぬ

じよふはたがひのむねにある。

儘にならぬをうき世といへど

かうもまかせぬものかいな。

わしが苦勞はいとひはせぬが

ころがらとてぬしにまで。

日々に逢ふても別れはつらい

ましてたまさかあふものを。

あだなおいそれちよとほれ女

よくもだましてのめくと。

果しなきゆへわしや心引

なんのいまさらきれらりやう。

胸ぐらとつてこれ男づら

おもひきれとはきついしやれ。

むちやで聞ては腹立はづよ

心しづめて譯をきけ。

是さたしなめよく聞わけろ

おれもおとこがたぬぞや。

人のしやくりを間にうけさんす

ぬしの心もしれたもの。

はれちや逢れずきれるはいやよ

とかくうき世はまならぬ。

ゆめでなりとも逢たや見たや

夢じやせけんでしりはせぬ。

男ごころはなぜそのよふな

つよいばかりがならひかへ。

いやであらふとあきらめさんせ

禿たちにもあるならひ。

ぐちな女じやはてやかましい

わしが心をしりながら。

さきでよなれて物いふ時は

あじにひねつてあとくやむ。

面白そふにわしや暮せども

ふさがぬ日とてはないわいな。

情まじりの手ごとにまよひ

くろふするの心がら。

笑ふてつらいわしや日はあれど

泣てうれしい夜半もある

人の口には戸が立られぬ

ないもせぬ事とやかくと。

しらをきるなよ世間の人

ないもせぬ事いふものか。

かほどにおもふその甲斐もなく

ぬしは茶にしてむだ計り。

あだとしりつゝ此身ののろさ

人もかふしたものかひな。

ぐちも未練もくだらぬ事も

儘にならねばいふわいな。

ころがらとはわしやいながら

ひよんな苦勞をするわいな。

苦勞ある身にくろふを求め

ころがらとはいひながら。

義理も世間ももふかまやせぬ

とても浮名の立しだい。

勤する身に實をいわせ

あすばしやんすかきついしやれ。

是さ放せよかへらにやならぬ

ぐちをいわずにその羽織。

ゑゝもまたんせと袖引とめて

しんほさんせと目になみだ。

引手あまたのおまへの身でも

おもひきれとはあんまりな。

三月なりとも添ねばならぬ

ぬしはともあれわしや立ぬ。

一生やもめでくらそとまゝよ

いやな枕がかわさりやうか。

ぬれぬさきこそつゆをもちとへ

濡れていとひがあるものか。

のろひ心をわしや見ぬかれて

じらされるのがはらがたつ。

ほんにはかなひおまへとわたし

逢ふたしよてからまゝならぬ。

つとめする身に信がないと

どこのこけめがいゝすぎる。

はやく年あけおまへの側で

しんなそふだんして見たい。

儘にならぬをせうちで惚れて

あわでしれるも心から。

せんじ□けんが別れとならば

神もほとけもないかひな。

つれて逆ては男がたゝぬ

おりを見あわせ人頼み。

人をたのんでもしそわれずば

まゝよ浮名の立つるで。

あだなおまへにわしやのせられて

つなぐ契りもなきはしり舟。

ほんにおまへにまことがあらば

どんな心苦もいとやせぬ。

傾城にまことなしとは譯しらす

野暮な口からたいだんな。

まゝにならぬといふ事は

おまへやわしが身のうへを。

こ□□心のたゞひとすじに

外にお人もないよふに。

あんなお人にぢみちをかけて

さぞや世間で笑わんしよ。

人はどのよにいわふとまゝよ

わしがすいたが身のいんぐは。

むちやなよふでも是よく聞やれ

おれも男じや末を見ろ。

あすの命もしれぬが浮世

すゑを見ろとはあんまりな。

異見さんすないけんはきかぬ

つのがやするともきればせぬ。

人の異見できれよふならば

しよてに心はつくしやせぬ。

どふしたならばこのしんじつが

とゞいて實がいつ知れる。

とにもかくにもつまらぬものよ

心ばかりでまゝならぬ。

思ふおかたとわたしが胸を

いふてよかりよが笑わりよか。

雪駄やろうでだまされそうな

わしと見られて腹がたつ。

ぐちな事とおしかりなれど

是が眞實しんのこと。

わしが心をうたがわせんす

そのうたがひがなを嬉し。

こんなころでないわしが

おまゑにあふとぐちになる。

神やほとけをだますはまだよ

わしをだますと喰ころす。

ちよこらくが仲人となり

いまはしんじつわすられぬ。

まづいむまいのあんばいしらす

あだな目もとにくらいこみ。

鶏とかねとはわたしにやかたき

かわひおとこの目をさます。

君の心は花ならうれし

花の心はちりやすひ。

きみの心は雁金つばめ

くるとおもへばはやかゑる。

金がかたきじやそのかたきゆへ

ぬしもわたしも丸はだか。

青梅さんとめもめんが着たい

わしやきぬくはいけすかぬ。

梅をたつとは昔しの事さ

男きんぜいの札たてる。

二度とふたゝび見むきもされぬ

わたしや鏡のうらの梅。

君のころはうすがきなれど

わたしやくよく松葉色。

琴さみせんをきこふより

おまへのこゝときくがよい。

いこくさんすなつやいわんすな

わたしや生上田艶いわぬ。

その日ぐらしの朝がほさへも

かきねつとふて咲わいな。

なにをそのよにそふ氣のよわい

地まへかせいでふたり口。

ぬしをおもふはあのかけ鯛よ

たとへしんでも腹とはら。

ろうそくややはなびやが

とほしばかりでいやな客。

あの燭臺のろうそくの

ながれのすへがおもわるし。

女心とほたるのむしは

口でいわれず身を焦す。

わたしや野にふす出じややら

泣てくらし夜をあかす。

かわゆて憎ひちくしやうめ

くらるちらかすねこ男。

地獄極樂あるのおまへ

わしをちううにまよわせる。

手鍋さけうといふてはみたが

じつは乗たや玉のこし。

人はどのよにいわふと儘よ

やねへふる雪むねでとく。

五 粹の懐

目次

初篇

一 大つゑぶし 四七三
 二 同 かへうた 四七三
 三 同 かへうた 四七三
 四 同 かへうた 四七四
 五 同 かへうた 四七四
 六 同 かへうた 四七四
 七 よしこの 四七四
 八 一仲ぶし 四七六
 九 同 かへうた 四七六
 一〇 同 かへうた 四七六
 一一 同 かへうた 四七六
 一二 伊豫ぶし 四七六
 一三 同 かへうた 四七六
 一四 同 かへうた 四七七
 一五 因州いなば かへうた 四七七

一六 同 かへうた 四七七
 一七 同 かへうた 四七七
 一八 あだなるがほ 四七八
 一九 いざや行きませう 四七八
 二〇 同 かへうた 四七八
 二一 夕ぐれに 四七八
 二二 同 かへうた 四七八
 二三 わがものと本調子 四七八
 二四 夕立や三下り 四七九
 二五 同 かへうた 四七九
 二六 四季の香 二上り 四七九
 二七 同 つゞき 本調子 四七九
 二八 京四季 四七九
 二九 同 つゞき 四七九
 三〇 夜ざくらや 四八〇
 三一 忍ぶ夜は 四八〇
 三二 同 かへうた 四八〇
 三三 一夜明くれば 本調子 四八〇
 三四 十日戎 かへうた 四八〇
 三五 同 かへうた 四八〇

三六 川たけに 本調子 四八〇
 三七 同 かへうた 四八〇
 三八 一聲 本調子 四八一
 三九 めぐる日 本調子 四八一
 四〇 こゝろせきやに 本調子 四八一
 四一 水の出ばな 四八一
 四二 同 かへうた 本調子 四八一

第二篇

一 十二月手鞠歌 二上り 四八二
 二 福壽草 二上り 四八三
 三 一夜明れば 四八三
 四 水の出ばな 本調子 四八三
 五 同 かへうた 四八三
 六 ひとこゑ 本調子 四八三
 七 梅が香 かへうた 本調子 四八四
 八 齋藤 本調子 四八四
 九 あふた夜は 本調子 四八四
 一〇 同 かへうた 四八四
 一一 同 かへうた 四八四
 一二 ゆきくれて 本調子 四八四

一三 ながしの枝 四八四
 一四 江戸の四季 本調子 四八五
 一五 同 四八五
 一六 同 四八五
 一七 同 四八五
 一八 めぐる日 本調子 四八五
 一九 梅が香 本調子 四八五
 二〇 わがものと 本調子 四八五
 二一 しのぶうり 二上り 四八五
 二二 同 かへうた 四八六
 二三 ふみのたより 三下り 四八六
 二四 つがひはなれぬ 本調子 四八六
 二五 同 四八六
 二六 同 四八六
 二七 いたこ出じま 本調子 四八六
 二八 同 四八六
 二九 同 四八六
 三〇 一仲ぶし 本調子 四八六
 三一 同 四八七
 三二 同 四八七

三三 棚の達磨……………四八七
 三四 同……………四八七
 三五 同……………四八七
 三六 いんしゆういなば 本調子……………四八七
 三七 同……………四八七
 三八 こりやくぶし 二上り……………四八八
 三九 同……………四八八
 四〇 大津るぶし……………四八八
 四一 同……………四八八
 四二 同……………四八八
 四三 同……………四八九
 四四 うかれよしこの……………四八九

第三篇

一 大つるぶし……………四九一
 二 同……………四九一
 三 同……………四九一
 四 同……………四九一
 五 同……………四九二
 六 同……………四九二
 七 うかれよしこの……………四九二

八 福壽草 二上り……………四九四
 九 うめのはる 本調子……………四九四
 一〇 ながしの枝 本調子……………四九四
 一一 ほれてかよへば 三下り……………四九五
 一二 同 かへうた 同……………四九五
 一三 土手を通るは 三下り……………四九五
 一四 うらしま奥 二上り……………四九五
 一五 狂らん奥 二上り……………四九五
 一六 汐くみ奥 二上り……………四九六
 一七 かゞのちよ 本調子……………四九六
 一八 きくの追善うたかたみぐさ 二上り……………四九六
 一九 はなくたの つるかめ……………四九六
 二〇 あまいたの たかさご……………四九六
 二一 羅生もん……………四九六
 二二 とまわづ 老まつ 本調子……………四九六
 二三 新内明がらす上……………四九七
 二四 同らんてう……………四九八
 二五 さいもん かるかや……………四九八

第四篇

一 大つるぶし……………四九八

二 同……………四九八
 三 同……………五〇〇
 四 同……………五〇〇
 五 うかれよしこの……………五〇〇
 六 咲た櫻の木に 三下り……………五〇一
 七 同 かへうた……………五〇一
 八 今朝の雨に 本調子……………五〇二
 九 わしが思ひは 三下り……………五〇二
 一〇 引すぎに 三下り……………五〇二
 一一 同 かへうた……………五〇二
 一二 どぶぞかなへて 二上り……………五〇二
 一三 江戸の四季 本調子……………五〇二
 一四 同……………五〇二
 一五 同……………五〇二
 一六 同……………五〇三
 一七 春の梅 實川延太郎戌年
 二の變り新作唄……………五〇三
 一八 三國一の 本調子……………五〇三
 一九 同……………五〇三
 二〇 同……………五〇三
 二一 番はなれぬ 本調子……………五〇三

一二 同……………五〇三
 一三 同……………五〇三
 一四 さい藤 本調子……………五〇三
 一五 四季 本調子……………五〇四
 一六 同……………五〇四
 一七 同……………五〇四
 一八 同……………五〇四
 一九 露は尾ばな 本調子……………五〇四
 二〇 同 かへうた……………五〇四
 二一 同 かへうた……………五〇四
 二二 同 かへうた……………五〇四
 二三 越後の國の 二上り……………五〇四
 二四 見たいなく 二上り……………五〇五
 二五 同 かへうた……………五〇五
 二六 芝居の見通し 三下り 越獅子の合
 の手にあふ……………五〇五
 二七 新あしかり 本調子……………五〇五
 二八 奈良の大佛 三下り……………五〇五
 二九 同 つゞき……………五〇六
 三〇 同 つゞき……………五〇六
 三一 同 つゞき……………五〇六
 三二 同 つゞき……………五〇六

四二 くん どゞいつ 五〇六
 四三 同 五〇六
 四四 同 五〇六
 四五 物まねりやす 竹に巢をくむ 二上り 五〇七
 四六 一やうに 三下り 五〇七
 四七 琴うた 二上り 五〇七
 四八 同 五〇七
 四九 同 五〇七
 五〇 同 五〇七
 五一 はいりうた 三下り 五〇七
 五二 同 五〇七
 五三 茶屋ばの出 五〇七
 五四 ざいごうた 五〇七
 五五 同 五〇七
 五六 花を見るなら 三下り 五〇七
 五七 同 かへうた 同 五〇八
 五八 蝙蝠が 三下り 五〇八
 五九 世の中を 三下り 五〇八

第五篇

一 大つゑぶし 五〇八

二 同 五〇八
 三 同 五〇九
 四 同 五〇九
 五 よしこの 五〇九
 六 松の二葉 二上り 五〇九
 七 同 かへうた 同 五〇九
 八 おんらが在處 二上り 五〇九
 九 かんしやうぜう 三下り 五〇九
 一〇 同 かへうた 三下り 五〇九
 一一 同 三下り 五〇九
 一二 櫻見よとて 三下り 五〇九
 一三 同 かへうた 五〇九
 一四 づぼんほへ 二上り 五〇九
 一五 あふて云たい 二上り 五〇九
 一六 しょうがいな 二上り 五〇九
 一七 同 かへうた 五〇九
 一八 同 かへうた 五〇九
 一九 沖の大船 二上り 五〇九
 二〇 同 かへうた 五〇九
 二一 とつちりとん 五〇九

講成寺

一一二 山づくし 三下り 五三
 一一三 ひなぶり 五四
 一一四 淨るりさはりどゞいつ 五四
 一一五 同 五四
 一一六 同 五四
 一一七 同 五四
 一一八 同 五四
 一一九 春雨 かへうた 五五
 一二〇 やなぎく 二上り 五五
 一二一 柳ばしから 本調子 五五
 一二二 同 かへうた 五五
 一二三 わすれ唱歌 本調子 五五
 一二四 夕ぐれ かへうた 五五
 一二五 秋の七草 かへうた 五五
 一二六 二〇カ 五五

第六篇

一 大つゑぶし 五七
 二 同 五七
 三 同 五七

四 同 五八
 五 同 五八
 六 うかれよしこの 五八
 七 いやぶし 五八
 八 同 五八
 九 同 五八
 一〇 同 五八
 一一 ふみのたより 三下り 五八
 一二 むらさきの 三下り 五八
 一三 同 かへうた 五八
 一四 柳よく 三下り 五八
 一五 梅は北野の 三下り 五八
 一六 同 かへうた 五八
 一七 川かぜに 二上り 五八
 一八 いなり祭りの 二上り 五八
 一九 鎌倉のナ 二上り 五八
 二〇 同 二上り 五八
 二一 同 二上り 五八
 二二 同 五八
 二三 登り夜船 二上り 五八

二四 同 かへうた 二上り 五三
 二五 鎌倉北條 二上り 五三
 二六 四季 二上り 五三
 二七 同 五三
 二八 同 五三
 二九 同 五三
 三〇 七草合の手 コトバ 五三
 三一 おつかさん 二上り 五三
 三二 かみなり 二上り 五三
 三三 富士の裾野 二上り 五三
 三四 どっこいせうぶし 二上り 五三
 三五 同 五三
 三六 同 五三
 三七 物間似 宮本無四三 山の段かけあひ 五三
 三八 同 五三
 三九 同 五三
 ○佐くら藤五郎 五四
 ○藤五郎女房おさん 五五
 ○小はるや彌七 五五
 ○植木や杵右衛門 五五

第七篇

一 大つるぶし 五六
 二 同 五六
 三 同 五六
 四 同 五六
 五 同 五七
 六 同 五七
 七 うかれよしこの 五七
 八 高尾 三下り 五七
 九 ちるはうき 本調子 五七
 一〇 いたこ出じま 本調子 五九
 一一 同 五九
 一二 同 五九
 一三 棚の達磨 本調子 五九
 一四 同 五九
 一五 沖のくらしいのに 本調子 五九
 一六 同 五九
 一七 うめが香 本調子 五九
 一八 同 五九
 一九 ひとつくづや 本調子 五九

二〇 一夜明くれば かへ歌 五〇
 二一 長き夜の 同 五〇
 二二 同かへうた 五一
 二三 同 五一
 二四 きんときが 本調子 五一
 二五 のけば長者 本調子 五一
 二六 同かへうた 五一
 二七 おもひこんだる 同 五一
 二八 口説して 同 五一
 二九 松竹梅 成こまや 五一
 三〇 うば玉の 五一
 三一 おまへと一所に 同 五一
 三二 のほりくだりの 同 五一
 三三 まかしたからは 同 五一
 三四 タぐれにすだれ 同 五一
 三五 川たけかへうた 同 五一
 三六 抱いたるこの子を 同 五一
 三七 同 五一
 三八 同 五一
 三九 こりやくぶし 二上り 五三

第八篇

一 大津るぶし 五五
 二 同 五五
 三 同 五五
 四 同 五五
 五 同 五五
 六 同 五五
 七 うかれよしこの 五五

八 上るり入 よしこの 五八
 九 同 五九
 一〇 同 五九
 一一 同 五九
 一二 同 五九
 一三 同 五九
 一四 同 五九
 一五 いつしかに 二上り 五九
 一六 同 つゞきかへうた 五九
 一七 大盡舞 二上り 五九
 一八 よしくづし 本調子 五九
 一九 同 五九
 二〇 同 五九
 二一 同 五九
 二二 同 五九
 二三 浮世小路 三下り 五九
 二四 色がある 三下り 五九
 二五 むかしく 三下り 五九
 二六 同 つゞき 五九
 二七 同 五九

二八 よいしよこせうぶし 二上り 五二
 二九 一つ夜着 三下り 五二
 三〇 こゝは島原 五二
 三一 聲色 五二

○髪結源五郎 五二
 ○奴矢田平 五二
 ○駒澤治郎左衛門 五二

第九篇

一 大津るぶし 五二
 二 同 五二
 三 同 五二
 四 同 五二
 五 同 五二
 六 同 五二
 七 うかれよしこの 五二
 八 花見にごんせ 五二
 九 同 五二
 一〇 同 五二
 一一 同 五二
 一二 あひたさに 本調子 五二

一三 しのぶ身は 本調子 五七
 一四 はをりきせても 二上り 五七
 一五 同 五七
 一六 同 五七
 一七 伊勢音頭 三下り 五七
 一八 五人おとこ 三下り 五七
 一九 あひたさに 本調子 五七
 二〇 松になりたや 本調子 五七
 二一 同かへうた 五七
 二二 渡邊の綱 二上り 五七
 二三 色のちぐさ 三下り 五七
 二四 うはさにも 本調子 五七
 二五 同かへうた 五七
 二六 待宵 本調子 五七
 二七 酒屋男と 二上り 五七
 二八 同かへうた 五七
 二九 つるのこゑ 本調子 五七
 三〇 有馬名所 本調子 五七
 三一 同かへうた 五七
 三二 黒かみ かへうた 五七

第十篇

一 大津るぶし 五三
 二 同 五三
 三 同 五三
 四 同 五三
 五 同 五三
 六 同 五三
 七 うかれよしこの 五三
 八 今宵忍ぶなら 二上り 五三
 九 同 五三
 一〇 同 五三
 一一 とのかへり 二上り 五三
 一二 かわいくと 二上り 五三

一三 同かへうた二上り……………五五六
 一四 あんらくさん二上り……………五五六
 一五 鷺をからす二上り……………五五七
 一六 同……………五五七
 一七 同……………五五七
 一八 同……………五五七
 一九 竹に雀は二上り……………五五七
 二〇 同……………五五七
 二一 御吟は夕がほ二上り……………五五七
 二二 同 きのつゆ二上り……………五五七
 二三 清元 おちうどおから道行……………五五八
 二四 瀬田のはし三下り……………五五八
 二五 いわにやならぬ三下り……………五五八
 二六 同……………五五八
 二七 こゝろでとめて三下り……………五五九
 二八 住吉参り合の獅子……………五五九
 二九 どゞいつもんく入……………五五九
 三〇 同……………五五九
 三一 同……………五五九
 三二 同……………五五九

三三 同……………五六〇
 三四 同……………五六〇
 三五 聲色……………五六〇
 ○尾上……………五六〇
 ○おはつ……………五六〇
 ○久吉……………五六〇
 ○加藤……………五六〇

初 篇

序

隆達が、吹よ河風の吹流れてより、世々に流行する、
 小哥のかすく、枝もさかえ、樹の芽も榮ふる御代と
 共に、限り盡せず、吳竹の節の間も、諷ひ止むるひま
 こそなけれ。されば今、その流行におくれざる、小哥
 を集めて梓となせば、ソレ四方の通客達、宴席登樓の
 節などに、是を携へ是を諷へば、なんでもござれに引
 とらさぬ、骨頂粹を其儘に、粹の懐と題すとなん。

一 荷堂主人誌

一 大つゑぶし

おさかづき。いたゞきませう。ありがたくちようだい。
 ちよつとおあい。おつゞけおかさね。ちりますくくる。
 ありますさいづちおさへませう。今入三ばるおつぎめお

仕合。御手もと拜見これは御見事。どうじや杯一やりん
 かちよんべけづりんか。よむかずにぐつと引なされ。モ
 フ〜いけん。すき腹こたへるした地があるのんじや。
 いちやこちやいはすとすなをにわつさり白猪口まわして
 これでおとり。

二 同かへうた

酒屋男と。ねんごろすればな、十六島田ができてまね
 く。お婆々しよんべすりや。狐がのぞく。棚のだるまさ
 んをちよいとおろし。奈良の大佛鼠がかる。しよんが
 ばさまはよほけたばさん。見たいなく文箱のうちを。
 上お醫者〜と名ばかりおるしや。三國一の。さくら見
 よとて名をつけて。齋藤太郎左衛門に。やなぎ〜。夜
 櫻。熊坂因州いなばにこれなアおやぢどん。

三 同かへうた

好とおもふた。その時に。思ひきる氣があつたなら。こ
 れほどの。せつなさを。しらすに樂でくらすもの。ほん
 に思へば今さらに。誠づくめが身の仇と。なつて互ひに
 身のつまり。上辛苦萬苦はいとはねど。もしやお前に。ひ

よんな病が出ようかと。あんじますると膝におもはず露
なみだ。

四 同かへうた

逢た夜の。心根を。思ひだしては今さらに。寝てもさめ
ても。忘れぬ。すぎし別の。一ことを。案じすぎしてな
みだぐみ。ひとりまるねの手まくらに。にくいかあいの
二道が。上なせかさきへはとまきかね。しんきやと。た
たみざんやら辻うらも。合ぬつらさにいわれぬ心のみだ
れがみ。

五 同かへうた

ちよつとしぐれの。雨やどり濡れたる袖がゑんとなり。
しばし假寝の。むつごとを。わすれかねたる實とじつ。
あひたい見たいがかさなりて。しのびあふ夜もいつしか
に。人眼の關にへだてられ。上いまは涙に身をしほる。
袖たもと。うきなばかりをたてられて。いつまあうれし
くこの苦をわすれてそへるやら。

六 同かへうた

はるさめの。しめやかに。ひざにもたれてなみだぐみ。

かたる心はもう止めさんせ

心太さへ色でうる。

薄くなるからあの甘酒も

そこを見せては水くさる。

添てるながらに身はあさ東風に

便りないぞへ蓮の露。

思はぬ口説に涼が更けて

たがひに袖さへしめり勝。

おもひすぎしの口説がつり

あとは命ののびちゝみ。

つほにのろけて寝たのがばちで

出るに知られぬ手長蛸。

早う三すじのつとめをやめて

おもふ一すじとゆるやう。

古いやつじやがざこばのしけで

鯛のないほどおもひつめ。

やがてまゝにも鳴子の引手

きれて稻とはどふよくな。

なぜこのやうにわすられぬ。にくい男がかわいふて。ほ
んにつとめの身の上は。ほれてほれたといふたとて。つ
らや手くだとうたがはれ。上いつそどうしやうといふな
がら。なみだぐみ。むねにまへがみおしあて。どふぞ
わたしのすることこらへてくださんせ。

七 よしこの

まことつくせどまだ疑の

かゝる此身のやるせなや。

かなしく暮してたまさかあへば

つらさ忘れてうれしなき。

さした手枕拔さしならぬ

實とふじつの右ひだり。

捨てみさんせかうなるからは

おまへに留ふたいきぢでも。

初手はてくだにさす手枕も

今ぢや拔れぬ身のつらさ

追れはらわれして飛ぶ蠅も

はなれかねたる主のそば

宵にや程よく合した鐘が

うつてかわつて別れさす。

あはぬしやくより逢ふたる今朝の

鐘で別るゝ身のつらさ。

今は重る思ひが叶ひ

丸ふそうたるかゝみ餅。

枕あてがるひざすりよせて

吸つけたはこの口うつし。

浅瀬と知らずに乗せ上られて

引にひかれぬ登り舟。

嬉し泪を悟られまいと

人眼かざしの袖あふぎ。

羽織きせかけ又さきの首尾

むねで結んだ別れ際。

いやな客には水つほだかせ

あとで大きな尻がくる。

おなじ舟でもわしや引舟よ

あとのお祭り知りはせぬ



晝も正月摺鉢まわし

しのびかくれてのせたがる

主を松むし鳴音を止ば

もしやそれかと氣がもめる。

すぎし一言まだ耳底に

あつて夜毎の夢にまで。

おもひ切たことばのはしに

どうか未練の残り口。

逢ぬその夜のしんきにつれて

ともに枕もいぢられる。

すがたみせず憎いよ風は

そつと通ふて花散らす。

八 一仲ぶし

今朝のわかれに。袖とめて合かわく間もなき合土手のつゆ合四ツ手のたれをおろしても、またもなきゆく明がらす。合ゑりに風しむゑもんざか合。

九 同かへうた

けふはいかなる吉日よ。合めぐりあふたるうれしさに合飛

まゝに逢れぬ身もちながら合あへばたがいにくくわして合脊なか合して。しばし寝むれば。金棒の音でめをさまし。こちらむかんせ。中なおり。しもせぬさきからあけの鐘。にくらし。とてもそはれぬ。ゑんなら一所に死にたい。これなもし合ゆり起す。

一四 同かへうた

あくび仕ながらかゝみに向ひ合しんきながらも一人ごと合親をうらむじや。わしやなけれども。ようもこんなにぶさる。くないかに夜なべに。したとてもあんまりむごいどうよくな。とりわけ。はなのひらること。これぢやほれてのなはいはづよ。是非がない。

一五 因州いなばかへうた

城州都の東寺さんのしかも羅生門のまん中で。鬼めが三疋出合しが。先なる鬼めが青鬼で。中なる鬼めがまんだらで。あとなる鬼めが赤鬼で。先なる鬼めがいふことにや。はじめて年越に出たときは。とらごとの御見舞にはやされて。目つこやはなつこでいとごさる。中なる鬼めがいふことにや。地ごくへ年季にいた時は。三圖川

びたつ様に思へども。人目ある故まゝならぬ合しんきしん苦の世のならひ合。

一〇 同かへうた

愚痴になるほどいとしさの合うそもまこともうちあけて合夜毎にあはにや氣がすまぬ合ぬしの手くだにのせられて。どふなとさんせいとやせぬ合。

一一 同かへうた

わすりよまいとてこれほどに合おもひおもはれした中を合ひよんなわけから當座かり合今はかほさへ見られすに。うつゝぐらしをさすわいな合。

一二 伊豫ぶし

稲ほ拾ひてかりがねひとつ。合女夫くらすは中たんほ合土手の夜風が。れんじもれきて。三谷でかすかにかみぎぬた。たそやあんの。かけくらく。たまひめあたりの狐火も。ちらほらと。見えす見えす火。引四つすぎから間夫のひる。きやさんせ合。

一三 同かへうた

のお婆に夜遣して。ふんどしとられてしかられた。あとなる鬼めがいふことにや。はじめて。雷におちた時は。あばらのほね。三枚折つて。なんはゆき。この頃ちくちくようござる。

一六 同かへうた

且州いん間にこつそりと。さたも内證が晝中で。お妾と間夫とが出合しが。いきなるおとこが二十四五で。いかなる女も好ふりで。仇なるお妾が二十八で。いきなる男がいふことにや。忍んでおてかと寝た夜さは。日くれぎりで。いぬがよると。首尾さへこつそりようござる。馬鹿なるだんながきたときにや。すかさぬお妾のいゝぐさに。朝から癩がさしこんで。きりゝとお腹がいとござると。あだなるおてかのいふうそを。案じて旦那はめつた無上に。夜どうしのろけてななるやうにと。さすつてやつたりしてござる。ひまやれ〜。

一七 同かへうた

長い日中にほつとして。しかも臺所のまんなかで。女子衆が三人出あいしが。さきなるおなごしゆがいやしほ

で。中なる女子衆が芝居すきで。あとなるおなごしゆが
道らくで。先なる女子衆がいふ事にや。はしりもとでつ
まみ喰した時は。見付られてひまが出ても。むちやりや
むちやりと喰とござる。中なる女子衆がいふ事にや。芝
居のお供のうれしさは。朝から晩まで見るやうに。切狂
言までづらりと見とござる。あとなる女子衆がいふこと
にや。意氣なる男を見た夜さは。……てそこのわか
いしゆに。……とござる。しやしやれ
く。

一八 あだなるがほ

あだな笑顔あだなえがほについ惚れこんで。つまこつまこ雉子のほろゝに
も合あは千尋の海の雁いかりがねに。ことづてかへすつばめのたよ
り合あはうそならほんにかほどり見ても。羽がへのはだにい
だきしめ。そのまゝそこへとまり山。うれしい中ぢや。
エ、くゝないかいな。

一九 いざや行きませう

いざやゆきましやう住吉へ合あはいしや引つれて合あはしん家
兩りやうかわ合あは花やかに合あは沖にちらくほかけぶね合あは一そも二そ

合あは妹がりゆけば冬の道合あは河風さむみ千鳥なく。待身はつ
らきおきの石。じつにやる瀬がないわいな。合あは

二四 夕立や 三下り

夕立や田を見めぐりの神ならば。葛西かさい太郎たろうがあらあい鯉合あは
さけが長じてきつねけん。ほんにせんせなことじやへ。
ほりの小ぶねが。竹屋たけやの人くゝと。呼子よぶこどり合あは。

二五 同 かへうた

闇の夜に吉原ばかり月夜かな。合あはそゝる店みせさき格子かすりさき。
くるかこないのたゝみさん。ほんにしん氣なことじやえ。
こうしにもたれて。向ふの人くゝと呼子よぶこどり。

二六 四季の春 二上り

春は梢に香をとめてさく合あは梅がわらへば合あはあれ山わら
ふ。にこ羽子はねこいたの音もよや合あはひとこにふたご合あは。見わ
たすかたへむつまじふ。ふきのしうとめ嫁菜をつれて合あは
はななくしさの合あはやまめぐり。

うも合あは三そも四そも五六そも。おや追風おいてかるな。エ、
みなとிரりそんれはエ合あは。

二〇 同かへうた

障子あくればさしこむ窓の。月ゆかし合あはとほすまいぞへ
ろうそくを合あは闇になつたら。とほそぞへ合あは一丁も二てふも
合あは三てふも四丁も五六てふも。おやとほそぞのな。エ
、ろうそくを。そんれはエ合あは。

二一 夕ぐれに

夕ぐれに合あはながめ見あかぬすみだ川合あは月にふぜいを待乳
山合あはほあけた船が見えるぞへ。あれ鳥がなく、鳥の名に。
みやこといふ字があるわいな合あは。

二二 同かへうた

しのゝめに合あはわかれおしむやねやのうち合あはつもるはなし
もあるものを合あは夜あけたつらさかへるぞへあれ鳥がな
く。鐘がなる。あゝもしんきなことばかり合あは。

二三 わがものと 本調子

わが物と合あは思へば輕し笠の雲合あは戀のおも荷にをかたにかけ

二七 同 つゞき 本調子

夏はほたるの合あはともし火もみじかき夜半をくよくと合あは
なきあかしたるほとゝぎす合あはあふけば顔にばらくと合あは
あれむら合あは雨あめが合あはそで。うちふりて、よいくゝくゝ
よいやさ。

二八 京四季

春は花合あはいざ見にごんせひがし山。いろ香あらそう夜ざ
くらや合あはうかれくゝて。するもぶ粹も物がたい合あは二本ざ
してもやわらこふ。祇園どうふの二けん茶家合あは御祓みそぎぞな
つはうちつれて。川原かはらにつどふ夕すゞみ。よいくゝくゝ
くゝよいやさ。

二九 同 つゞき

まくづがはらにそよくと秋の色ます花頂くわうちやうさん合あはしぐれ
をいとふからかさ。ぬれて紅葉の長樂寺。合あは思ひぞ積
るまる山に。けさもきてみよゆき見酒。エ、そしてやぐ

らのさしむかひ。よいくくくくくよいやま。

三〇 夜ざくらや

夜櫻や合うかれがらすがまいくと合花のこかけにたれ
やらがいるわいな。とほけさんすな合めふき。やなぎの。
風にふかれてゐるわいな。エ、ふうわりと。おうさそう
じやいな。そっじやいな合。

三一 忍ぶ夜は

忍ぶ夜は合あちらむかんせお月さん合いろのせかいじや
にな。しんきらし合。

三二 同 かへうた

あふた夜は合つるておくれなあけのかね合たまのごけん
じやにな。しんきらし。

三三 一夜明くれば 本てうし

一夜あくればまた氣もはるゝ合花のさかりは梅やしき合
はつ音ひとこゑうぐひすの合ほうほけきやうのやくそく

て口。はらを立さしや氣味わるふ。あやまる中にもまけ
おしみ。ほんにおまへはつみな人。

三八 一 聲 本調子

一こゑは。月がないたかほとゝぎす合。いつしかしらむ
みじか夜に合。まだ寝もやらぬ手まくら合に。おとこ心
はむごらしい。おなごこゝろはそうじやないかたときあ
はねばくよくくと。ぐちなおもひで。泣てゐるわいな合。

三九 めぐる日 本調子

めぐる日や。はるが近いとて老木の梅が合わかやぎてそ
のしほらしやく合かほりゆかしと合まちわびかねて合
さゝなきかけるうぐひすの。きてはごこ寝をおこしつゝ。
さりとは氣みじかな。今帯しめていくわいな。ほうほけ
きやうの人さんじや合。

四〇 こゝろせきやに 本てうし

こゝろせきやにかわづがわろう合さつさそこでそうじや
へ合ひとり寝がちのたがまくらばし合月がないたかほと

も。實にうれしぢやないかいな。

三四 十日戎かへうた

一夜ふしみの軒毎に。土とは野母なやうなれど。ねれた
おやまの人形みせ。紋日は棚へあけさきの。になんばか
たの約束に。

三五 同 かへうた

おかしい事もわらはねば。悲しい事も泣もせず。貞女や
ぶらすりん氣せず。人になぶられいたいことも。いは
で夜船の月あかり。

三六 川たけに 本調子

川竹に合うき名を流す音さへも合つがる。はなれぬおし
鳥の。中にたつ月すごとくと。わかれのつらさに袖しほ
るほんにしんきな。ことじやいな合。

三七 同 かへうた

あふことも合たび重れば深ふなる合おもひあまりてにく

とぎす。はやせにさをさす竹いかだ。隅田に千鳥のそれ
はしばしぢや。夜のあめ合。

四一 水の出ばな

水の出ばなとふたりが中は合せかれあわれぬ身のいんぐ
わ。たとへどなたのいけんでも。おもひきる氣は。おも
ひ切るきはないわいな合。

四二 同 かへうた 本調子

忍びごまにてつひの手の合しらぬ調子のかんちがる。
糸のきれめのばちあたり。じれつたいでは。ぢれつたい
では。ないかない合。

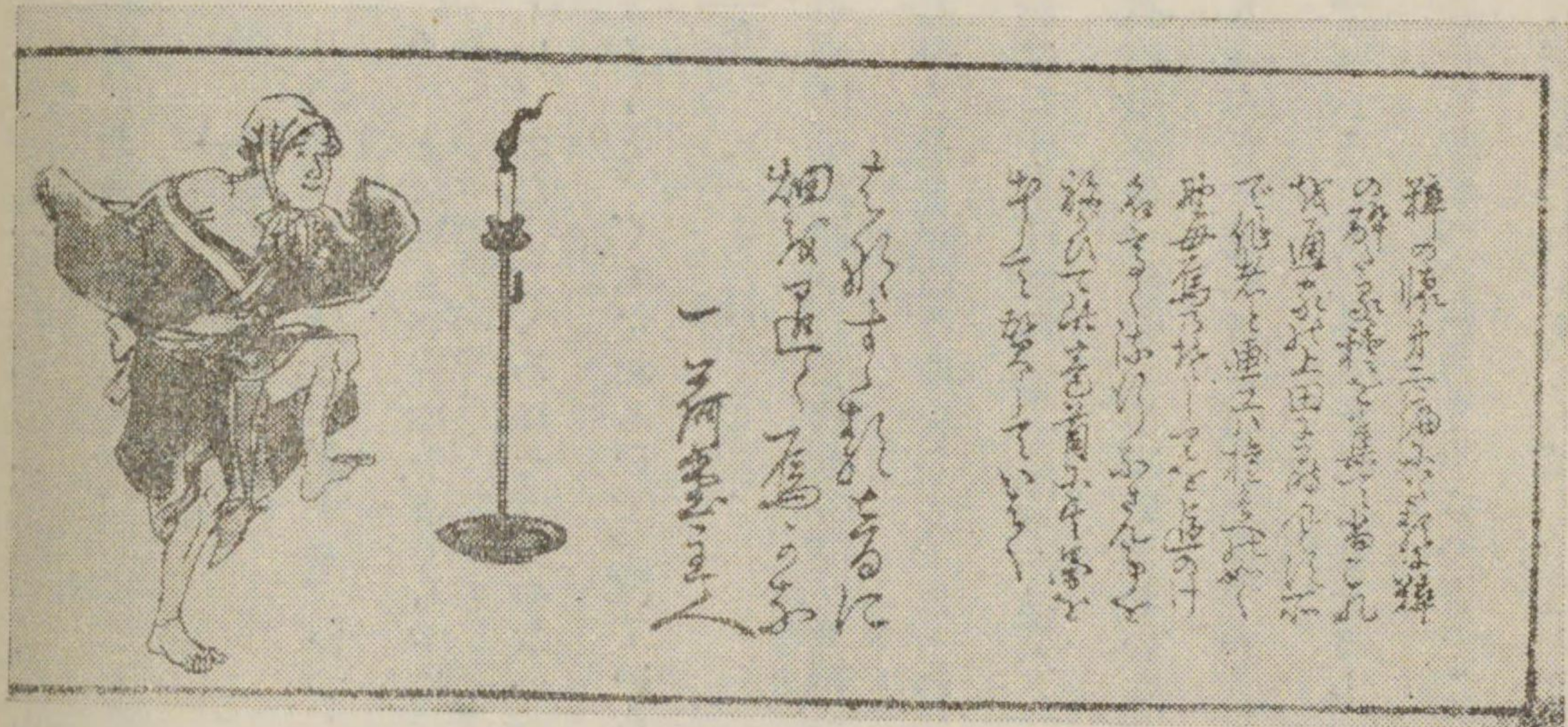
尙これにもたれるうたは直に二篇にいだし
申候

第二篇

粹の懐第二篇にいたるに粹の酔たる種を集めて尙これ
を道家の上田に蒔んとす。所で作者と畫工は權兵衛の
如く野母鳥ヤモトリのそしりを追のけ名高く流行なさん事をね
がひて此の巻首に其圖を出して賛して曰く。

はなすゝる音に烟を退く鳥かな

一荷堂主人



粹の懐すゝる音に
烟を退く鳥かな
一荷堂主人

一 十二月手鞠哥 二上リ

(本文省略)

二 福壽草 二上リ

はつ春の。日南ひななへなほす。福壽草合目出たき御代ののど
かさや合花の心もうつり氣な。ツイ。つほみさへ。ひら
きそめ。

三 一夜明れば

一夜あくれば。また氣もはるゝ花のさかりは梅屋しき合
はつ音一こゑうぐいすの。ほうそけきゆうのやくそくは。
じつにうれしぢやないかいな合。

四 水の出ばな 本てうし

水の出ばなと二人がなかは合せかれあわれぬ身のいんぐ
わ合たとへどなたのいけんでも。おもひきるきは。思ひ
切る氣はないわいな合。

五 同 かへうた

しのびごまにてつい合の手を合しらぬ調子のかんちがひ
合糸のきれめのばちあたり。ぢれつたひでは。じれつた
いではないかいな合。

六 ひとこゑ 本てうし



一〇 月に。月がないたかほととぎす合いつしかしらむ短
か夜に。まだ寝もやらぬ手まくらに合おとこ心はむごら
しひ。おんな心はそうぢやない合かたときあはねばくよ
くよと。ぐちなおもひにないているわいな合。

七 梅が香 かへうた 本てうし

辻うらや。まつばかんざした、みざん合戀といふ字に引
されて合ひとり雪の夜に忍んで来たに。腹が立かへわし
ぢやとて。またすこゝろはないわいな合。

八 齋 藤 本調子

さいとう太郎左衛門ちよとく合あひたい事ぢやとなア。
るすくくどつこいた。となりにか。さりととはあひた
いな合あいた見たさはとびたつばり。籠の鳥かやうらめ
しや合首尾を見合せそりぶし合宵にやきもせで夜中に
やたく。どこのたれめとしけるやら。さりととはつれな
い君故ならで合茶だち鹽だち納め太刀。さかくさいの
わたしもり。ちつとぬるいじやないかいな。

九 あふた夜は 本調子

あふた夜は合突ておくれなあけのかね合たまのごけんじ

にいやまさる花や今宵のあるじならまし。

一四 江戸の四季 本調子

春の日ながに合ぬしと二人が向ふじま合サ、雪か。みぞ
れがふるわいな合ゆきじやござんせん。ちらくくと花が
ちる合。

一五 同

夏のあつさに合ぬしとふたりが夕すゞみ合サ、初夜か。遠
寺のかねがなる合五ツじやござんせんほのくくと。あけ
の鐘合。

一六 同

秋の夜さむに合ぬしとふたりが見る月は合サ、風か。木
のはがまどをうつ合風じやござんせん。ほとくと人が
くる合。

一七 同

冬の夜なかに合ぬしとふたりがおきごたつ合サ、雁か。
かもめのこゑがする合かりじやござんせん。ちんくと
小夜千どり合。

やにナアしんきらし合。

一〇 同 かへうた

しのぶ夜は合あちら向んせお月さん合いろの世界じやに
なアしんきらし。

一一 同 かへうた

あはぬ夜は合ぢれてふさいで茶わん酒合色の世界じやに
なアしんきらし合。

一二 ゆきくれて 本調子

ゆきくれて合うつらくと夢見草合ゆめに結の神さんへ。
たのむの雁の一ふでに。いつしか戀と濡つばめ合比よく
の床の千話ごとも。わかれをつぐる日もすすりエ、にく
らしい手枕に合のちのあふ瀬を松葉蝶。しゆびの心をの
こすらん合。

一三 ながしの枝

ゆきくれて合木の下かけを宿とせば合そらにしられぬゆ
きぞふる合花のまくらに吹雪のしとね。にくやあらしの
あてことを。聞てながしの合花のゑだ合ほんにおとこの
氣ばかりくんで合一夜まる寝のそひぶしもいわぬはいふ

一八 めぐる日 本調子

めぐる日や合はるが近いとて。老木の梅に、わかやぎで
そのしほらしやく合かほりゆかしく合待わびかねて。
さ々なきかけるうぐひすの。きては朝寝をおこしつ。
さりととは氣みじかな。いま帯しめていくわいな。ほうほ
けきやうの人さんじや合。

一九 梅が香 本調子

梅が香をとめてかほりのぬしゆかし合顔はこうばいうぐ
ひすの合いつか音いろをたのしみに合はつ聲そつとまど
のうち。いきな世界じやないかいな合。

二〇 わがものと 本調子

わがものと合おもへばかるし笠の雪合戀のおも荷をかた
にかけ合妹がりゆけば冬のみち。川かぜさむみ千鳥な
く。まつ身につらきおきごたつ。じつにやるせがないわ
いな合。

二一 しのぶうり 二上リ

いつしかに。君をまづちのやまくこえて通ふ五十崎こ

まがたや合千鳥かもめにこころがあらば。しらひけ。さんへ。しんじつしんから願かけて合ちよつとお顔をみめぐりならば。うれしの森であるぞひな合それく。それもそうかいな合。

二二 同 かへうた

衣もん坂。今宵くるわのあふ瀬の首尾を合はしほの雨にしつほりと。君はさん谷の三日月さんよ合しんじつ。しんから願かけて合ふたつまくらでたのしむならば。うれしのもりじやないかいな合。

二三 ふみのたより 三下り

ふみのたよりは。今宵ごんすとそのうはさ合いつのもん日も主さんと。やほなことじやがひよく紋。はなれぬ中じやとしよんがへ。

二四 つがいはなれぬ 本調子

つがいはなれぬあのおし鳥を見るにつけてもかわゆらし。はやうめうとになるならば。それこそよいくよいやな合。

今日はいかなる吉日ぞ。合めぐりあふたるうれしさに合飛びたつ様に思へども。人目ある故まゝならぬ合しんきしんくの苦の世界合。

三一 同

けさのわかれに袖とめて合かく間もなき土手のつゆ合四ツ手のたれをおろしても。またもなきゆく合明がらす。ゑりに風しむゑもんざか合。

三二 同

わしが思ふやうに。世がならば合すいた男と只二人合金のなる木を庭にうへさかなばやしや。酒のいけ合世けんちよつともしらすにくらしたい合。

三三 棚の達磨

あまりしんきくさゝに。棚の達磨さんをちよいとおろし。はちまきさせたり。マアころがしてもみたり合。

三四 同

餘りしんきくさゝに。棚のほていさんをちよいとおろし。ほこりはろふたりまア。わらはしても見たり合。

二五 同

つがひはなれぬあのお蝶々を見るにつけてもかわゆらし。花にたわむれ舞ひあそぶ。それこそよいくよいやな合。

二六 同

淀のくるまは。みづ故まはる合わたしやりんきで気がまはる。ほんにやるせがないわいな。しみく腹がたつぞへ合。

二七 いたこ出じま 本調子

いたこ出じまはまこもの内に。あやめさくとはしほらし。よいやなアく合宇治の柴ぶねはや瀬をわたる。わたりや君政登り舟。ア、よいやなく合。

二八 同

花はいろく五しきに咲けど。ぬしにまさりし花はない。ア、よいやなく合。

二九 同

いろも香もなき柴かる人に。はつ音きかすかほとぎす。ア、よいやなく合。

三〇 一仲ぶし 本調子

三五 同

あまりしんきくさゝに。おくの四疊半をちよいとあけて。薄茶を立たりまア立さしても見たり合。

三六 いんしゆういなば 本調子

因州いなばの鳥取に。しかも大道のまん中で。女が三人出あひしが。先なる女が十六で。中なる女が十七で。後ある女が十八で。先なる女のいふ事にや。 (以下本文略)

三七 同

且州いんまにこつそりと。来たも内證が晝中で。於妾と間夫とが出合しが。いきなる男が二十四五で。いかなる女もすくふりで。仇なるお妾が二十八で。しのんでお妾

と寝るときは。日くれざりて去ぬがよいと。首尾さへこつそりとよふござる。馬鹿なる旦那が来たときにや。すかさぬお妾のいゝぐさに。朝から癩がさしこんで。きり、とお腹が痛ござると。仇なるお妾のいふ啞を。あんじて旦那はめつた無上に。夜通しのろけてなをるやうにと。さすつてやつたり仕てござる。ひまやれく合。

三八 ころやくぶし 二上り

花のさかりは向島。コリヤく、さゝのきけんで土手をば見めぐり。お茶やの姉さん狐で来なさい。かへりは夜櫻おいらんながめて。格子でのろけます。コリヤくコリヤ合。

三九 同

富士の山から。三保松原どなたも覗てごろうじませ。田子のうらく船か木のはか西行かまつたけか。コリヤく合。

四〇 大津ゑぶし

大坂を。立退て。わたしがすがたが目に立たば。かり駕

こといはずに二階へお上りなされ。肴が出るやら追々けい子がふへてきて。姉はんだなたも。ヨウ三味線引など。程をうるのであんだ大好じや。儲はこいつがおれにほれているかと後を仕切てさこねと出掛て口説ててらされた。

四三 同

お雪さんは。うつくしい。色が白ふてしほらしひ。やさ姿、みるにつけ。縁をうち明松がへに。お前の氣性もしれました。風になびいて落ちなざる。あたまからなられるとは覺悟なれど。つもりくしそのあとはうちとけて。ながれの身とはしりながら。そのまゝきえてすがたもみせぬとはほんにみづかしい。

四四 うかれよしこの

そんな人のじやありやしませんと。うまく口をば縫ひ仕事。切るがいやさに時節をまてば。今はしびりがきれてくる。針も合ねば薬もあはぬ。

合ぬつらさにつる癩。

に日をおくり。奈良のはたごや三輪の茶や。兩三日もとうりうし。二十日餘りに四十兩。つかひはたして二歩残る金より大事の忠兵衛さん。とがにんに。いたしましたもみんなわたし故。さぞおはらが立ましやうがいんぐわづくじやとあきらめ下さんせ。

四一 同

雪ふりは。やましろで。からいお口がこれは大和。いけ花は遠州で。けんはさつまで主は淡州に。定めなのが美濃尾張。出てわるいが紀州が肥前。小へん丹後に百姓が一岐。上禮者が上野下野に。女子のやもめが。江州。夜たか、相州でさけが信州。みづの阿波にきのおほひお客さんがこれは伯耆。

四二 同

入口くはらく。姉きどうじや、めづらし。マアお上りおめし物直しや。おちよほ。お茶亭が羽織とる。入花くんで出る。イヤモ。かもふてナ。すぐにいぬ。めつたにいなしやせぬ。モシナ。こちらのお子があんたに惚ています。めつらう何のおれらにけい子が惚るもの。いとませう。そんな

待にしんきな音づればかり

鐘をかぞへて寝るつらさ。

夢になりとも逢ひたいけれど

合ぬつらさに眼も合ぬ。

つらやいとなひ腹さぐられて

ゑぐるおまへの氣がにくい。

おそい歸りを待うづみ火に

寝られずがすよ此むねを。

論講じやと狂言かいた

首尾がもぐれてやるまいぞ。

根もないりんきを口説の種に

してはずねたりいちつたり。

くき菜たてられこうなるからは

やぶれかぶらとつかりづめ。

にじりこんだる夕にかえて

鐘がつきだす切戸ぐち。

人目のせきなら忍びもせうが

つらやへだゝる義理のかき。

宵のしめりがかわかぬ袖に

つらや濡ます別れざわ。

風のなさけがとゝかぬ故か

船もしあんの島がゝり。

たまに首尾してあふたる夜さが

戀の重荷の息休め。

鐘や鳥もよく聞きながら

空寝入する身のつらさ。

仇にとけるよアレ晝の雪

月と浮名をよそにして。

雨のあしたの野山のいろは

やつれ小口と見えはせぬ。

放れがたなき番の鷹も

月に鳴く夜はいくたびか。

わかれさせるよ此朝あらし

袖にとめたるうつり香も。

啞でたらした油にかゝて

おまへひとり身を絞る。

主の心が眞水にならば

命のせんだくするものに。

秋の氣ざしの音信ならば

鷹の便りをきくもいや。

ふられた上にも又てらされて

氣ちがひ日和となつた筈。

つらい顔せず苦勞をかくし

まじめぐらしでいるつらさ。

風に口説かれいや應もいへず

今は落葉も肌よごす。

おもひ切戸に文珠のちへは

釋迦も御ぞんじないわいな。

口説しらけて又ぬれかける

わかれ泪の袖しぐれ。

忍ぶ戀路は茅の輪のやうに

抜けつくゞりつ神かけて。

正月言ばかわしやしらねども

明りや亥としさまさるふみ。

第三篇

序 卍

既にして、粹の懷第三輯に至るに、酔の粹たる限りな
くて、一杯機嫌の宴席に、間にあひ音曲雜戲をひろひ
かきあつめたる言葉の塵とり、なんでもござれとしか
言。

文久第二のとし

いぬの初はる

浪華 一荷堂主人

卍 卍

一 大津繪ぶし

花やかに。さきそろう。さくらの宮のはるけしき。うき
つれた。家かたぶね。紅すり灯ちん赤襦はん。きくもよ
うきなばかばやし。障子ほそ目につめ引は。あだな茶ぶ

二 同

一年一度が。七夕さんで。おるいにあふとて二度三度。
四度のくるまは。水ゆへ廻る。禪宗が五度に迷ひが六度。
七度伽藍にきびしい八度。いやないけんにおやじが九度。
十度お前で百度参り。上船に千度や高野に萬度。其上は。
十萬億度が極樂で。度々のつまりは仕かたがないので筆
を億度。

三 同

しんと夜ふけて。しみぐと。ひざにもたれて顔うちな
がめ。どちら風が。ふいたやら。今宵あふとはしらなん
だ。ほんにおまへは憎らしひ。おなごに物をおもはせて。
それがおとこの手がらかへ。上だますつとめがだまされ
て。腹が立つ。おいておくれよゑらそうに。お前のから
だはいこいでもよいでエたのんだお金とお召の着物があこ

してほしい。

四同

不細工ものが。下行で。春ふる雪が阿波ゆきで。しつ病が。四國行。首すじものが紀州いき。もどらぬためしが佐渡行で。横濱ゆきが毛唐人。古ひうたが木曾へくと皆ゆきたがる。臍が西國するひざほんが。江戸へゆく。しびりが京ゆき腹下が高野ゆき。坊さんくどこへゆかさんすわたしはたん波の笹やまへ。

五同

人のからだも。花に似て。さかりがくれば色けづき。ころまでひらきかけ。うろく見とれて鼻たれて。とかく實のないあだ花を。だいてとられた黄金花。いつかわがみがすみだし。上それからやす花かいあるきそのあとは。ひつのはなやらさくろばな。とうどしまひはおちてすつばりはながない。

六同

豆の葉の。身のうへ聞ば。ふつと二ばの芽ばへから。は

戀のいちだよこうなりやせつば

仇に命はかへぬもの

一二二

添れぬ中とて今さら外に

なんのしあんがあるもので

梅遊

餘そで偽いふ程主に

あふてまことが明したい

梅月

さして寝たのがこのかんざしの

蝶もすゝきも亂れだす

梅都

偽いふたがまことなつて

まこといふたが仇となる

蛇水

あふて氣のほせするかほ色を

火鉢に酔たと紛かす

玉洲

そふた中とて脊中を腹に

かへた火鉢の獅がしら

梅月

むりにいぬ氣は外ではないが

さきへころが廻りみち

無外

色にめづらしまだその内は

一重櫻に氣がひける

蘭土

るの日に。そだてられ。脊たけ延ては色けづき。野夫な土氣もいつしかに。おもはぬ人に契られて。もまれくたそのうへに。上身をなぐさまれて口の齒に。かけられて。ふくれさゝれたそのあとは。やぶれかぶれにつらやほるなく見すてられ。

七 うかれよしこの

おまへゆへなら苦勞はおろか

たとへ身を粉に砕いても

小うの

まかすからには此たましいを

ぬしのうはきに入かへて

梅月

命あつての二人が中に

すてゝ添りやう筈はない

梅曉

無理な願ひの縁さへとけて

捨るいのちもおしくなる

雁金

ちゞまる程にも苦をした主に

そへば長生したくなる

蛇水

長い命を短ふもつも

みんなおまへがさせるわざ

蛇水

笑がほ見せたる山さへ今朝は

春に別れて氣がふさぐ

無名

そふた中とてアノ萬ざゐが

ちよつと出るさへ二人づれ

一羽

變らぬやうにと年玉入れて

ぎりをかけるもすへだのみ

花雪

うつゝぬかしてけふ此ごろは

花に胡蝶もいろいろひ

梅月

口の誠は筆にていわせ

腹のまことはせなでする

二蝶

風におもはずちりゆく梅も

今は松葉につながれる

古笠

やがて見初る頃ともなれば

とかく噂がはなになつ

素遊

主といへどもまだよその人

いつ迄かへさずおかりやうぞ

無名

人目つくりてはく白粉は

ほんに當座のはなのさき

梅陰

ちつた梅にはみれんはないが

のこる實みでする此くらう

可笑

心うかれぬこの捨すて小ぶね

酒で忘れて又たばこでは

白藤

あかのたまはむりでない

二蝶

おもひだしてはひとりごと

一輪

聞程ききほど咄はなしが我身に迫り

水をさすほど猶なほいろまして

淀川

心ちらさぬ床のはな

八福壽草ふくじゆうそう 二上り

はつはるの。日なたへまはすふくじゆそう合目でたき御

代よのどかさや合花あはなのこゝろもうつりぎな。ツイ。つほみ

さへひらきそめ。

九 うめのはる 本てうし

春けしき。ういてかもめのイニいニに三四さんしよ。いつかあづま

へつく羽はねの。かのもこのもにみやこ鳥。合あいざことと

はんはん恵方えほうさへ。よろづよし原さんやほり。寶たからぶねこぐは

ならまし。

一一 ほれてかよへば 三下り

ほれてかよへば。なにこわかるふ。今いまよいもあをとやみ

の夜よみちをくよくと。さきやさほどにも。おもやせな

いにこちやのほりつめ。エ、く。あほうくとなくか

らす合。

一二 同 かへうた 同

今宵こんやあをとの。やくそくならば。こまどをあけてくるか

く。夜よあけまでこちやまちわびて。やくやもしほのモ

ウうい、つくし。ア、く、うつらくとそでまくら合

一三 土手を通るは 三下り

どてをとふるはもしやあいつじやあるまいか合い、や合

い、やちがふたしづ蛇へびのめ。あいがさのしつほりと合ア

レれはるさめがふるわいな。ぬれかゝるエ。さりととは氣きみ

じかな。ちよつと。く。あふてもかへらんせ合。

つがるによいはつ夢を三ツぶとん。辨天さんとそひぶしの。花のにしきのかざり夜具やぐ。はたちばかりをつみかさね。ほうらいさんといわふなら。富士を脊中にやがたの。しほ尻ながく居すわれば。ほんに田舎もまはしたく。はしば今戸の朝あけぶり。つよくかまどのにぎはふて。二上り 代々たいたい神樂かみがらかど禮者れいじゃ。梅がかさぎを見めぐりの軒のきにさへづる鳥おひが。三すじがすみのつめ引ひや合三下りきみにあふ夜は。たれしらひけの。お、森もりこへて。まつちの山と。五百崎いほざきや。そのかねが淵ふちかねごもたのしい中じやないかいな合。おもしろや。千秋樂せんしゆがくには民をなで。まんなざいらくにはいのちをのぶ。首尾しゆびのまつがへ竹たけてうの。わたしもるみもときをゑて。めでたくこゝにすみだがは合つきせぬながれきよもと。さかへさこふや梅がかせいく代のはるやにほうらん。

一〇 ながしのゑだ 本調子

ゆきくれて合このしたかけをやどとせば合そらにしられぬゆきぞちり合花あなのまくらに。ふときのしと寝。にくやあらしのあてことを。きいてながしの合はなのゑだ合ほ

一四 うらしま奥 二上り

かすむ。こづへの移り香ちりて。花や。戀しき。おもかけを。合かすみがうめるはつざくら。はなのいろかに。ついうつり氣きな。なたねの蝶もつゆのとこ合ひよくのてうのよねんなく合羽はねかぜかわしてひらりくるくくと舞あそぶ雪ゆきかさくらか花あなのなみ合あうつ、しらなみ合あいよく。戀こひに合なれしなさけも合今ではつらや。一人寝を。ほんにおもへば。さりととはく、合むかしこいしき。なみまくら。さだめなや。けにやな、よのなみぢをこへて。よもぎがうらに。うらしまが。つきぬちぎりをかたるいゑつと。

一五 狂らん奥 二上り

あのやきみさまは。いつのいつからあひもせで合沖なみのふねほどこがりやせん。よいは見もせで。夜中にやあはぬ合なかぬ。からすのきぬくは。ア、しようてこいわけしらぬ合みだれみだる、峯たかねのしら雲うみさらくくく。あなたへもつれこなたへさそひ。しどもなくこそ見へにけり。

一六 汐くみ奥 二上り

ぬれによる身は。かささしてござんせ合ひとめ。せきが
さいつあをがさと合ほんに指おりその日がらかさ合まつ
にながゑのしんきらし。それへ合く。きをもみじがさ
しらはりの。とのごにみさほたてがさや。あいくがさ
のすへかけて合おもひもひらて。はんながさアしほらし
や合いとまもうしてかへるなみの音の合すまのうらかけ
てイヨイ、むらさめときししも。けさみれば。まつ風ば
かりや。のこるらん。まつかぜのくうわさは代々に。
残るらん。

一七 かゞのちよ 本てうし

ゆきくれて合うつらくと合ゆめみぐさ合ゆめにむすぶ
のかみさんへたのむの合かりのひとふでに合いつしか戀
とぬれつばめ合ひよくのとこのちはごとも。わかれをつ
ぐる日もすゞりエ、にくらしひ手まくらに合のちをあ
ふせをまつばてう。しゆびのこころをのこすらん合。

一八 追善唄かたみぐさ 二上り

そもく松の目でたきこと。萬ほくにすぐれ。十八公の
よそほひ。千ねんのみどりをなして。古今の色を見す合
しんのしかうの御かりのとき。合天にはかにかきくもり。
大雨しきりにふりしかば合みかどあめをしのがんと。小
松の木かけにより給ふ合此松たちまち。大ほくとなり合
ゑだをたれ葉をかさね。木の間すきまをふさぎてその。
あめをもらさざりしかば。みかど太ゆうといふしよくを。
おくり下したまひしより。松を太夫と。もふすとかや合
かよふにめでたきまつがへに。巢をくむ田鶴のよはひを
ば。きみにさへけてごうそんは。龜の合まんがうふる川
の。ながれたへせぬ金銀しゆ玉とくくくと。御藏の
うち。おさまる。御代こそめでたけれ。

二三 新内 明がらす 上

春さめの。ねむればそよとおこされて。亂れそめにしう
ら里は。どふしたゑんでかの人に。あふた初手からかはゆ
さが。身にしみくくとほれぬいて。こらへ情なきなつか
しさ。人めの關の夜着のなか。明てくやしきびんの髪。
なであけく。ノウ時次郎さん。このやうにせきせかれ

くらきより。くらきをてらすとらうの合おのが迷ひに
その人を合切子も今はうわさのみ。よの口のはにたねな
しと合菊野があとのかた見ぐさ。

小謠の部

一九 たなくつるかめ

にはのひしやごはしんひんのくひをへいのにしきやふ
りのふほしやうひやかかうのひゆきけたへのほのひやしに
けのひぎはのちゆるかめはひやうらいちやんもひよそな
らすひみのへぐみぞひやりがたきく。

二〇 あまへたかやう

たかちやごや。こにようらふねにほたけて上つちもろちよ
もににでちをのにやみのはわぢのちまたけもちやうくに
やるをのきつぎてはやつみのねにちゆちにてりく。

二一 羅生もん

しなじなことはのへそのしたにほひもふかきへそのした
おもしろやへそのした下ちかくへよりてへそのした。

二二 とまわ老 松 本調子

さぞ氣づまりにござんせう、それをこらへて下さんする。
私かはいとおもふての。御心ざし。うれしゆうござんす
と。いだししむれば。イヤおれゆへと。引しめて。物を
もいはずしめあいて。後はなみだにくれけるが。男なみ
だをばらりとながし。いつまでかうしていた迎も限りも
なき。二人が中。なが居するほどそなたの身すまり。此
ほどだんくはなすとほり。國の親父の江戸表。地頭が
方へ出す金。二百兩はさて置。其外一門出入屋敷。かた
りつくしてこのありさま。そなたもともといいたいが。
いとそなたをてにかけて。どうなるものぞ長らへて。我
なき跡で一週の。回向を頼むさらばやと。云すて立を取
付て。あんまりむごい情なや。今宵離れてこなさんの。
まめでいさんすその身なら。又あふ事のあるうかと。
樂む事も有べきが。死のふと覺ごさんした身を。いかな
氣強い女子じやとて。どうして放しやられふぞ。かねて
二人がとりかはす。きせうせいしはみんなあだ。どうで
しなんす覺悟なりや。三津の川もこれ此やうに。二人手
をとりもろともに。となぜにいふては下さんせぬ。わた

しをころさぬおまへの心。うれしいやうでわしやいやじや。此ほどおまへのかほかたち。やつれさんしたそのおりから。夕べの床のむつ事に。死後をつゝしむこの白むく。これほどまでにおもふ物。すてゆかうとはざりとては。鬼よりこわい御心。わしややりばせぬはなしはせぬ。ころしておいてゆかんせと。男のかたにくる付て。身をふるはしてなきいたる。

二四 同 ちんてう

四つ谷ではじめてあふたとき。すいたらしいとおもふたが。いんぐわなるゑんの糸ぐるま。めぐるもん日やつねの日も。しんぞかむろにねだられて。よんだ客衆の目をしのび。手くだのとがめくりがへも。二所三所ながれゆくつとめする身もしろうとも。なじみかさねたおんなぎは。じつにかはりはないわいな。すいもぶするも戀ぢには。くろうをするがならいぞと。いふが中にもわたしほど。世にあじきなきものはなし。親にそひ寝のゆめにさへ。見もしりもせぬ人中へ。うられくるはのうきつとめ。かむろのうちのきぐろうは。ねむり火かけをおいおこされ

て。文のつかいや返事さへ。ながいろうかのゆきかよい。間夫の手引や合圖の手れん。きをもみうらの色にでて。やり手につめられた、かれる。それくをぬけてやうくと。店へいづもの神さんも。かたびいきなるゑんむすび。すかん容しゆにいびられて。ないて明さぬ夜はとてもなし。それが中にもたのしみは。たまくとあへばあくる日は。姉女郎やほうばいに。あてこといはれ身じまいも。おそいくとせがまれて。涙をつゝむふりそでの。とむればもはやとしまやく。伊達もいきぢもまけまいと。きばればむねのしやくつかえ。おもへばくと男ほど。我ま、らしいものはない。むりな首尾してよんだ夜も。あちからおんにきせるより。つまらぬ事をいゝつりの。くぜつはあすのかへされぬ。しかたとしれどこちも又。とかで苦をやむうれしさが。かうじて今のみのつまり。けふかあすかといふ内に。よいきならしいあてことは。きこへぬおかたとすがりつき。うらみなみだぞ道りなり。

二五 さちもん かるかや

さればにやこれは又。加藤左衛もん重うじは。名をかる

第四篇

頭陀袋の風流も一瓶の瓢にうかれ矢立の墨かれて紅筆にどいづをしるす人情の趣とこころ色と酒とにまさるはなしと此半丁を序にかへて

先生も小唄でもどる花見かな

一 荷堂戀々山人華押

かやとあらためて。今道心のことなれば。今日大師のおんはかへ。花立かへの御ばんにて。かやの御堂をたち出て。奥の院さしてのほらるゝ、のほるお山のみちのべは。さんこのまつかごこのすぎ、おし上岩やねじりいわ。ぜんあく邪正の邪柳の。こなたのはかはら見てあれば。まだ此ごろのあらむぜうに。古きとうばのたてあるを。かるかやつくく御らんじて詞「ナニく」おさめたてまつる。大乘妙典につほん回國。六十六部。天下和順日月清明。下にはなして大和の國と。よみおわられてかるかやは。郡村名俗名。しるさずに。大和と斗りしるせしは。さては此人大和にて。一か國をおさめたる。あるじのすへにてありけるや。わかき人にもあるならば。定めし古郷の大和にて。此おくつゞき又さいもんにて四篇に出す

一 大津ゑぶし
うたゝ寝の。ゆめにさへ。主と轉寝の床のうち。一人寝の。おもひ寝も。寝耳にそれと起されて。くやし晝寝の寝おきにも。寝みだれがみとむすほれる。おもひは寝た間もわすられず。上二人寝た夜はむつ言に。朝寝して。寝ごとまぜりの寝がへりに。寝ものがたりもくやしやざこ寝とねとほける。

二 同

七日滞留の。御客さんは。不淨陰のお二方。經水行に。月水や。毎月こへ御めぐりは。おきてきびしき……。澤山月夜……。それとしらた手桶番。……。

坊さんや。北山さんでも圓光でも。

りしながら……さがします。

三 同

なたねに蝶の。中さへも。うれしかなしの世の中は。戀かぜに。邪魔しられ。わかれさゝれてうろくくと。くるふ胡蝶の羽そでさへ。なみだのつゆにぬれながら。もつれくたまよひみち。なたねもいつかやつれだし。いろも香も。すてゝ身もちとなるはては。つらひつとめにしほりだされた身のあぶら。

四 同

からい物が。はなしする。意氣でからいのがせうがにはじかみ。いさみでからいのが。山葵が。ぴゆつときく。たでもかなはぬ唐がらし。三椒小粒でも。ぴりつかす。是にこせうはあるまいと。咄し中へからしがにゆつと

又の首尾をばいひのこす。
袖にとめたる移香迄も

おしやちらせる朝あらし。

晝のうつゝが夜は夢となり

ゆめがうつゝの種となる。

吹て追様な其偽りが

わたしや氣になる癩になる。

つとめする身は皆偽りと

いつ迄いわれていらりやうか。

仁義五常によしはづれても

立るみさほは外にある。

首尾に心をくたくも義理を

やぶりとむなくおもふから。

あつき二人が恩ある人に

禮もいはれぬ此しだら。

風を引たといふてはいれど

むねに覺への聲がはり。

親の落した初雷りに

出て。よみなくしづまれやかましい。二日酔の。湯豆腐にやおれがなくちやかなふまひ。はたからなにをいふてもからしばかりは耳にきかいでもはなに。ぴゆつときく。

五 うかれよしこの

いやよ音信はつがみなりが

始めからして案じさす。

油とらるゝアノ菜のはなも

浮氣してきた後の事。

雨に濡てはなの花さへも

すがた亂してへばりつく。

仇な櫻がちらすにあらば

松がうらみをいふである。

燒野のせと身は瘦ながら

月に添ふ日を待てばこそ。

あちらこちらと浮氣をするか

蝶ももつれているわいな。

けふが日迄の恨みははれて

しばし逢夜の道がたへ。

いやな人をば去せるやうと

立てた帚木が主にまで。

主に智慧をばみな買込れ

とかくわたしは愚知になる。

お前に盡した此しんせは

禮をうけたい氣ではない。

よし偽りでも聞きたい迄に

おもひこがれたこの頃は。

六 咲た櫻の木に 三下り

さいた櫻の木に。駒のかしらをしつかり。ほどけぬやうに。くゝりつけ。こまが合かむりふりや。見事に咲たさくらの。花がちる。花ちる見事に。さいた櫻の花が。見事に咲たさくらの。花がちる。

七 同 かへうた

すいたどうしが。せなと脊なとを。しつかり。はなれぬやうにいただきしめ。すねて合あちらむきや。せななでさすり。氣やすめいふてのろけかけ。はやあかつきのかね

の音に。びつくり夢さめ。わかれをおしむいもせ中。い
ちやくいふて。これもうきよの。ゆめかいな。

八 今朝の雨に 本調子

今朝の雨に。しつほりとまた合居つゞけのながい日も合
みじかふくらす床のうち。髪をひきさき。眉毛をかくし。
合もうしこちの人へ。わたしがかへ名はなんとせう合あ
れ寝なんすな起なんせ合あけほのならで合くれのかね合。

九 わしがおもひは 三下り

わしがおもひは。三國一の合富士の深やまのしら雪。つ
もりや。すれども。とけはせぬ合うき名たつかやたつか
やうきな。今はうきなのたつのもうれし。どうしんしや
う馬鹿らしい合とんと。命も。やる氣になつたわいな合。

一〇 引すぎに 三下り

引すぎに。間夫をかへしてたゞほうぜんと。硯引よせか
くふみの。身にしみくゝとあけのかね。二階を廻らしや
りませうと。かな棒ひく合。

一一 同 かへうた

秋の夜さむに。ぬしと二人で見ると月は合サ、風か木の葉
がまどをうつ。かぜじやござんせんほとくゝと。人がく
る合。

一六 同

冬の夜ながに。ぬしとふたりがおきごたつサ、鴈かかも
めの聲がするかりじやござんせんちんくゝと小夜千ど
り。

一七 春のうめ

實川延治郎成どし二
の變りしん作うた

本調子 住よしの。すまし餅はてもするなものよ。そんなら
モ一ツ喰てゆけば合天王寺に道とんほりのすでにことし
の二の變り。そらきた黄金ふつてくる合雨かあられか矢
ぐらの太鼓合音にそやさされて。ふかみへはまつてノウこれ
まつていなア。茶屋のこかけにかくれうばア。

一八 三國一の 本調子

三國一の合アさ富士山合たまつばきの。八千代迄もと。
ちぎりしに合。

一九 同

西こく順禮合アさ御ゑいか合ちいはの。めぐみもふ

くれすぎに。けふはたしかにくるはづと。鼻ざんして辻
うらを。身にしみくゝと待わびて。もうしだんなさん。
こゝでございますかへと。駕のこゑ合。

一二 どふぞかなへて 二上り

どうぞかなへてくださんせ妙けん様へ願かけて。まいる
みちにはその人に。あいたい見たいおもへども合。こつ
ちばかりでさきやしらぬ。エ、合しんきらしいじやない
かいな合。

一三 江戸の四季 本調子

春の日ながに。ぬしとふたりが向ふじま合サ、ゆきか。
みぞれが降るわいな合雪じやござんせん。ちらくゝと。
花がちる合。

一四 同

夏のあつさに。主とふたりが夕すゞみ合サ、初夜か。遠寺
のかねがなる合初夜じやござんせんほのくゝと。明のか
ね合。

一五 同

かき。粉川寺合。

二〇 同

さりととはつらい合アさ。さながら合たらちねの。うらみ
もふかき。ふくれづら合。

二一 番はなれぬ 本調子

つがいはなれぬ。アノ蝶々を合見るにつけても。かわゆ
らし。花にたわむれ舞あそぶ。それこそよいゝよいや
な合。

二二 同

番はなれぬアノおし鳥を合見るにつけてもかはゆらし。
早ふめうとなるならば。それこそよいゝよいやな合。

二三 同

淀のくるまは水故まはる。合わたしやりんきで氣がまは
る。ほんにやる瀬がないわいな。しみくゝはらがたつぞ
へ合。

二四 さい藤 本調子

齋藤太郎左衛門。ちよつとくゝ合あいたいことじやとな

ア。るすくくどつこいた。となりにか。さりとはあ
いたいな合逢ひた見たさは飛び立つばかり。かごの鳥か
や恨めしや合首尾を見合せそりぶし合。宵にやきもせ
で。夜中にやたく。どこのたれめとしけるやら。さり
とはつれない君故ならで合茶だち鹽だちおさめだち。さ
かくくさいの。わたしもり。ちつとぬるいじやない
かいな合。

二五四 季 本調子

はるの夕の手まくらに合しつほりとふる軒の雨合ぬれて
ほころぶやまざくら合花がとりもつゑんかいな合。

二六 同

夏の夕の川すゝみ合うちわの風ももどかしく合鳴ぬほた
るが身をこがす合戀のやみではないかいな合。

二七 同

秋の夜さむが身にしみて合物をやおもふひとり寝の合や
つれすがたを水かゝみ合月とかわれやぬしのかほ合。

二八 同

冬の夜ながにおきごたつ合ふとんがゑんのかけはしに合

親父やまじめで笛をふく合。

三四 見たいなく 二上り

見たいなく文箱の内を。のぞいて見たれば玉手箱。あ
けてみればナ。文ではなうて。おつほねさんの。だい
じのく。……合。

三五 同 かへうた

見たいなく。吉野のさくら。のぞいて見たれば花ざか
り。折てみればナ。花ではのうて。山ぶしさんの。大
事のく。はなのさき合。

三六 芝居の見通し 三下り 越後獅子の合
の手にあふ

おいさへく。口上云ちよいと出て。大序あくれば。櫻
のはな見。若との太夫。家老かけ引。盗ぞくかべきりや
ぶり。曲ものまつたと。提ちんばつさり。さりととは残念
な。二段目あくれば上使のおいり。寶ふん失故。春太郎。
せつぶくおしとめ。伯父子の悪事を見出す家老。いか
に姫のこしいれ。日のべする。黒しやうごく。鐵鉦ねろ
う。松の木目あてに。手裏劍ばつさり。おちるところを。

つもるはなしは寝てとける合ゆきがむすぶの神かいな合。

二九 露は尾ばな 本調子

露は尾ばなと寝たといふ。をばなはつゆと。寝ぬといふ。
あれねたといふねぬといふ。尾花はほに出て。あらわれ
た合。

三〇 同 かへうた

蝶はなたねと寝たといふ。菜たねはてふとねぬといふ。
あれ寝たといふ寝ぬといふ。蝶はくるふてあらわれた合。

三一 同 かへうた

雪はあさ日と寝たといふ。朝日はゆきと寝ぬといふ。あ
れ寝たといふ寝ぬといふ。雪はとけるであらわれた合。

三二 同 かへうた

まりは柳と寝たといふ。柳は鞠と寝ぬといふ。あれねた
といふ寝ぬといふ。まりはけられてふくれづら合。

三三 越後の國の 二上り

ゑちこの國の角兵衛獅子。くにをでるときや親子づれ。
獅子をかむつて。でんぐりがへつて。ちよつと立まする。

どつさりちよんのまく。三段目の世話場に。立役。た、
みをあぐれば。主人の眼病に。我子の血しほと眞珠をの
ませば。どろくあやしや。四段目あくればゆきの山。
忍びいる妹せの香づみ。うばひ立退たか。はて口おし
や。つけねらふ取手をばつさり。追てゆく。五段目あく
れば。松原たいまつ。首尾よくかたきの。本望うち遂げ。
たからうばいかへせば。このばは御立。とんからくくく
くくころうつ。評ばん頼みます。御客はもどつて。け
い子やけいしやで。大うかれ。

三七 新あしかり 本調子

名にたかき。なにはのうらの夏けしき。風にもまれて声
のはの。さわくくも。おとにきく。こくには伊勢の
はま荻。よしやあしとはたがつけし合二上りわれは戀には
迷はねど合戀といふ字がまよふ故。さりとてはしらさぎ
の。とまれとまれと。まねく手かぜにゆきすぎて合ま
たもよふすはま風の。あしもさはだち。磯の波。まつか
ぜこそはざんざ。

三八 奈良の大佛 三下り

奈良の大佛。ねづみがかぢるどせうぞいな。ねづみをどしやうぞいな。猫でもよんでこうかいな。さア捨とけほつとけ合。

三九 同 つゞき

月がかさなりや。おなかふくれどせうぞいな。おなかをどせうぞいな。婆々でもよんでこうかいな。さアさ。すてとけほつとけ合。

四〇 同 つゞき

でけたその子が。おた福ならばどせうぞいな。おたふくどせうぞいな。どぞ長者の門口へ。さアさ。すてとけほつとけ合。

四一 同 つゞき

すてたその子を。夜ばんが見つけどせう。ぞいな。夜はんは。どせうぞいな。とし寄五人組よんでこか。さアさ。すてとけほつとけ合。

四二 もんく入度々一

あぶらでかためた椎茸たほを

かたいやくそく今はあだ。

物まねめりやす

四五 竹に巢をくむ 二上り

たけにすをくむうぐいすの。かわゆらしさの谷わたり合うめにとまらば。ほうほけきやう合。

四六 一やうに 三下り

一やうに。春やきにけりやまざくら合。一家ひらけば七重ざくらや。よいちご。ざくら。いとざくら。合にほひざくらの。いろもよし。

四七 琴 うた 二上り

あさがほに。つるべとられてもらひみつ。

四八 同

たまだれの。うちやゆかしき御所ぐるま。

四九 同

すみだはら。われもむかしはいとすき。

五〇 同

世の中に。たへてさくらのないことならば。

唐人清元 それそのときの。うろたへものには。たれがした合みんな。わたしが心から。死ぬるこの身を、合ながらへて合おもひなほして。親里へ。つれて夫婦が。身をしのび合やほないなかの。くらしにも。はたもおりする合。ちんしごと。つねのおなご。いわれても。とりみだしたる。しんじつが。

あらひがみにはたれがした。

四三 同

しらぬわたしをなぜ惚さしに
ときわづ すぎにし梅の花みづき。目見えはじめと手をついて。ふつと見合すかほとかほ。
きたのがおまへのあやまりさ。

四四 同

心くるはぬおもひの中も

コハイロトバ山三エ、おのれはなア。廓にあつては君けいせい。一夜ながれのうかれめに。誠あるとはおもはぬが。女郎のことはとるにたらねど。それとこれとはわけらがふ。やしきづとめの。

五一 はいりうた 三下り

まつはちとせのちぎりといへど。

五二 同

にしでさくはなひがしでひらく。

五三 茶屋ばの出

わしはこの町の。うかれがらす。月夜もやみ夜もうかうかと。よほけにとほけにめうがのこ。わいくのわいとサ合。

五四 ざいごうた

豆つんで。小むぎつんで。お手にまめが九ツ。このつの豆をとるとて。嫁の在處はこゝかへ合。

五五 同

宇治は茶どころ。茶はゑんどころ。むすめやりたやむこほしや合。

五六 花を見よなら 三下り

花をみよなら高尾のもみぢ。いつきてみてもかわらぬ萩は高たいじ。咲いたわいなく。御室のやうなはなを折

たいな。ヤア〜。ほんに大佛かきつばた合。

五七 同かへうた 同

かみをゆうならしま田のわけよ。いつゆうて見ても。かわらぬかみはさつかうがい。結たわいなく。兩わのやうな髪をゆうて見たいな。ヤア〜。ほんに勝山。おとしはらけ合。

五八 蝙蝠が 三下り

かうもりが。出て来たはまの夕すゞみ。河風さつとふくほたん。からい仕かけのいろおとこ。いなさぬ〜いつまでも。なにわの水にうつす姿へ合。

五九 世の中を 三下り

世の中を。義理ほどつらいものはない。ほれてなま中おおくよく〜と。あけくれこがれてくらすへ合。

第五篇

酔は我爲めの粹ならず人のための粹なりといへるを
つつんだる粹ふところや薄月夜
一荷堂主人團圓

一 大つ繪ぶし

意氣な世界は。朝風出に。湯豆腐から汁ちよつと霜けし。おりから表口。これはだんな。いたゞきませう。松竹梅
で是でおしまひ。船が廻りました子供衆よいかいな。ア
レあぶなひ手々引いて。戀の重荷を肩にかけ。上送られるのか送るのか。夢うつゝ。着いたところも霞やばし。
登るつき地のかけさへうれしひ夕ゆしき。

二 同

こがれ〜て。みじか夜を。寝られぬおもひにうつくと。ゆめかうつゝか。うつゝにも。姿見せねば聲なりと。

四 同

おまへゆへなら。わしが身は。たとへどのよになろうとも。うらみとは。おもやせん。どふで一度は死ぬ命ほれたからならその人に。まかして意路を立るのが。おなごに生れたみちじやもの。上それほどおもふ心根を。しんきやな。余所にしられて腹がたつ。いつそこのまゝ退たらながいきするであろ。

(題缺本ノマ、) 梅が軒ばの匂ひどり。夏はほたるのともし火も。ながめ見あかぬすみだ川。御祓ぞ夏はうちつれて。散ゆくはづへばら〜と。来てはざこ寝をおこしつゝ。上おとこごゝろはむごらしひ。しのぶ夜は。つがいはなれぬおし鳥の。酒が長じてきつねけんでもおもひきる氣はないわいな。

五 よしこの

色と定めて合したからは
ひしの餅さへかたくなる
おなじ添ても雛見た様に
氣むづかしよな主はいや

せめて一聲ほとゝぎす。きかせてたんのうさせたなら。おもひ切よもあろうのに。上月の手まへもはづかしく。なま中に。浮氣ぐもりの色見せて。ほんににくひよいつかからすにわかれさす。

三 同

主のうわきで。この頃は。こゝろもやしてゐる中を。とやかくと。うわさして。しらぬことまで余の人に。たきつけられて胸の火の。きゆるにひまなきせつなきに。にへくりかへる腹のうち。上おもはづあふて何からと。うらみ事。いふてきかせどにくらしや。茶にしたあとではわたしのしんじつ水にする。

(題缺本ノマ、) 大きなことを。京では一かいに。でつちのろうそくやはいつでも二かい。しまつな内は。三がいで。納る四かいにたもつ五かい。薬ぐひにと六かいに。やりくりするのには皆七かい。三藏の御弟子が八かいに。つらいつとめがこれは九がい。上づほら息子が二階住居の八かいで。丁度十かい。不細工者でお前は百かいナ。しつかり千かいがいづくしもこれでないからこゝらで億かい。

切の焼のとアレ菱のもち

見の様なお前の色重ね。

雨に叩かれちるやま吹は

それさへ人にはいはぬ色。

云兼さんした心にほれて

明けくれ心を碎くむね。

笑ふて山さへ別るゝ春と

おもや今さら樹がふさぐ。

鳥渡裾から櫻の陰で

ぬれて出にくひ別れ際。

浮気者だよアノ初虹は

まるひ中にも色分る。

胸にたづねて心で引いて

してまで一こゝる鼠啼。

待身辛気な辻占迄も

あはぬ今宵の拍子間。

鐘を別れとしていぬ人に

名残おしひか慕ふ花。

當座かるのは別れのもとよ

霜も日に〜薄くなる。

主に飽れて私はたれに

好れて嬉しい人があろ。

花と蝶さへ迷ひがあるに

まして定めぬ中じやもの。

偽り聞さへ嬉しい迄に

おもひこがれて逢ぬとは。

主に智恵をば皆買こまれ

とかくわたしは愚知になる。

添たき綱が切れたるからは

かたひ火ばしも替る縁。

宵に降ては流れの水も

すまぬ氣を持つ朝の色。

おもひ積雪落して仕舞や

傘も今では骨折らぬ。

よもや人眼に悟られまひと

いふてさしたる紛へ櫛。

罪な男が可愛くなつて

人にもしらせぬ苦を造る。

仇惚さす様なアノ櫻には

つれない嵐が添わいな。

おしていはれず我胸いため

心でいさむる氣の苦勞。

行衛定ぬ流れの水に

浮いて添たる花筏。

若ひ氣性に任せて鮎も

登りつめるは無理でない。

明しおくれて誠も嘘と

なつて苦勞が又ひとつ。

梅の若はも實を持からは

花を咲せた後の事。

ばつと世間へ浮名を立て

花は當座に散り安い。

やがて身持の氣ざしとみへて

花もやつれた顔見せる。

せつない思ひに啼時鳥

それをきことは情無い。

六 松の二葉 二上リ

まつふたばはナ。あやかりものよ。青葉はまして落ば

さへ合いもせかはらぬちぎりとは。うれしかろふじやな

いかいな合。

七 同 かへうた 二上リ

まつがつらいと。おしやんすけれど。こぬ夜は恨みあひ

おいの合中に小松をもふけなば。うれしかろではないか

いな合。

八 おんらが在處 二上リ

おんらが在處は。風雅なものよ。むくつけにねきりもふ

す。かたろうならば。桃や柿にぶらさがる。九十九疋

のはなかけ猿に。おんだてられてもわらわれても。根ご

んぞほれたが。性根かへ合。

九 かんしやうせう 三下リ

菅丞相は。つくしのくにへながされて。丑に引れて安ら

く寺へ。御とももふすは白太夫平馬が首は飛びうめで。怒りのがんしよく。鳴神は。なるかいな。なるわいな。そこからにらみやさつても。都のかたへはとどかぬ合。

一〇 同 かへうた 三下り

ゆびきりかみきり。すんとおまへにほれました。それに戀めがかんしやくに。ござんす儘の川。ながれの身。抱れて寝るがふしぎなか。つとめでござんすとやつておけ。やるわいな。やるかいナ。なんでもやるのがよいわいな。よい〜〜〜よいやサ合。

一一 同 三下り

梅がへぜんせい。すんとこたつにこしをかけ。煙りくらべん浅間山〜そらさぬ顔してふくませる今宵のうち。に三百兩。でけるかへ。でけまする。なんでもよろひをとりかへし。あなたの御手へと入ませう合。

一二 櫻見よとて 三下り

さくら見よとて名をつけて。合まつ朝ざくら夕ざくら。間夫のひるじやとるナ合エ、どうなと首尾してあはしやむけな。エ、。ほにほが。エ、。それれもそうかいな。それれはエ合。

一七 同 かへうた

エ、しよがいなく。しよんが奴は。下馬先そろへて。殿はお馬で。臺傘立笠大鳥毛ふつてふり出すな。はれわいさのさ。エ、はる〜先のけ。それれはな合。

一八 同 かへうた

しよがいなく。しよんが紙子は。今はやう〜に。かどにた〜づめば。喜三よかわりはなかりしか。引ばやぶる、ナア。あみ笠の。エ、手づからぞうりをエ。しよんがいな合。

一九 沖の大船 二上り

沖の大船なア。磯ばたに。三十三だんの帆をまきあけて。おもかちとり梶よきあらし。むかうの。島から女郎衆が出て来てまねくやら。船頭衆は見るよりのを立て。いかりをざんぶとみなといり。よかねエヨカ〜合。

二〇 同 かへうた

んせ。なんどきじや。ひけすぎじや。さぞやあんどの。ちらりほらり。金棒ひく合。

一三 同 かへうた

おさなあすびと名をつけて合。まづ木杭かくしかくれんほ。あな一おし繪や。中の小坊主じやといナ合けん〜いもむしつ花つむ。やんまつり。輪廻し。あちらへはしり。こちらへはしり。凧のほし合。

一四 づぼんぼへ 二上り

づぼんぼエ。づぼんぼはらたちやつらにくひ。池のどん龜なりやこそ。さゝの合手にづぼんぼエ合

一五 あふて云たい 二上り

あふてい〜たい合〜合あふて〜〜〜あふて云たいな。しんけんでおますエ。毎ばん顔見にや寝られぬウ、〜、合。

一六 しよがいな 二上り

しよがいなく。しよんがばさまは。よほけたばさままで。破れたちやんぶくろに。まつたけをいれて。嫁女、こちら

おさん女郎衆が井戸ばたで。すべつてころんで。ちよつこらも、出して。そこな。そこなながしが：だらけに。家根で鳩めが氣のどく餘りの。ほてつほ、ぬらくらするから氣をつける。みよちよろらいちよろちんがらも。よかねエヨカ〜合。

二一 とつちりとん

むかし釋尊。長者の姫に。『ゆびをさした縁となり。たちまちはらむやすだら女、』ついに合赤子を生落し。是ぞまつかないつわりよ。指ではらんだ子なれば。指ら尊者といふ物を。『羅………子なれば羅ら尊者ともうします。

二二 道成寺山づくし 三下り

おもしろや。四季のながめは三國一の。ふじの山。雪かで見れば。はなの。吹雪か。吉野山合朝日やまく〜を。見わたせば。うたの中山石山の。合すへのまつやま。いつか。大江山。いくの。道は。遠けれど。戀じにかよふ。浅間山一夜のなさけ有間山。合いなせのことはを。

いつか木曾山まづち山。わがみかみやま。いのり北山。
いなり合山ゑんのむすびし。いもせやま。ふたりが中の
こがね山。花さくゑいこの。このく姥をばすて山。みねの
まつ風。音羽山。入相のかねをつくば山。東叡山のつき
のかをばせ合三笠山。さるほどにく。てらくのかね。
月落鳥啼つきおちとりなきて。霜雪天しもゆきてんに。みちしほ程なく。日高ひたかのてらの。
江村かうそんの漁火ぎよまかうれいにしづんで。ひとくねむれば。よき
ひまごと。立舞たちまやうにて。ねらひよりて。いかんとせし
が。おもへば此かねうらめしやと。龍頭りゆうづつに手をかけ。飛
よと見へしが。引ひかづいてぞうせにけり。

二二三 ひなぶり 合の手ことば入糸に
はなれていふべし

戀のおも荷のナア。しまのうち。おくりむかひにかくか
この合かごや「だんなおかごが
仲なな居い「ア、おあぶのごぞります。客きやくおつとせうはやくやつてくれ中ちゆうさまなら
おちかひうちへイア、モシだんなだたへもよろしふ。かごおうちまでやりませ
うか。ほうばなに括りつけたる提灯ていとうの合かご「ハイノ、だんなこんば
んはひどくおはよります千話せんわけんくわでもなきへましたかなア」な 日ひがら
にそのやうにつまらばどむならんはエまた四五日四五ひするとせつくだもの 日ひがら
のやくそくしてきたなエ 合あかご「ハイノ、ヨツトどふした合あたかひ

可愛男かあいに誠をつくし。

いもせ山「なみだにしほるふりそでにむちよ手綱たづなよ立上
り竹にサア雀は品しなよくとまるナ止とめてサとまらぬナいろ
の道みちかいな。
ア、モしんきな事こと斗たり。

二二七 同

呼ぶも通ふも戀じのみちは
管三くだん「たけのそのの御所ごしよほう公下こうげ々の下々げげたる牛うしかい
とねりもつたいなくも身近みぢくめされ管丞相くわんしやうげんの姫君ひめぎみとわ
りなき中の御文ごぶんづかい。
筆ふでが立石たていしみちしるべ。

二二八 同

一寸も放れまいぞとおもふたなかは
夏祭なつまつり「そでなし襦じゆ伴ばん一ツになりぬいで渡せば針はりさしの
糸いとのむすほれるんのはし。
主ぬしも五分ごぶんなら私は五分ごぶん。

二二九 春雨はるさめかへうた

も。低いも。色いろのみちなアエかご「火かがくらのゾモウやつけたて
るたてんのいきづへも。つきぬたのしみゑつさつサ。さ
アさおせく」かごだんなモシおうちでございませヨモシノ、よくねいりや
さつたへいだんなモシノ、だんないびきダウ、くくく
くムニヤ、おつとせしゆめのかよひぢなアエ。

二二四 上るりさはりどど一

「すむのすまんのあんじをやめな
管原くだん「あなたになんぞ恨みがあるかたゞしは時平ときへいにた
のまれしかよくにはなじみの女房にようばうもすて母ははさまのぎり
も思おもはず。
うをと水みづとの中直り。

二二五 同

富士の山さへ十里にや足らぬ。
忠八ちゆうぱち「はづかしひやら嬉しいやらあんじてむねも大
井川いづか水の流ながれと人ひとごころもしや心こころはかわらぬか日ひかけ
に花はなはさかぬかと。
戀こひの登のぼりはきりがない。

二二六 同

むらさめに合しづくくれるいほ崎さきの。住居すまひも詫わびても
のしづか合露あはれの小草こくそうのむつまじき。小聲こゑのむしをもち
もに。これも浮世うきよのあら世帯せたい。合あぬしとわたしの戀中こひちゆうも。
いつか身み儘ま氣き儘まになりわびて。サア合あ惚ぼ合あふ中ちゆうとなるなら
ば合あサアサなんでもよいわいな合。

二二〇 やなぎく 二上り

やなぎくで世を面白おもしろふ合あうけてくらすが命いのちのくすり合
梅うめにしたがひ。櫻さくらになびき合あその日合あその夜の風次かぜじ第合だいあう
そもまことも義理ぎりもなし。はじめは粹すいにおもひそめ合日
ましにほれて。ツイ愚痴ぐちになる晝寝ひるねの合あこのうきおも
ひ。どふした拍子はつしのひやうたんに。あたはらのたつ。す
きじややエ合。

二二一 柳やなぎばしから 本調子

やなぎばしから。小ぶねいそがし三谷さんやほり。土手どての夜風よかぜ
に合あぞつと身にみしむ衣紋いもん坂さか。ぬしと待夜まちよは。あわぬその
夜よのかんしやくに。かたぐけふはくるはづと。おちた
かんざし疊たぐみさん合。

三二 同 かへうた

扇かまへて胡蝶をねらい。花のゑん。須磨や明石の。そつと乙女や合まほろしの。富士のうら葉や。あたるはつ音や玉かづら。わかむらさきやまきばしら。乗せてかゝり灯。身をつくし合。

三三 わすれ唱歌 本調子

こんど長崎で。かわつた唱歌をなろうた。あとさきはおほえなんだが。中のしやう唱歌をわすれた。さこそあるべきと。書て戻つたが。それさへ出口でなくした。首尾も諸わけも。そのとふり。ハテ面目ない。世にこゝに。しゆどの吉三が里通ひ。宵の口説におもやせて。あなたのかたへおさらばへ。こなたの方へおさらばへ。のときまエ。猪牙にも駕にもエ乗いで。色あみ笠を買ひこんだ。土手のくほたまりに。けつまづいて。膝頭をすりむいた。あいたしこなんとした。おたんのたんせつぶ。ちんば引けく金龍山へ。米々まんぢうは占か。錢やある。おんじやれもふしや。あるよさ。とかく浮世はおもしろや合。

三四 夕ぐれかへうた

はるさめに合ながれを渡る高瀬川。つきぬ思ひを待わびて。戀しき人が見えたぞへ。ソレ都なる木や町の。互ひにゆめを見るわいな。

三五 秋の七草かへうた

萩や桔梗に女郎花。のほる最中の月のかげ。ほつと句になるうれしき思ひ。ほんに今宵の秀逸じや合。

三六 二〇カ

女房のこしらへてかんざくりと猪口をもつて酒によふたるおも入れにてひよろ／＼して出て又酒をつぎがぶ／＼とのみながらへげたれた風ざまおかし
「エ、イア、うまい事じやわしやモフ何よりかより酒さへのんでいたら。御きけんで一寸出るのも銚子と盃を持つてあるくがこれを人がみるとア、嫁々はいつも酔っているエライか性もんじや氣性者じや羅生門じやといふてほめてくれるが外の二つはわかつて有るけれど羅生門がわからんテア、分つたこれは又さけの妻といふのか。
ワタナベノツナ

第六篇

緒 卍

近属の流行唄に、不二の山から三保の松原、どなたも硯いて御觀じませとは、如何なる遠鏡かは知らねど、其歌枕の西行を松茸かと見紛ふは、硯き甲斐なき眼鏡なれど、愚眼に、儒經史を硯いて、頻りに唐好癖とならんよりは、今此小典を天稟の通眼にて、一回硯けば、青樓遊里の有調天を見通し、藝妓翳間の腹袋を見透すこと、ギヤマンの爛瓶よりも鮮かなるべし。ところまで通の通、粹の粹たる懐となりて、此題號の虚でない證據は、四方好子硯いて御らうじませと、遣眼鏡やの主人にひとしく、一荷堂に住む戀の山人誌す。

卍 卍

文久第二晩夏日

一 大つゑぶし

夏けしき。そよ／＼と。夕かせ通ふ濱ざしき。忍ぶのしづく。青すだれ。蘭の鉢うる籐むしろに。かけ香の薫りぶん／＼と。意氣な女の洗ひ髪。なるみのゆかたまき帯に。上肌もあらはに爪引は。清元の。あだな文句が氣にあたり。エ、まあにくひとた、かれたる蚊は果報者。

二 同

辻占昆布も。帯紐解いて。合はぬ恨みに見すてられ。氣に合はぬ。御鬮さへ。紙屑籠にまるめられ。エ、しんきらし腹の立つ。あたりさはりに迷惑な。煙管はやたらにた、かれて。よくやし紛れの茶碗酒。廻り氣に。もゆる思ひの胸の火を。消して貰ふはほんにぬしより外にない。

三 同

顔見合せて。につこりと。髪をなであけ汗ぬぐひ。チ、しんど。憎らしいと。口ではいへど心には。うれし思ひのへだてなく。しんじつ帯紐とけ合ふて。雪のはだへの美しさ。上ながれの水もお前ゆへ。はづかしく。もらすくらのの仲じやもの。氣まゝにさしやんせわたしやお客

とおもやせん。

四同

かあいよと。いふことば。とけて寝た夜の枕こそ。煙を立つる。賤の女の。二人してつる蚊帳のひも。荻吹く風のおとづれも。中にするあり不粹あり。ほんにあこぎが浦めしや。上日がらの約束してまたナアエ。雲にかけ橋散れど薫りは猶残る。伏見竹田に野田に衛のなをもよほひのますいづみ。

五同

あだなる顔に。惚れこんで。月がないたか時鳥。竹やの人と。呼子鳥。妹がりゆけば冬のみち。アレ鳥がなく鳥のなに。うき名を流す鳥さへも。せかれあはれぬ身のいんぐわ。よさなきかけらうぐひすの。つがひ離れぬ。惚れて通ふになにこわからう。あふけば顔にばらくと降るはなみだかあきさめか。
(題缺本ノマ)
吹く風も。さまんゝに。そつとかよふた初東風が。つほみの花の。紐とかせ。浮氣で通ふはる風が。いつかさく

いはすにされるよしん實が。

浮氣男におなごの道を

といて誠がきかしたい。

親のいけんとお前のじつに

あけれ氣をもむ事ばかり。

誠しりつゝ噂ではらを

立つるお前の氣がしれぬ。

當付いふては投げたる枕

われて今さらふさぎ出す。

わたしが心底見透迄も

かよふお前の心なら。

いたゞきますよとさす盃の

あとの尻目がにくらしい。

おなじ盃わたすにつけて

こゝろとがめがするわいな。

おもはず嬉しい此さかづきを

うけて眼先の色に出る。

持ちつけられてはアレ盃も

らにあてつけて。ちらしかけたる夕あらし。心うれしい風かをる。上たがひの肌に涼かぜの。ひやくと。おもへば今は秋風の。身にしむさむ風あひに北風かあい子かぜによいや魔かぜ。

六 うかれよしこの

ばんにこそとて待つたのしみが
合はぬうらみの數ふやす。
嘘も誠となるからこんな

心しれない人をまつ。

通ひ船だよ賣れないけい子

かはるお客を乗せてさす。

戀の欲だよ今宵もあすも

あふに限りがないにつけ。

胸の算用とこの書出しも

逢はぬしんきふさぎ出す。

男勝りに氣をもみぬいて

むねに思はぬ苦をふやす。

初手はしらねど馴染んだからは

今さらいやとはいへぬ仕儀。

泥も眞水と澄んだるからは

そふた田螺も角かくす。

かたく添ふたる田にしでさへも

みはなされては貝がない。

仇に身抜きをしられたうへに

やすく田にしも身をうられ。

誠づくからうるさい眉を

ひいて出るのもつらくない。

解て寝た夜も浮談つきばかり

いふてなぐさむきが憎い。

浮談つき事から氣が合ひかけて

人にも咄せぬ中となる。

さめたところからアノ赤衿も

いつか苦勞にかはる衿。

泣いて歸した羽織の衿は

むねのもつれの數のほか。

つとめなりやこそ此はで姿

名残をしさの心があまり

口ぜつまぜりの憂わかれ。

程のよい手にツイ握られて

肌にすりよる天瓜粉。

いやな毛虫がゐるとも知らず

軒で出合の立ばなし。

馬鹿な奴だといはれておくれ

粹がわたしの身の苦勞。

結び止めたる粽の中を

にくや紐とく人がある。

七 いよぶし

はるのあすびは。樋のくちや合仇なさくらの宮かけて合好たどうしが。意氣なすがたに。ほろよいきけんにはたへかけ。ころびあふたる。草まくらエ、モにくらしはる風が。わる洒落。しかけて。裾をちらほらまくりだす。はづかしさ。

八 同

夏にあすびは。夕すゞみ合屋かた紅はい棒さして合登る大川。あだなつめびき。くらき灯かけのさしむかい。うたのもんくを辻うらに。いやみふたりいはれたり。つめる指さき。アレサいたいよこそばいヨ。またさんせ。

九 同

あきのあすびは。月の夜に合しのぶ二人が亭ざしき合つゆにしつほり。ぬる、千草や。啼てうれしひむしの音はいとど可愛さますおもひ。はなれぬ中とより添て。もらすまいぞと。つゝむ中さへうらやまし。月の雲。

一〇 同

冬にあすびは。四疊半合おとしづかな雪のよに合かほる梅が香。うれしふくさに。むねもさばけてへだてなく。すきなこい茶の口うつし。ほんにどふして香箱と。まゝに。火ばしの。つれそふ中はど迄も。放りやせぬ。

一一 ふみのたより 三下り

ふみのたよりはナ。今宵ごんすとそのうはさ合いつのもん日もぬしさんと。野母なことじやと。ひよくもん。は

なれぬ中じやとしよんがエ合。

一二 むらさきの 三下り

むらさきの。ゆかりの色やかきつばた。そめてなま中くよくと。あけくれあんじてくらすエ合。

一三 同 かへうた

世の中に。義理ほどつらい物わなひ。ほれてなまなかよくくと。あけくれこがれてくらすエ合。

一四 柳よく 三下り

やなぎよくすぐなる柳。いやな風にもなびかんせ合

コトバあちらへゆけば浅草の観音こちらへ行けば芝の神明アどちらへいたらよかろうやラ。

しあんばしコトバへにはともあれ猪牙できなサイ。

一五 梅は北野の 三下り

梅は北野の。天神さんの御神木。見ごとに咲たとせ。咲たその梅どふじやいな。東風がふく。にほうその香がわしやうれし。二人が中は。二世も三世もかわりやせぬ合。

一六 同 かへうた

かまくらのナア。よいこの。御所の御庭に。庄家さんの。娘が酌に出た。

二〇 同 二上り

しやくに出たそうなナア。よいこの。さかなよりもイヨさけよりも。庄家さんのむすめがめについた。

たけは八幡の。八まんさまの御神竹。見事にのびたとせ。延たその竹どうじやいな。雪がつもりてしほしほと。朝日さす。とけさんすのがわしやいと。二人が中は。二世も三世もかわりやせぬ合。

一七 川かせに 二上り

かわ風に。すだれまくりてふねのうち。あだな姿にあらひがみ。ちよつと松葉につけのくし。さそかさすまいか。サ、そこらはどふじやいな。エ、。さす氣じやエ合。

一八 いなり祭りの 二上り

いなりまつりのたいこの音。たぬきつくくかんがへて。一人で氣をもむはらづみ。サアサきなサイく合。

一九 鎌倉のナ 二上り

二一 同 二上リ

めにもつかばやナア。よいこの。つれてゆかんせ。イヨど
こ迄もおんなは。他所のゑんじやもの合。

二二 同

ゑんじや物とてナア。よいこの。たとへ野のすへ。イヨ。
山のおく。どんなしん苦もいとやせぬ。

二三 登り夜船 二上リ

登り夜ふねは。かるやろじやとて。梶をとつたエ。佐太
やひらかた合 淀合 水にくるまはくるくと合 伏見へつく
へ。テ、イ、脚半の紐じやまひとつじや。三尺おび
じやまひとつじや。笠じやみのじや。シテあるくのじ
や合。

二四 同 かへうた 二上リ

おのれ……。今夜しよじやとて……。……。どこが
あたまや。おいどやら。……。のあたりをくるくと合
さへて。……。合

二五 鎌倉北條 二上リ

鎌倉北條。四代目ときより。諸國へ修行に出しとき。て
んこちない雪に。した、かなめに合ひ佐野の源左衛門が。
經世が栗の飯。梅さくら松たいて。寒さを凌がんせ合。

二六 四 季 二上リ

はるが氣まゝになるならば。さくらにうめの香をとめて。
柳の枝にさかせたひ合。

二七 同

夏がき儘になるならば。蚊のなひさとに住居して。エ、
糺すの嵐にふかれたひ合。

二八 同

秋が氣まゝになるならば。もみぢに伽羅の香をとめて。
エ、雄鹿につのがなきやよかる合。

二九 同

冬が氣儘になるならば。ほたると雪をこきまぜて。エ、
エこたつの柱がなきやよかる合。

三〇 七草合の手 コトバ

うかく。五升斗りねらしやれ。人数が多いとサ。すつ
とことつこい。

三一 かみなり 二上リ

かみなりぐわらく。地しんわゆさく。ゆうれいヒウ
とろく。うらめしい。身にヒユく。どんく。キウ。
どんく手うち連中は。ヤツきりちよん馬よ太鼓うて。
一升の豆みな喰そ合。

三二 富士の裾野 二上リ

富士の裾野に。西行さんの晝寝。ナウく。うたを枕に
こるつアまた。田子のうら。ナウく合。

三四 どつこいせうぶし 二上リ

ほれちややめ。ほれちやほつとき。またほれちややめ。
それちやいづもの帳よごし。どつこいせうく。

三五 同

かねといふもの世かになくば。こんなおとこと寝ぬも
のに。どつこいせうく。

三六 同

おつかさん買てもくんさい。朝せん鼈甲のはり形を。ヨ
イ。地下でもたない物は。わつき一人。たん子しよ

.....合

矢倉太鼓を。うちつれて。大入さじきは。うへした平場

もつまつて。口上い、出て。役者かわり名付の次第。よ
んで。チョンくでまく明く。そのとき茶屋から。持つ
てまいります。さけ重に。酒器。のせて。さけぬる爛で

も。一杯のみんなばんげ繪本。うりにくる。宇治山水
から。女中さん。女中がつむりに。着物をひつかけ。だま
つて通れば。女中ほやく。女中が手水。しんほがならひ
で。立て見たれば。花みち群集で。がんまちに出る。モ

シちよつとまつた。往ふかひよろつく。あぶない。嫁々
さん。手水場つかへきつた。女中はづみきつた。こりや
なんとせう。そもはや果前。辨當もたり。ぞうりさが
す間に。今日はこれ限と。矢くら太鼓をうつ。とんく
からくとんくからく。とんがらく評ばんく。

評ばんたのみますと。目出たくうち出す。祝ふてしやん
の。おしやしやんのしやん合。

三一 おつかさん 二上リ

ふみのもんくはうすすみなれど。なかに戀路がかいてある。どつこいせうく。

三七 物間似

宮本無三四
笠原 異人

山の段かけ合

いづれも役者は其
得たるをつかふべし

無「まことやおもひ出せば。淵瀬とかわる人の行すへ。両親に分れほん國を出しより。浮つしづんつ。かんなんしんくはいくばくぞや。中にも備前岡山において。敵の伯父たる。白倉がかん計にて。すでに一命もおはるべきに。義女がなさげにそのばをのがれ。今又まよう木曾の山中。ふりつむ雪に。前後を忘るこのありさま。ハ、アあやまつたりく。我母の胎内を出しより。女といふては乳母より外にしらず。まつた此鳥は。妹脊のはじめと聞およぶ白倉が娘。われを助けしも。なさげの道。たけき斗りが武士にもあらず。情のみちも弱きにあらず。生者必滅。有爲天變の世の中じやよなア〇笠「ハテ心得ぬ。雪おとしけきこの山中。人氣どうくと立ありさま。さてはまれ人のきたりしよな。のうくそれにたゞすみたもふ

おろし人目に立ぬその内に。うらもん口よりおとづれん。そうじやく。

〇藤五郎女房おさん

「この秋からの鎌倉行。下女や下男にいとまをとらせ。右と左りに乳のみ子を。かへてたてるほそけむり。兄はさすがにおとなしく。夜も四ツ迄手習の。つくへにもたれて寝るかわいさ。いくつ寝たればととさんが。もどらしやると子心にも。まちしかいなきこのさり状。やぶつて立るわたしがみさほつ、ますあかして下さんせへナア。

三九 同

〇小はるや彌七

「とんと氣のすまぬ事じや。此のあいだ淺草で。おたかと約そくした日限は。てう度けふあたり。それにこのころは。文ひとつおこさぬは。但し事あらはれ。手うちにもなりはせぬか。ア、ようすがきいたいなア。イヤ此のやうに。思案ばかり仕ていてもすまぬ。まア喜多八にそうだんのうゑそうじやく。

は。旅人にて候はずや。無いかにも拙者。肥後の國の浪人。望みあつて諸々方々と武者修行。道案内のどうじはぐれ。なやみつかれしこの山中笠「その童子こそ身がさしづ。物たらずとも一宿あらばこゝろまかせ無「それは千萬かたじけなし。しゆ行のそれがし何かいとほん笠「一樹のかげ無「一河のながれ笠「これは雪の軒ふりて無「うきみながらのかりまくら笠「サアくこれへ無「しからば御めん下されイ笠「さてく此大雪になんぎもさこそ今宵は夜ど、もゆつくりと。おはなし申さん無「さて物すきなるこの住居。はるをまつたるかん紅梅。自在の竹に葉を生じ。まつのたる木に茅ののき。ほうらい山のおきなに出合。千年をのぶる心地でござるテナ。

三八 同

〇佐くら藤五郎

「ア、鐘は。西明寺の亥中の鐘。久しぶりできけば。なにとやらなつかしひ。彼の古歌に。山田守僧都が身こそかなしけれ。秋はてぬればとふ人もなし。今はわが身も秋はて。まねく尾花の穂にさへも。おどろかれたる雪

〇植木や奎右衛門

「でかしたいもふと。くどくと禮はいわぬ。きんじよがあるゆへ。おやかたどのに。うらから来て下されと。いふたれば。追つけかごもつてみへるであらう。そちもそれ身じまひでもしてまつて居やれ。ア、ままならぬうき世じやなア。

第七篇

ほんほんいふてしまたれさんすが氣に喰ぬ。

二 同

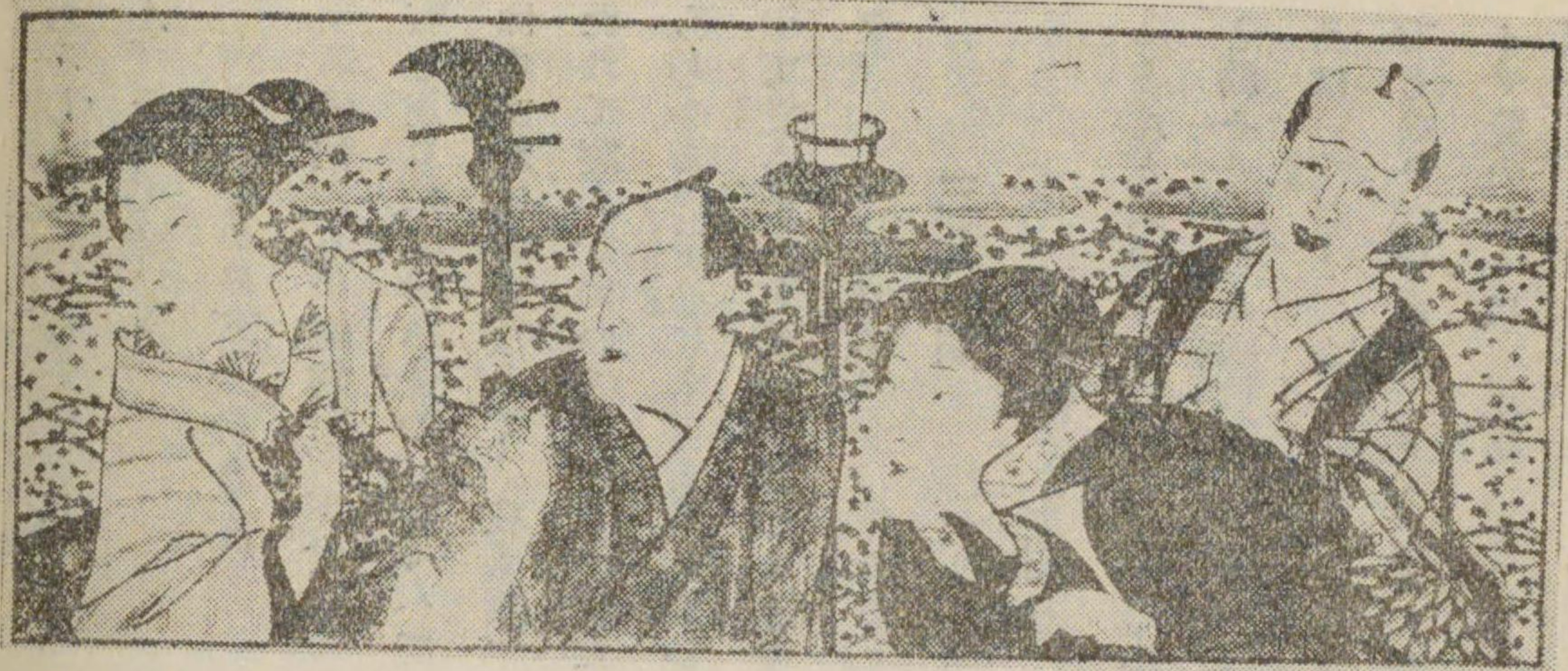
戀ごろも。縫そめて。わたしやひと重とおもひつめ。ど
うぞして。衿先は。せめて褌ともなりたさに。袖をあわ
して神だのみ。つらひしんほを下がへも。なくておまへ
はにくらしひ。上悪性こゝろの上がへを。しりながら。
わたしやこらへておくびにも。出さずじせつをまらば
りして居る身のつらさ。

三 同

戀の意氣路を。たてとふす。こゝろの針もさまふに。
小ちやほから。おもひつめ。づなしに惚てこの頃は。今
宵も翌も大ぐけと。こゝろに當たしきしはり。たがひに
あはすゑりしめも。土かたいなかなるもめんぬい。それ
さへも。今は人めのせきとじに。へだてられてはさびつ
きあふたるくさりゑん。

四 同

さつまが一けん。茶やが二けん。むかるが三けん。將



一 大つるぶし
女夫けんくわは。犬
もくわぬ。かしこい
人はすかくはぬ。酒
づきは。餅喰ぬ。名
人の太夫は銚くわ
ぬ。たつとい出家は
さかなくわぬ。おつ
とどつこいその手は
くはぬ。だましてお
くれな二はるは喰は
ぬ。上のせておくれ
なそりや喰はぬ。す
すどるでつちは。し
やうだんしてもお目
玉喰ぬ。ゑらそふに。



基が四けん。つかま
へられて。どつちも
い五けん。伊勢に六
けん蔽には七けん。
ほんやが八けん新丁
九けん。淺草の店が
十軒で。くるしい長
家が百けん。上富
士の神體千けん。
子供あすびの。ちん
ばがけん。萬けん
に。此の上は億けん
佐夜の中やまでそい
つは無けん。

五 同

二世も三世も。神か
けて。變りはせじな
かわらじと。いゝか

はす。中さへも。うきよの義理にへだてられ。あはぬお
もひにくよくと。こがれなみだも袖のうち。人眼をは
ばかる身のつらさ。けふはたよりがあることか。上あす
は逢れることもやと。寝ても覺ても。片ときわすれぬ其
人に。身もよもやつれてほんにうき世をゆめうつ。

六 同

戀の道具も。いろく。かづある中に四角でも。ほど
のよい。仲人は。こたつやぐらに箱火鉢。きせるが一寸
はしわたし。こゝろひかした三味せんが。色となり物ゑ
んの糸。上ちろりのあつがいたら貝。廻す屏風や。二
ツまくらに夜着ふとん。.....

七 同

又の約そくよしせぬとても
すなをに返すは誠から。
こがれまつ身も今宵と成て
うらみいふさへあとや先。
お前のしん實わしや嘘なぞと

いふたも心がさぐりたさ。
たまに嬉しひ便りのへんじ

ちがはさんすなばんにこそ。
のせたからとて陽氣につれて

ともにかるゝ花見ぶね。
いづれ戻るといふ約そくが

あつてのせたる渡し舟。
心ならぬよアノ家かたぶね

主に似たふり似たる聲。
おもひつかれて寝る門口を

にくや水鶏に起された。
なみだかくして氣を取なをし

瘦はせぬかと水鏡。
遠座かるのも浮名をふせぐ

一ツは身のため主のため。
世間はれねどアノ早乙女は

ぬれる覺悟で出たる笠。
うんとすねたり氣取をしたり

首尾を仕た夜の明安き。

扇おとしもその手は喰ぬ

うまくのつてはよいものか。

寝るが早いか又いちぢられて

蚤までわたしに腹たゝす。

數はつめども今では仇と

おもやくやしひつくま鍋。

尻も据らす氣も落付す

朝からすわつて此の暑さ。

ぬれる便りがおそいか蟬も

こがれ啼して日をくらす。

せまひくらしをする浮人形

よる邊なき身をなぐさまれ。

散り易き芥子の花みりや二人が中も

今に散かと又ひと苦

ぬれに重る五月雨よりも

いつまア晴るよわしがむね。

親がおとしたはつがみなりに

しられてうかく乗られた。
仇なおまへに尻つめられて

ひよんな所から曇りがでけて
ぬれにやならぬよ夕立雲。

こがる、おもひかアノ青柳は
露も重氣なふり見せる。

ちよつとかられて紅付られて
そしてうれしひ汗ぬぐひ。

水の出花とふたりが中は
人眼づゝみも切かける。

濡て間もなく退く白雨の
やうなすけな降はいや。

主の浮氣とわたしの愚痴が
やまる時節はいつである。

しん氣まぎれと團扇をしがみ
つがひの蝶見てふさぎだす。

夢が誠かまことがゆめか

しばし逢夜の道が絶へ。

八 高尾 三下り

紅葉ばの。あをばにしけるなつ木立合はるはむかしにな
りけらし合。世わたる中のしなぐに合。われは親はらか
らの。ために沈みし戀のふち。うかみもやらぬながれの
うきみ合たばこのんでもきせるより。のどがとふらぬう
すけむり。ないて。あかさぬ夜半とてもなし合人のなが
めと。なる身はほんに。しんくまん苦のくの世界。四季
のもん日はおぐるまや。

九 ちるはうき 本調子

ちるはうき合散らぬはしづむ。もみちばの合かけは高尾
か。やまかわの。水の流れと。つきのかけ合。

一〇 いたこ出じま 本調子

いたこ出じまはまこものうちに。あやめさくとはしほら
しい。よいやなアく合。

一一 同

宇治の柴舟。はや瀬をわたる。わたしや君故のほりぶね。

ア、よいやなく合。

一一二 同

はなはいろく五色にさけど。ぬしに増りし花はない。
ア、よいやなく合。

一一三 棚の達摩 本調子

あまりしんきくさゝに。棚のたるまさんちよいとおろ
し合はちまきさせたり。マコろはしても見たり合。

一一四 同

あまりしんきくさゝに。たなの布袋さんを。ちよいと
おろし合ほこりはらふたり。マわらわしても見たり合。

一一五 沖のくらしいのに 本調子

沖のくらしいのに。白帆が見える。あれは。紀の國。よい
やサ。みかんぶね合。

一一六 同

夜たかかをとて。よして眼を突て。とかく。夜。(下欠カ)

一一七 うめが香 本調子

梅が香を。とめてかほりのぬしゆかし合顔は紅梅うぐひ

とのよきかな合下からよんでも。ながき夜の。とをのね
むりのみな眼ざめ。なみのりふねのおとのよきかな。正
月二日のはつ夢に合。

一一二 同 かへうた

清水のく。清けんが。ちらと見そめしさくら姫。戀故
まよふたちすがた。やぶれ衣にやぶれがさ合山の奥にて
とじこもり。繪がきしすがたをながめつ。ひと眼あひ
たいさくら姫。

一一三 同

あけがらすく。うらざとが。庭の古木にくりつけ。
おりしもふりくる雪ふき。箒木おつとりうつ音に。か
むろみどりがとりついて。旦那さん御かんにん遊ばせと
すがる禿をともしばり合。

一一四 きんとまきが 本調子

金時が。熊をおさへてまさかり持つて。富士や裾野の松
ばやし合義經辨慶渡邊の綱。からの大將あやまらず。神
功皇后竹うち臣合いくさ人形やよしあし粽菖蒲がたな

すの合いつか音色をたのしみに合はつこゑそつとまどの
うち。いきなせかるじやないかいな合。

一八 同

迂うらや。まつ葉かんざしたみざん合戀といふ字にひ
かされて合一人雪の夜をしのんできたに合腹がたつかへ
わしぢやとて。またす心はないわいな合。

一九 ひとつくづや 本調子

ひとつくづやに。く合四季のはな。粹な水仙むろざき
のうめ合いとしかあいとなでしこの。よれつもつれつ糸
ざくら合垣根卯の花かきつばた合からさを哥のめうとあ
ひ。可愛らしいじや。ないかいな合。

二〇 一夜明くればかへ歌

一夜こがれてほたる火のおもひをこがす胸のうち合しん
の闇にもうかくと。河端柳の草まくら合水にあわずに
居らりやうか。

二一 長き夜の 同

ながき夜の。とうの寝むりのみな眼ざめ。浪のり船のお

やあやめぐさ合。

二五 のけば長者 本調子

のけば長者が二人と。いへど。此のあくゑんがうれしふ
て。深山のおくのくらしなら。すいたとふりの別世界合。

二六 同 かへうた

どうじや逢かとざしきでとへば。こちやこのごろはと眼
になみだ。うき世の義理にからまれて。いるわいな。つ
らいしん苦をするわいな合。

二七 おもひこんだる 同

おもひこんだるわが戀は。さがが邪けんできれかじや
う。たとへきれても切はせぬ。おもひにおもふた人じや
もの。まだわたしや。みれんがあるわいな合。

二八 口説して 同

口説して。おもはせふりなそら寝いり合おくの座敷のつ
めびきが。つるなか立にそれなりに。亂るゝかみのつけ
のくし。八幡がねのきぬぐに。別れとむないあけがら
す合。

二九 松竹梅 成こまや えどもどり 同

花のなにはに。浪花にはなの合。香をなつかしき冬ごもり合今をはるべとたちかへる。逢瀬を梅の玉づさに。とる手もゆるぐはつ日かけ合のほるうれしさ。またはづかしさ。もと木にまさる合浮氣をやめて合なをいつまでも住の江の。まつもむかしに。かわらぬ色の。君がなさけをくれたけや合ふしに込たるかづくを。いわでおもふやこひのくせ。

三〇 うば玉の 同

うば玉の。闇とおまへのほりつめ合二かるせかれて忍びあふ。夜はゆめさへ合黒ぬりの。まくらことばじやないかないな合。

三一 おまへと一所に 同

おまへといつしよにくらすなら。深山の奥のわび住居。柴かるわざにいとぐるま合ほそ谷川の布さらし。ぬいはり仕事もいとやせぬ合。

三二 のぼりくだりの 同

三六 抱いたるこの子を 同

だいたるこの子を見るにつけ。おもへばく腹のたつ。けんざいおのれの嫁々とられ。間夫くさい馬鹿らしい。ばかくく。

三七 同

なくも道理とこ、かしこ。やまを越えてさとへいた。さとのみやけになにもろた。でんく太鼓にしよの笛。ヒウくくく。

三八 同

けんざい親にかごかせ。のつたわたしは不孝者。かんにんさんせゆるさんせ。いきづへさんせ休まんせ。ハイくくく。

三九 こりやくくぶし 二上り

富士の山から。三保の松原。どなたものぞいてごろうじませ。田子の浦々。舟か木の葉か。西行かまつたけか。こりやくく。

四〇 同 かへうた

のほりくだりのおつゝら馬よ。さても見事な手づなぞめ。かいなアヨ。馬士衆のくせか高聲で。吉田通れば二かいから招く。しかも鹿の子のふり袖合。

三三 まかしたからは 同

まかしたからはあく迄も。きけんなほして。こちらむいて寝やさんせ合アレまどからあけてきたわいな。ぢれつたいでは。あとからからすがないてきた。カアく合。

三四 夕ぐれにすだれ 同

夕ぐれに。すだれまきあけたばこほん合ふつと吹くる涼かぜに合木の葉こほるつぢうらを合はんじて見たりあんじたり。エ、。どうせうぞるな。つらやしんきや。腹がたつわるな合。

三五 川たけかへうた 同

はるくくと。たづねてこに紀の國の。きしうつ波は三熊野の。コトバ順禮にごほうしやと。いふもやさしきくなまり。名乗もつらさにむせくる涙。あはれなるとのうみの親合。

花の彌生はむかうじま。こりやくく。さくのきけんて。土手をば見廻り。御茶やの姉さん。狐できなさい。かゑりは夜ざくら。おるらんながめて。格子でのろけます。こりやくく。

四一同

しんと夜ふけて。となりざしきの。むつごとそろりと。のぞいてごろうじませ。膝にじつくりもたれて。おまへにまかせた。からだじやなんぞと。やたらにのろけだす。コリヤくく。

四二 おていなかへうた 二上り

這ていこ。ツテチン。ほうていこ。ツテチン。ほうていこ。くく。いきたいな。しんけんでおますへ。あんどがあかふていかれぬ。チ、く、チ、、、。

四三 同

布袋さん。ツテチン。ほてさん。ツテチン。ほうていこ。くく。布ていさん。ちよろけんに福すけ。お馬になで牛犬猫。にやんくく。にやんくく。

四四 同

布袋さん。ツテチン。ほてさん。ツテチン。ほうていこ。くく。布ていさん。ちよろけんに福すけ。お馬になで牛犬猫。にやんくく。にやんくく。

四四 追わけぶし 二上り

あいはせなんだか遠江灘で。おもふそさまははや上下合。

四五 同

笠を手にもちどなたもさらば。いかいおせわになりまし
た合。

四六 同

鳥も通はぬ玄海灘を。風にまかした帆がにくい。

四七 同

咲いてほころぶアノ山櫻。とけて春雨は化粧の水。

四八 なんぞとぶし

何をくよく／＼かわばたやなぎ。水の。なんぞと。水の流
れを見てくらす。なんぞとようまア。そんなこといはれ
たもんだヨ。

四九 さしき 二〇カ

長吉のこしらへにて手に櫛と銚子なべをもつてつらではのみ
してうろたへたふりにてはしつて出てさけをがぶ／＼のみの
み。

コトバ「サア／＼ゑらいことになつてきたそうどじやく／＼

五一 同

げんはのこしらへにて三味せんにふるしきをかぶせ首實檢の
おも入れにていろ／＼ふりあるべし。

「ヤア何。すりやこれがかんしやうじやうの首とナ。ム
フ。よくうつた。今身どもが實檢して。くれん。テモほ
そながい首だ。ヤア／＼こりや菅丞相とおもひのほかデ。
落てんちにシヤンじや。
テンシンサン

内のいとさんと帯やのむすことしん中に出たといふこと
でこれからさがしにいけといふてやかましい事じやしか
しこの夜のふけたに桂川へいくのは氣味がわるいよつて
なんでも一ぱいぐつとやつていかんとどむならんがそこ
で此櫛で此通りにゑらやりのゑらのみ。へい／＼。今す
ぐにゆくといふているが。エ、モツせわしなひ落「おわん
やイ銚子もんやイ。
長エモン

五〇 同

黒のもんつき朱ざやの大小手ぬぐひほうかむりしてしりから
げくせものこしらへにてまきゑの吸もの櫛をふところに入
れて扉をきりやぶり出るといチ、チン／＼／＼。

「おくざしきへしのび入り。まんまと味よふ。すまして
やつたまき繪の一櫛。チエ、かた地でよい。さいわい外
へこほれぬうち。あんじやう咽へさし入れなば。ほうび
の酒のみしだひ。ハテ吸ものが手にいつたナア。
ヨイ

「なにかいやしひアノすい物。うまくさそうな其の一櫛
こつちへわたして。落ふたわつてしまへ。
クダバツテ

第八篇

日月のたふときはゑがける人物に譲りいたらぬ作
者と畫工板元は彼諺に似たればとて

限りなき粹の天上をさぐらんとおろかに智恵を欲し
がりて居る

一 荷堂主人戯題

一 大津ゑぶし

神やほとけの。仇名のつくものは。出がはりせぬ女中が
これは稻荷。新町女郎が。天神に。お寺のかこひ者が大
黒で。耳が遠てえびすさん。色の黒いが護摩堂の不動。
けつこうな人が如來さま。上人が尊とむにん徳で。くさ
でけ八まん。端手な伊勢参りが三寶荒神で。高い下駄は
きや行者さんでやかまひいお嫁々が山の神。

二 同

星のつく物を。よせていをふなら。家老の由良之介は大

星に。播州にあほし。障子のかけほし。干物やの店には切干に。夏の酒もりや物ほしで。着類道具の土用干。瀬田の唐はしやからかねぎほし。上城のばんばは合羽ほし。天道ほし。天王寺の蓮池に龜が甲干。祖父さんばさんの梅ほしで十日えびすの吉兆のうり物立えほし。

三 同



家名はなんと。たづねれば。ひざに手をおき高砂屋。岸うつ浪は。ふだらくや。濱の真砂は石川や。ひとりでするのが蠟そくや。後生ねがひのありがたや。幽霊どろくうらめしや。上屏風のうちの泣聲は。ゑら文屋。うつしらなみうなばらや。おんあほきやべいろしやのまかほたらまにはんどましんばらははりたや。

じゃなけれども。きゝわけて。さつぱりチョンと。思ひきりぐす。ハイと返事はしながらも此の道ばかりはとんほやもりも止りよか。

六 同

雪ふりは。山城で。からひお口がこりや大和。いけ花は。遠州で。けんは薩摩で主が淡州で。定めなのが美濃尾張。でけてわるいが紀州に肥前。小べん丹後に百姓一岐。禮者が上野下野に。おなごのやもめは。江州。夜鷹が相州でさけの信州。水の阿波氣のおほひお客でこいつが伯耆。

七 うかれよしこの

宵は嬉しくきく鐘の音も
今はつらさの明のかね。
おもひ出す程わする、閑が
なくてしばしも苦が絶えぬ。
仇な朝顔根のない竹に
そふて色ゆへからむとは。
籠の鶯おもひの竹に

四 同

箱入娘も。ゆだんがならぬ。しきより外へでんでむし。と。そだて上げられし。火取虫め蝶々とかけて寝るころぎ。うらで鈴虫とかこつけて。久松虫にあぶ首尾は。いなごの方からこがねむし。上人の蛇にかゝるも。いとはずに。よめりこみ。かはづまぐらのむつごと。い

とじてならぬとたがひにくつわむしなめくじり。

五 同

親たちの。そのいけんやんま蚊帳の蟬へかたへ。けぢけち嫁入を。さゝねばならぬ。蟻がみのむしをかるこふ犬に手をかまきり。みつく蜂をしりながら。おやの蚯蚓を忍び合。羽蟻とはなさけなひ。蜘蛛かける。百足いふ

かこはれながらも啼わいな。

ぬしを松虫啼音をとめば

もしやそれかと氣がもめる。

逢ぬ其夜のしんきにつれて

ともに枕もいぢられる。

はれてうれしく添ひながらふて

もれりやはづかし新枕。

過し一言まだ耳ぞこに

あつて夜毎の夢に迄。

おもひ切つたといふひと言に

どうか未練の残りぐち。

明くれこがれて見た夢覺て

けさは夢やらうつしやら。

歌の文句がふと氣に當り

うたひながらもふさぎ出す。

色も味も薄と知つて

はつといふので好新酒。

ゆすり起されこちらを向けと

いやな嵐にすねた萩。
逢ぬつらさを打つ夜の砧

ぬしの寝耳にはいるまで。

かるい身じやゆへ添はれぬものと

しあん定めて散つた露。

晝のしをれに夜は引かへて

草もちる露のほるつゆ。

稲に鳴子が付さへせねば

鳥も苦勞はせぬものを。

おもひ染にし色さへ今は

なくて苦勞の種茄子。

へんな風から雫とかはり

心おく露きえ残る。

人前は咲て見せても苦があるゆへか

しんはやつるゝ萩の花。

なるのならぬと此鬼灯は

破れかぶれの身の苦勞。

すがたかくして陰からそつと

命迄もおもふたからよ

鬼二三「あの人を頼んで。雨のふるほどやる文に。へ

んじしやらぬのは。但しは女にはれらるゝがきらいか。

嫌ひなら此の様に。どこもかもほれられるやうに。可

愛らしいなぜ生りやつた。そなたをのけて殿御とは。

ほかにしあんはないわいな。

九 同

ふつと逢ふたがわたしのつみよ

賢女の八「三千せかいをたづねても。又とあるまい殿御

ぶり。目にちら／＼とかたときも。忘るゝ間なき三「

らさま。

いつそせつない胸のうち。

一〇 同

すへの苦ろうも皆打わすれ

二十四孝の三「御主さまとも御主人とも。わきまへ知らぬ

つたない筆に。心のたけを岩本の。神のむすぶのおな

さけに。うれしい枕かはした時。

うれしはづかしこのすがた。

聲で迷はす草のむし。
程のよい場を立ちとむないに

すかん鳴子が稻すゞめ。

へんなはづみにふと誘はれて

いち夜つれ添ふおどり連。

顔の紅葉の色見てとつて

人の見ぬ間と手折かけ。

いけんしられてうつ向きながら

逢ふか逢はぬのたゝみざん。

深いおもひがいつしかそれて

あさい流れにかゝり船。

花のたよりに色よい返事

夜半のあらしがふかぬまに。

そつと二人が氣を置ごたつ

たれも當りにこぬ様に。

ひよんな障りがでけたる故か

根じめ狂ふた忍びごま。

八 上り入りよしこの

一一 同

人にやいはれずおもひのたけを

阿波の鳴戸「めうとのまことを天道も。あはれみあつて

國次の。かたなのせんぎすむ迄は。夫のいのちたすけ

てたべと。

ねがふは神さまほとけさま。

一二 同

日頃おもひの恨みも今は

忠九「娘こゝへと呼いだせば。谷の戸あけてうぐひす

の。梅見つけたるほゝゑがほ。まぶかにきたるほうし

の内。アノ力彌さんのおやしきは。モウここかへ。わ

しやはづかしいと。

いふにいはれぬ袖のうち。

一三 同

こがれなみだに又ふさぎかけ

ひらが二「つまこふ鹿の果ならで。なんぎすゞりのう

み山と。苦ろうするすみうき事を。かづかくお筆が身

のゆくへ。いつまではてしなにはがた。

すへはどふなることぢややら。

一四 同

それといはねどアレしんきらし

伊賀七「おそでは一心しづ馬が顔。テモよい男とおもひ
その。いひたいことも娘氣の。口へ出かねる茶の花香。
かほをながめて汲む手もと。わきへながすも氣はそい
ろ。茶わんばかりを手に持ちて。さし出す心のおもわ
くは。

すいりやうさんせわしが胸。

一五 いつしかに 二上り

いつしかに。君をまつちの。やま／＼こえて。通ふ五百
崎こまがたや。千どりかもめのこゝろがあらば。しらひ
けさんへ。しんじつしんから願かけて。ちよつとおかほ
を見めぐりならば。うれしのもりであるぞいな。それ／＼
それもさうかいな。

一六 同 つゞき かへうた

衣もんざか。今宵くるわのあふ瀬の首尾を。はしばのあ
めにしつほりと。君はさん谷の三日月さんよ。しんじつ

ばしとは申すなり送つてもらふお客たち名ごりをおしむ
さらばがきなさけをつくる君たちに松の位と名づけしは
オ、秦の始皇の御狩の場で雨をしのがせ給ひしに松の木
かけのやどりとて太夫とくらるを給ひしに餘風を今に色
里の江口神崎室の津や浅妻船の浅からぬ。契りは千歳い
ろかへず。島原と世によばれ。たのしみうたふ一すぢ
に。おもしろや。

一八 よし／＼ぶし 本てうし

そも／＼是は。宇多の天皇。くだらぬ戀の大將軍。平の
卿か不器用か。して見にやわからぬ紋づくし。偕もいろ
よき若まつしまや。千代も目出たきいてうづる。丸にい
の字のあけはの蝶に。世の中まるふて。よし／＼。

一九 同

さても心がうかれだしたる。たつぷりいやみの子ども衆
が。地につきかぬるによし／＼。世の中丸うてよし／＼。

二〇 同

引ぞわづらふはなあやめ。ひるきをねがふは二葉ぐさ。
しつかと取もち菊桐に。御代はあんせいよし／＼。世の

しんから願かけて。二つまくらでたのしむならば。うれ
しのもりじやないかいな。

一七 大盡舞 二上り

そも／＼曲輪の始りは。ゆけの道鏡勅をうけ。はじめて
くるわをたてらるゝ。くるとはお客が来るゆへに。わは
やはらぐる心にて。くるわと名づけ初めにけり。ホウそ
れ。大じん舞を見さいな。その次の大盡は。そも／＼お
客のはじまりは。高麗もろこしにはあらねども。今日の
本にかくれなき。紀の國文三でとゞめけり。ホウそれ。
大じん舞を見さいな。今はくるわとなりふりも。粹でま
るめた戀の山。出ぐちに柳をうゑたるは。これぞいはれ
のある中に。お客をまねく合ことば。諸事は柳にやり羽
子の正月しよさいは客のはれ紋日ひがらをうけこんで六
條三すぢのあけ屋町こゝにうつせし來歴は通ひなれにし
深草の少將さまにはあらねども小まちつゞきとおもてぶ
せ顔は朱雀ののうかなや出口にかけし橋の名は衣もんば
しとは申すなり入り来る客のよそほひにかたちつころう
所とて衣もん橋とは號けたり今の世迄も人ごとにえもん

中丸うてよし／＼。

二一 同

見つけられたるふたりが顔は。赤らむ月には玉兎。雪や
こうのとつもりし中も。とけてさくらの花ざかり。世の
中丸うてよし／＼。

二二 同

引くか引かぬか二挺の弓。引かねばわからぬ三十三間
堂。したりや／＼してふり立て。合はずは内儀の手際
ぞや。とりもちしつほりこいの／＼。世の中まるうてよ
し／＼。

二三 浮世小路 三下り

浮世小路に。うき世をのぞく。浮世の外ほかの世たいして。
木具で飯喰うてにしき出の茶わん合はしがみは旦那さ
ま。のし。乙子朔日は。小倉野。茄子はおもやから。あ
くおけが。エ、／＼／＼。わしや氣にかゝる。ア、／＼
ア。浮世じやわいな。／＼。氏はのうても玉のこし。

二四 色がある 三下り

色がある。せうちで惚れたよこれんほ。いひ出すからは
あくまでも。立てゝもらはにやならぬぞへ。どうすりや
そはれる縁だらう。オヤ毎ばんあふたらうれしかろ。じ
れつたい合。

二五 むかしく 三下り

むかしく。山のあなたにあつたけな。祖父は山へ柴か
りに。婆さんは川へせんだくに。るすにすゝめが棚もと
の。のりを残らず喰てしまひ。ばさまは見るより腹を立
て。舌きりすゝめでおひはなす。

二六 同 つまが

祖さんいとしゃ。杖つきの字で。糊を喰た雀どんはこ
らにござらんか。ちうく。野こへ山こへさとくた
づねて。エ、いたといな。

二七 同

かにどんく。どこへゆきやさんすぞへ。猿がしまへ。
親のかたきをうちにゆき候。おこしの物は。なんでござ
る。是かこれは。日本一のきびだんご。一つ下んせお供
申す。はさみの化物。丹波ぐり。引うすに。針。功の者

べ。サアくよるくよいとのご合。

三一 聲色

こづれも役者は得たる聲にてやりたまふべし

○髪結源五郎

「うめが香や。人の心も春知らず。アノウつくしい者は
器量ばかりじやない。このあふぎまで。よう書をるナア。
せめて一夜さでも。あんな者を抱いて寝たら。男にうま
れたかひもあるといふものと。いふた所が。こつち思ひ
のあつちなんともないじや。そんなこといふてゐると。
仕事場の火でもともさうわい。

○奴矢田平

「ハ、ア奇妙々々。かゝるふしぎを。見るも盡きせぬ互
の奇縁。おきづかひなされ一まづ此の場を切り抜けて。
命まつたうまたの再會。おさらば。

○駒澤治郎左衛門

「君が一日のなさけに。妾がもゝとせの命をすつると。
いふこと。これまで餘所にきゝしが。今といふ今。我
が身にひしとあたつたり。一人の妹はわが殿の。おため

がより集りて。さるが島へおし渡り。エイヤどうく。
念のうおやのかたきをうちおふせ。皆さんいかいお世話
と。一禮し。もとの穴へとは入けり。

二八 よいしよこせうぶし 二上り

すまふははてるし。すまふとりやかへる。あとに残るは。
四本柱に土俵にすな手桶に「よいしよこしやう。鹽とみ
づ合。

この外いろくかへうたあれど何れもよしこのにてうたへる
なり

二九 一つ夜着 三下り

ひとまへだてし。戀のやみ合。かこいといふもつたわれ
て。見てもふかいは。うらやまし合ぬれて手水のみづく
さき。はなれぬ中ぢやあるまいけれど。なんのかのなき
一つ夜着。

三〇 こゝは島原

こゝは島原出口の柳。まねくかむろが合圖の手くだ。忍
びあふよのその樂しみは。戀の重荷はいなばの松よ。あ
を葉さかえてともしらがまで。千代のおもひはこれなん

に最期を遂ぐる。それとこれとは事かはれど。も。おも
ひがけなき深雪どの、なれのはて。袖乞とまでなりさが
り。われを尋ぬるせつなる心。不便とは思へども。それ
といはれぬ大事の役目。大望をか、へしわが身の上。こ
とにせんこく女が申せしは。幼少より言號もあるとの事。
始めにそれと聞くなれば。やさしき言ばもかけずして。
今のなけきをさせまじもの。知らぬ事とはいひながら。
まことある武士が。愛子に艱難いたさせるも。我あやま
り。種々さまぐのしんくを語る其身より傍にきく心の
うちの苦しさ。ア思ひまはせば不便やナア。

(手品の傳いろくと題して二節あれど省く)

第九篇

卍

やつがれとしごろ青樓にうかされつゝ耳にとめこゝろに覚えし小唄のるいだみけあすびのかすくゝいとたはぶれにかきあつめてさくら木にゑりそめしもさひはひにして篇をかさねいまや九冊目に至るに後の雛をゑがきしはまた板元の幸ならめと

櫻木にましてめづるや菊の酒

半水卍

一 大つるふし

小菊のうちから。身をうられ。つらいつとめのかむろ菊。色戀も。しら菊を。今は苦勞に大きくの。人の黄菊を取りながら。こゝろのうちは亂ぎくに。別れたぬしはあづま菊。上このまゝすてゝいつまでも。紺ぎくと。おもへばこゝろ残りぎく。嫁な菊とはいつま夏ぎくうれしい

く風の。その中に。音はすれども天狗かぜ。かみなりさんかうつ太鼓。くもりし鏡に蚤の金玉。月がなひたかほとぎす。上唐土の景色に出て姫の。心底や。われかからだにそへながら。ちりけのやるとは見えそうなものでもとんと見えませぬ。

五 同

平作は。千鳥あし。けんざい親に駕かゝせ。あひに來たやら。南やら。とみはさかるへ仕かへにやりました。兄貴はしれたぬるまどの。夕の風呂の上り場で。河内へこゆる近道は。あきし野外山いこま山。上京の六條珠數屋町。天命しれや。主を殺した私が妹。此の津の國にと。船ばた叩いて本藏くるしさうちわすれ。

六 同

田毎にうつる。月のかけ。夜毎にかわる仇まくら。すいとぶすいの。ある中に。しんにほれたるあの人。逢たはつからかわゆふて。身にしみんとほれ抜いて。實にたがひの身のつまり。上店ではせかれおへ家では。いじめられ。つらいつとめ身のうへは。かごの鳥かようら

便りをきくだらう。

二 同

寸尺よせて。いふならば。女子にまけて立ぬが一步。しりのつまるは。柿の四分。たがひの勝負は五分くゝで。諸國修行に廻るが六分。いきな尻からけが七分三分。夏まつりの徳平が一寸で。浅草觀音一寸八分。上腹きりがたなは。九寸五分。だんびら二尺八寸で男達の染五郎は五尺でかごかきが六尺に京に一丈。

三 同

目出たきゑんを。むすびのし。難波屋の松は枝をのし。火のしでゆかねば。のり湯のし。杖を力に腰をのし。土俵へ上るはのつしのし。ゆで蓮さい槌たばねのし。紀州のなまりはそうじやのし。上長閑なそらにつるは羽をのし。富士山は。甲斐と駿河と三河の國に裾をのし。維子はちよこゝ敷のし。九郎右衛門丁の合印は蕨のし。

四 同

見えそうで。見えぬ物は。水の流れと人のゆくすへ。ふ

めしやこゝろひとつがぬしのもの。

七 うかれよしこの

見れば見るほどおもかけ清や
めさへなければ何おもふ。
鴛の様なふたりが中を
むけに引わけ龍安寺。

飛で身がらく越行蝶は

おもやくやしの垣一重。

アレサ見やんせ紅葉の色は

おもひそめたかからむ蔦。

なびくかたへと冠をふつて

尻をむけたる風見鳥。

露にや色まし寄添風にや

こゝろまかせる女郎花。

心ありけな柳にあたり

花にやつれなひ春の風。

指髪切のは實ではないよ

おりにや身腹も切さんせ。

積り積りしアノ白雪も
のほる朝日にや水の泡。

深ふほれたはわたしのいんぐわ
あさひお前にうきしづみ。

結び合ふては又わかれたり
風を苦にするおみなへし。

屈きかねたる文とはつらや
川を越へたる筆もある。

忍びがへしをうらみにおもひ
きれりやとりつく懸風。

仇な色だとツイ思ひ染め
むらがあるかと氣がもめる。

いつそりんきの角でもはやし
付てやりたひ人がある。

だまされましたも悔しひ事
さけばきらるゝ室の梅。

くらき戀路といぢ持月が
しのびや雪間を覗き出す。

かはるまひぞと言葉の花を

ちらしとむなひ千年迄。

傍に居るよりアノ青柳は

けつく遠目で思わせる。

露の逢瀬に紐とく花の

なさけしらずに當る風。

うかれくるから花にはまよひ

蝶も羽袖をぬらす露。

八 花見にごんせ

花見にごんせあらしやま。水にうつるはいかだぶね。ち
らくと。ちるさくら合。

九 同

すゝみにごんせ清みづへ瀧にうつるはおとわやま。いな
がら名所があるわいな合。

一〇 同

月見にごんせ石山へ。水にうつるはせゞのしろ。ちらく
と。帆かけぶね合。

ふられてらされ其身の果は

破れかぶれの雨障子。

かたい契りの幾千世迄と

岩に根おろす姫小松。

鬼と名が付や瓦の鬼も

にくや中きる風糸。

鶴と龜とはへだてゝいれど

おふた中とは人が云ふ。

くもる朝日は暫しの色を

添すなさけの雪の笹。

松にからめどはづかしそふに

とかくうつ向藤の花。

かたいつほみをさかせておいて

ころび歩行た蓮の露。

笑がほ作つて佗梅のはな

むねをはらさぬ臙月。

忍ぶ姿をちらりと見られ
月をうらんだほとゝぎす。

一一 同

雪見にごんせまるやまへ。こゝろうつるはさしむかひ。
ちらくと。とけるはだ合。

一二 あひたさに 本調子

あいたさに合用もない門を二度三度合よべどたゞけど正
根なし合さほど内がこわいのか合。

一三 しのぶ身は 本調子

忍ぶ身は。あふことさへもたまさかに合その夜はいつも
寝かさずに合愚痴をいふたりすねても見たり。無理をい
ひつゝなかのよさ合。

一四 はをり着せても 二上リ

羽織きせても上下きても。何處か粹なと人がいふ。ほん
にお前さんはつみな人合。

一五 同

親のゆづりの五本の指を。四本半にはたれがした。ほん
にお前さんはつみな人合。

一六 同

きせるかた手に膝立てなをし。さゝいわんせ先の名を。
ほんにおまへさんはつみな人合。

一七 伊勢音頭 三下り

伊勢のよう田のおどり。二見が浦に住ながら。サ、
よい／＼／＼よいやサ。なぜにそなたは鹽釜の。しほが
なくともしたゝるい。よい／＼／＼／＼よいやサ。眼元
にしられ戀わたる。はしは名どころ。岡崎女郎衆と。も
つれ寝よやれ。富士川の。それゑだ川つぢ。あすの夜
明のきぬ／＼に、けにおさらばへ。鳥はときしらす。鶏
はにくいよ。にくやうたりよか。なんでもいとしうてな
らぬエと。いふては脊なをひとつうち。いたこ出じまは
さていりどころ。御客は立派で氣はさつば。腰さしもん
ばになかよしの。しやれたかほしてよしなされ。夕もこ
よとてたまはたの。今宵もこよとてたまはたの。おりお
りしがない御無心に。さつぱりこまり入やした。塵とり
手桶しんぼんに小べんたご。

一八 五人おとし 同

五ツつれだつ鷹金の。文七さきに立ならぶ。すがたもそ

合とけてながれてながれてとけて。みしま女郎衆の。三
島ちよろしゆにはだふれたはいな合。

二二 渡邊の綱 二上り

わたなべの。つなさんは。物の具立派に身をかため。金
札ちよつとかたけて。東寺の羅生門へいそがる。おり
から黒雲。てんどろ／＼で舞ひさがる。ぬつと出た鬼の
手。綱子のかぶとをひつつかみ。ところをすらりとぬき
はなし。ちよいと切やアいた。あいたののおぼこは。
その手を見せてんか。見せてもらふ。どつこひそつこい。
その手は桑名の三ツ一で。サアきなさい合。

二二三 色のちぐさ 三下り

いろの千草の氣のかわ水に合そめておりだすなにはづや
合ときしもはるの梅が香に合のつと日の出る二のかわり
じま。ほんにきれいな黄八丈。よい／＼／＼／＼よいや
サ合。

二四 うはさにも 本調子

うはさにも。氣障けがのふてなりふりまでも。意氣では

ろふ尺八の。れんほながして曲輪中。エ、なりあるく。
エ、雷の正九郎。にがい顔してなに故に。安の平兵衛。
かほに極印の千右衛門。子どもすきとて布袋どの。名は
市右衛門。いやな男がおもふほど。好たおとこがおもふ
なら。おんなの命はありやせまい。こちやそう思っている
わいな。そうだんべく合。

一九 あひたさに 本調子

逢たさに。ひとり夜ぶかにきたわいな。ちよつと合切戸
を明けていな。あけてんか。おとなりさん。もうし御内
かおやどか合おるすさんか。いないのんか。とんとく
叩いても。エ、じれつたいではないかいな合。

二〇 松になりたや 同

まつになりたやありまの松に合なりたやな。そりやなぜ
に合藤のかつらに這まとわりて。エ、よれつもつれつ。
一夜のなさけに。こちやあひたいわいな合。

二一 同 かへうた

雪になりたや箱根のゆきに合なりたやな。そりやなぜに

すはでしやんとして。かつら男のぬしさんに。まアほれ
たが無理かへ。しよんがいな。ほれたが無理かへ合。

二五 同 かへうた

おたがひに。しれぬが花よせけんの人に。しれちやたが
ひの身のつまり。あゝまでわたしが情たて。まアほれ
たが無理かへ。しよんがへ。ほれたが無理かへ合。

二六 待宵 本調子

月は限なくてらせども。君待宵ははれやらで合泪にくも
る戀の闇合それかとおもふ足おとも合すぎてかすかに余
處の軒合しんきくさると疊算。無理に合したかんざしの
合もつる。胸のみだれがみ。とけてあふ瀬を合松むしの合
しのび音になく秋風や合曉ちかきかねのこる合。

二七 酒屋男と 二上り

さかやおとことねんごろすればナ。藏のナ。くらのまど
からかすくれる合。

二八 同 かへうた

米屋おとことねんごろすればナ。藏のな。くらのまどか

らぬかたもる合。

二九 つるのこゑ 本調子

のきのあめ立よるかけは浪花津へ。あしふくやどのしめ
やかに。かたりあかせてかはいとは。うその誠かそのこ
とのはに合つるの一聲いく千代までもすへはたがひの友
しらが。

三〇 有馬名所 同

有馬名所は薬師にあたご。三社富士山龜の尾と。つゞみ
が瀧や落葉やま。清水いなり鳥地獄。竹細工いとざいく。
一の湯と二の湯と。ゆつほへりりたるな合。

三一 同 かへうた

ありま二階を下から見れば。わかい女中やとの達つれて。
ぬれたいまきや下帯の。さを竹ふるてむすびさけ。風ふ
きにさまさんせ。濡……ぬれ……。サ、見ごとじ
やエ合。

三二 黒かみかへうた

さけのみの合酔つぶれたるおもしろさ。ようて寝た夜は
りし女郎。ことに禿のうちより。器量は人に勝れたれば。
外の子供と違ひ。心を付てそだてし物。なんのにくひ事
がある。こゝをよう聞きわけて。おもひなをして奉公せ
よ。度々いけんを加へても。それをそれとも聞入ぬ。そ
のくるしみも心から。おのれがすみおのれをせむる。み
どりめも。おのれがつかふかむろなれば。外の者への見
せしめ。おもひきる心なら。今でもなはをゆるしてくれ
ん。コリヤ男ども。きを付いと捨て。おくの一間へ
入にける。うらざとあとをうちながめ。涙にくれてい
たりしが。詞エ、なさけあるおことばなれど。これ斗り
は。どふも忘れぬ。おゆるしなされて下さんせ。まだ
此のうへにどのやうな。かなしい苦しいせめくでも。わ
しやいとやせぬ。どふなつても。おもひきられぬ。いつそ
添れぬ物ならば。一所にしにたい時次郎さん。ころして
下んせ死たいわいのふ。歌、きのふのはなはけふの夢。
今はわがみにつまされて。義理といふ字はぜひもなや。
つとめする身のまゝならず。わかれとならば今さらに。
いなせともなき放れぎは。詞エ、このくるしみに引か

ひぢまくら。よはず寝た夜は箱まくら合わたしやおさけ
がすきじやといふて合すきな上戸のこゝろとしらで。し
やんと。立たるかんちろり合夕のさけが今朝さめて。
湯くれ合水くれ。鹽茶くれ。どくともしらす。つもる大
酒。

三三 新内あけがらす 下

内には亭主浦里を。庭の古木にくりつけ。折ふしふり
くる雪ふき。箒木おつとり打音に。禿みどりが取付い
て。詞旦那さんモウ御かんにななされませと。なげくか
むろを共にしほり。浦里なみだの顔ふり上。私が身は是
非もなし。みどりに何のことがあつて。アノ子はゆるして
下さんせと。いへば亭主も不便さと。思へどわざとこゑ
あらく。ヤイうらざと。客をせく事客のため。女郎大切
しんだいも大事。アノ客も未だ若き人。餘りしけく通れ
ては。親が、りなら勘當うけ主持ならば親かたの。手ま
へ。仕ごこなふはしれた事。このほど年切かへしも。あ
の客衆じやとある。此うへは。心中か。かけ落か。行末
までが不便さ故。たとへ敵のすへにてもせよ。我抱とな

へて。アノ二階の三味線は。いつぞや主の居つゞけに。寝
まきのまゝに引よせて。たがるに語る楽しみの。今宵は
引かへ今頃は。どこにどふしていさんすやら。とにかく
添れぬ二人が身の上。ハ、アあぢきなき浮世じやナア。番
つすいた男にわしや命でも。なんのおしかり露の身の。
きへば恨もなきものを。下略。

三四 一の谷 組打の下

鳩に三枝の禮あり。武門の一義をのべられて。馬上なが
ら兩武者は。四ツに渡りてありさまは。あはれなるかや
御大將。熊谷だん次直實には。それ世の中にはたとへ有、
とうろうが斧をもつて。龍車に向ふがごとくにて。あな
たへとてはどうか。又こなたへはよなく。こ
くんすくまれつ兩武者は。しばしの間もみあふたり。こ
まの足音かつしく。鎧の袖はひらく。しばらく
勝負は見えねども。御大將のあつもあり。餘りこゝろの
せくまゝに。駒のあぶみをふみはづし。兩馬の間にどつ
とおち。すかさず熊谷飛おりて。御大將を組ふせて。首
かききらんなしけるが。やれましてはしわがこゝろ。

此むしやせんこく太刀うちの手ごわさ。今組打の手よはさ。拔くんの相違平家は七部のまけ軍。下略。

三五 聲色

いづれも得たる役者をするべし

○民谷源八

「ヤレくこれに気がはつきりとなつた。南無三寶アノかねははや九ツ。はたの宿までは。四ツまへに行ふともふたに。ハテ夏の夜はみじかいなア。そふでもあろうか。けふはたしかに五月三日。われ故に。命を果せしお才が忌日。おまちさまのおなさけにより。身どもはかく命をたすかり。鏡のせんぎも月をこへ。心はくらき五月やみ。つがひはなれてたゞ一羽。めいどへかよふほとゝぎす。あはれはかなき世の中じやなア。

○こしもとお才

「こしまできたれば氣づかひはない。あやふき場所へ旅人の。なさけにて。のがれしも。未來にござる夫のおひかへづな。エ、かたじけなく。それにつけても。思ひ出すもなみだのたね。けふはたしかに五月三日。月はかはれど。刃にかゝりすぎさり給ふ。つまの命日。幸ひあ

第十篇

卍

粹の懐篇を重ねすでに第十篇にいたるを畫工がはたらきに恵比須ぎれの賑はひをゑがきしはこれまた板もとが愆面を祝せしと予もまたこれに賛して

軒毎にうりたいたい鯛と竹棹に

みな釣たる、戎ぎれかな

半水園

一 大つゑぶし

おさんどんの。色事は。ちよいと目もとをながしもと。ゑんのはしりと。おもひそめ。すいのおまへの味噌こしと。そばのいかきの目をしのび。ふつとわれたるすり鉢に。ひよくれん木といひかはし。上たがひに放れぬのりこしも。いつしかに。つらやわたしを片手桶。それでもさくらにきりわらす氣はないわいな。

れなる地藏さん。今宵はこゝにて。心ばかりのたむけせん。チ、そうじやく。

○奴ずんど平

「イヤ大がくのかみ。切つせへ。サアすつぱりときらつせへしたが。この奴には。鳴戸を越したほねがある。イヤサずんど平には。しつかりとした骨が。ごはりますはエ引。

二 同

徳利ときかさんせ。いかにわたしが土びんでも。しらぬ木鉢で。ゐらりやうか。手なべさけるはじめから。やくそく五徳せうちして。苦ろうする氣の炭取も。今はわたしの杓子だね。上おもふ誠を水つほに。しられたが。腹がたつとの片口に。今までおまへはしやう沖だるとは皿々しらすにいかきしん苦をしたわいな。

三 同

障子ひとへに。へだてられ。あわぬつらさのかたをり戸しのぶ夜の。雨戸とは。ほんにしゆびさへよしづすま。まはす屏風のうれしさが。もれてしらけたまど障子。それから心もまはり戸に。上しめたふすまを引わかれて。口おしや。ゑんを切戸のせつなさに。おもひやり戸のむねさへくすほるあましようじ。

四 同

しんきなながらも。鏡臺に。むかいてうつすおもかけも。主故に。みだれがみ。とけぬ心にもつ櫛の。しらぬうた

がひ筋立て。むねのもつれをあらぐしに。思ひとぐしは
いつじややら。上ゆふにははれぬもとゆひがきれふかと。
あんじすごしてすきぐしも。どぶぞうれしいかほ見て此
の身のさばきがつけてほしい。

五 同

おなじ餅でも。いやな餅は。土の中からおごろもち。た
んもちに。せんきもち。かんしやくもちに頭痛もち。冬
はせつないかち荷もち。どつさりこけておいどもち。わ
るいかた持意路をもち。上いつでもわたしはいろごとの。
提灯もち。すかん氣もちに癪をもち。きくもうるさいり
ん氣の小ごとにいやなやきもち。

六 同

眉毛落して。間もなしに。かみはつぶされかんざしやお
られ。叩いて腹が。いるならば。主にまかしたからじや
もの。思ふ存分しやさんせ。しかしおまへのかんしやく
が。外で出るかとあんじられ。よりんきはふつつりやめ
ませうがきけんなをして。上すねすとこちら向て寝て下
さんせ。わたしがわるかつたと。すがりつき。かぶりつ

水にへだての氣がある故に

月の誠をにごらせる。

薬きらいにこの熊の膽の

あぢをすくよに誰が仕た。

ほんにはづかしまつたけがりの

つれにいわれぬ人がある。

あぢにからんで鳶さへ色に

見へりや間もなく散かゝる。

とめどないほど嬉しふなるも

下手な將碁の勝ごち。

山が松茸見せつける故

色けづいたる龍田媛。

すねて寝たとて憎くない故に

そつとあらしにおきる萩。

うつくしいのは身をぬく迄よ

引ばやつる、けんけ花。

色を定めぬまだ青梅も

手くだにかゝれば落安い。

かれてなにさらすのじやといふてる心はうれしかる。

七 うかれよしこの

浮氣心にふとすべらした

口が今宵の身をせめる。

雲に隠れて時雨のあとを

ぬれぬかほして出たる月。

主は羽織の紐むすびかね

わたしやせつない帯しめる。

轉び安ひと氣強く松は

あたるあられを振落す。

いやな夢見とよい辻占が

あつて心が落つかぬ。

おもひかなふてまたつき棹の

放れたゑんとはおもはれぬ。

あふてとかせた心のひもを

むすびかわしてとけにくい。

ぶたれ叩かれするよりぬしの

今朝の言葉が胸に釘。

ぬれる下地のころもしらす

しぐれぐせとは曲がない。

浮名立ばの戀路の重荷

心やすまるつゑがない。

春の浮氣に心がしれて

やまもそろく、やきかける。

蝶の亂れを尻目でにらみ

涎流した野邊の牛。

花は當座とすけない松を

好いてねぐらをしめる鳥。

是が人なら云わけ立たぬ

のみに喰した此からだ。

おほこ菊さへ水上したる

朝は花さへわらひがほ。

月にだまされなく鳥とも

しらすわたしもだまされた。

腹の底迄ゑぐられながら

まゝにそひ寝のさばのすし。

當座あらしにやなびくと見せて

おれぬすゝきの根はかたい。

色け付いたる者をばむがふ

箱へいれたるはるみかん。

風の添ない間をかんがへて

つゆもすゝきにのほりつめ。

退て見せたは人目の義理で

又もよりそふ塵とちり。

八 今宵忍ぶなら 二上り

今よひ忍ぶなら。みの着てかさきてしのばんせ。人がとがめたら。竹の子堀じやとしのばんせ合。

九 同

今宵忍ぶなら。紅木めんの手ぬぐひきてしのばんせ。人がとがめたら。疱瘡の神じやと忍ばんせ合。

一〇 同

こんや忍ぶなら。黒い頭巾きてしのばんせ。人がとがめたら。ねぐらのからすとしのばんせ合。

しようがきたわいな。うまいおかたじや豆かまそ。辻うら求めてはんじたら。末ではおまへさんと。あんらくさんじやといな。

一五 鷺をからす 同

さぎや鳥といふたが無理か合あふひの花があかく咲く一羽の鳥を二わとりとゆきといふ字も墨でかく。

一六 同

月と櫻にくらすが無理か。まゝにあらしがふくならば。さゝにたはぶれふける夜に。意氣な世界のほとゝぎす合。

一七 同

くるゝ夜ごとも又あくる日も。たゞおもひねのゆめならで。うつゝにかほをみながらも。またもどかし戀のよく合。

一八 同

啼いてわかれてまだ間もないに。こらへじようなき今朝のふみ。しんほしてくれ今しばし。ふみを見るたび氣はそゞろ合。

一一 とのかへり 同

とのかへりをまどから見れば。だいがさ立がさ引馬おちで。わかとうにぞうりとり。やりもち。エ、合羽かごエ、はれわいさのサ合。

一二 かわいゝと 同

かわいゝとなくからすほんにかわゆきやないて下んすな合あけのわかれのつろうごんす合わたしやおし鳥よいわいなそうじやく。そのきでなければ放されぬそうかいな尤じや實くまことにもつともじや合。

一三 同 かへうた 同

おなじざしきに居るときは。物をいふのもきかどがめ。けつく人目にたつそうな。いつそ端手ながよいわいな。そうじやく。その氣でなければはなされぬ。尤じやく。そうかいな。けにゝ誠にもつともじや合。

一四 あんらくさん 同

あん楽さん。四文のお豆でちよいとかふれナ。奇妙頂らいいあんらくさん。北といふてもみなみから。毛のあるお

一九 竹に雀は 同

竹に雀は品よくとまるさてとまらぬは色のみち。わたしばかりが情立てゝ。さきのおかたのつらにくや合。

二〇 同

さきのおかたのひとことが。十ことにむかううれしさを。たとへならくの底までも。したふわたしがむりかへ合。

二一 夕がほ 同

きのふまで。ながめし花もいつしかに。けふはわが身となつ草の今日にぞしをるゝうきおもひ合せてあわれと夕がほの。つゆの命とかねてはしれど。しらではかなきゆめの世や合二上りそではなみだにかわく聞も。ないてあかしてやまほとゝぎす合一聲空にさへわたる。月のかゝみはてりながらくもりがちなるむねのやみ。エ、まゝならぬしやばせかい合はや更け渡るかねの音に。まよひもはれて死出のたび。いそぐ心か夏の夜の。すゝしきかたのみちもせを。てらしたまはれ三ツのともしび。

二二 同 きくのつゆ 同

おもはじな。あふはわかれといへどもぐちに。庭の小さくその名にめでし。晝はながめてくらしもせうが。夜るくごとにおく露の。つゆの命のつれなやにくや。今はこの身に秋のかぜ。

二三 清元おち人 勲平道行

いろであひしも。きのふけふ。かたい屋敷の御奉公を。アノおくさまの。お使ひに合二人がゑん谷の。御家來で合そのあくゑんが。はく猿に。よう似たかほのにしき繪と合こんなるにしがからかみの。おしのつがひのたのしみは合とまりくのはたごやで。ほんのたび寝のかりまくら。うれしいゑんじやないかない合そら定めなき花ぐもり。くらしこの身のくり事は。戀に心をうばわれて。御家の大事ときいたとき。おもきがうへのつみ科と。かこち涙に目もうるむ合ソレその時の。うろたへものにはたれがした合みんな。わたしが。こころから。死ぬるこの身をながらへて合おもひ直して。おやざとへつれてふうふが合身をしのび合やほないなかのくらしにも。はたもおりするちんしごと。常のおなごとおもふてと合とり

毛もよだつ。何のいんぐわで。わしがはなじやと。おもふていることかないな。いつそのいたらこの苦勞は。あるまいかない合。

二七 こころでとめて 三下り

心でとめて手でかへす合すきなおかたのためにもなるか。ないてわかれてまたごけんまつ。猪牙のふとんの夜つゆにぬれて。あとはものうきひとりねするも合こしあが苦がるのまん中かない合。

二八 住吉参り 合の手

すみよし参り。廣田をすぐれば。こじきがせがむ。つくなく。つくないやい。おくれなされ。あるのないのとおつしやるやうな。御人體じやない。天下茶屋には和中さん。おくの天神。五大力。四社の御宮に。おもとの明神抜けて。そりはし渡つて濱へ出てござれ蛤とりあはぢしま眺めて戻りにやとかくでばい一いりやうか酔たくわいな内いんでお嫁々をとつかまへてくだをまく。

二九 とついつもんく入

みだしたるしんじつに合やがてといて山崎の。ほんにわたしがある故に。今のおまへのうき難儀。かんにんしてとばかりにて。人目なければいだきつき。ことばにいろをやふくむらん。

二四 瀬田のはし 三下り

瀬田のはしから石山まるり。見たりとふたり螢がりじやといな。松の月さす。こづえふかいじやないかないな。からさきの夜の雨。やばせのきはん。堅田の落がん。三井のばんしやう比良のほせつは。ちらく膳所のおしろは見事じやエ合。

二五 いわにやならぬ 三下り

いわにやならぬわいな。はづかしい。末の合末のことまであかさせおいて。今となつて。なんのかのといわんしても。よいものかないな。いつそそうたらしん賞が。ア、しりよぞいな合。

二六 同

いやでならぬわいな。姿も世事も。見れば見るほど身の

しみくるとあひもせないではたからせかれ

ときは「それはしのだのいきわかれたづねこいとのか

たみのうた

せかずと時節を待つがよい。

三〇 同

うきな立てられよにうたわれて

清元おさん「なむとかくごはしなながらも又もやぐちをくる

じゆづの玉もおさんが氣にかゝる

そふも添れぬ中となる。

三一 同

おもひつく羽根風からそれて

ときわづ「ひとごにふたご身は世をしのぶいつかむかし

のさゝめごと。

今はせつないことばかり。

三二 同

ふつと戀しいこゑきながら

清元おさん「すいなゆかりとわれながら。わがつま琴をか

きならず。おもひの竹の尺はちも
あふかあわぬの意路くらべ。

三三 同

馬鹿よたわけとそしられながら

よし願八景「みほのうき寝の身ながらも。あだにあはづの
せいらんと。心でとめし居つゞけに
通ふおもひが止められぬ。

三四 同

かよひつめたが此身のあだよ

上る朝顔「身をつくしたるうきおもひ。啼てあかしの風
まちに。たま〜あふはあひながら。つれなきあらし
にふきわけられ。
とはしりながらもわすられぬ。

三五 声色

○尾上

「コレそなたが部家に居やつては。こころよう自がいも
ならず。またよもやころしもしやるまい。とめるそなた

に氣おくれして。もし見苦しい死をとけなば。アレ見よ。
町人の娘故と。笑はるゝが口おしい。わいなア。ほんに
これまで。わしを大事につとめてたもつた。やさしいそ
なた。まことの兄弟といふたとて。そちがように氣をつ
けてくれるものが。二人とあらうか。死後までもわしや。
わすれぬかたじけないと。サアそちかきく前で。この禮
をいふて死にたいわいなア。

○おはつ

「おりもおりとて。けふに限つてこのお使ひ。さきへと
いふては一足もゆかれぬ。のみか。今の人の心にかゝる
いゝごと。さつきに御部家で。みなさんのことばといゝ。
いつにかはつた。なんじややら。そは〜とした御殿の
やうす。尾上さまの御身の上に。どうやら仔細がア。
ゆきとむない〜。おもひきつてこゝから。お屋敷へか
へろうか。ア、したがまた。これもどのやうな。急なおつ
かひかもしれす。ハテまア。どうしたものであらうなア。

○久吉

○加藤

同 箱入十纏撞
同 彌葉摺組
表紙仕立

泉陽塚 具足屋重兵衛
攝都 河内屋輔七

久「ハテ心得ぬ。今拜する北斗星を。南方の火星が光を
うばふは加「ときは今。子の刻。極陰のつかさとなるに。
地中より陽氣さかのほり。あれ〜。蛇はくるしみ落命
せしは久「北斗星は衆星の司にして。時に取つては我星
なり。然るに今。火星におはれたよふありさま。さ
ては。われを害せんと斗る者に極つたか加「地中に火氣
を催ほすは。まさしく地雷をふせたるか久「ハテ加「心
得ぬ兩人「ありさまじやよナア。

(ざしき手ずまと題して三節あり省く)

一荷堂戀々山人輯
長谷川貞信 畫

粹の懷

初編より十編まで
近刻出版

右の本は當時青樓及世に流行なす小唄長唄豊後新
内祭文より其餘おかしき小うたひ即席二〇カあて
舞手づまの類ひ迄集め出したれば遊興宴席に携へ
て一寸も引をとらず且座右に置つれ〜をなぐ
さむ事此小冊に増るものなし。

六 大津繪節

大津繪の筆のはじめや何佛は翁の吟とはいひながら誰が詠なるや是非をしらすこの大つゑのひとふしも端唄の中の大立物されば端唄と人もよばず一蝶が淺づま紀文がまつちのしづむ雨よりながれくして今はそのはうたの雫をくまぬものなくちよつぱり酒のあひづちにも隣のあねえちよつぱり來なといふもやつぱりうたの徳夫力をいれずして近所の娘や中どしまよではひやかすのらくらもの同じ仲間の松延堂がいかにも酒大人大つゑを筆記きはねえかと望まれてナツトしやうちだめうでんと安うけ合が紺屋の明後日記のじもやうの一てうら土手の合傘ならなくに彌生の雨の長き日にエイヤツト筆記上ることしかり。

松島庵の北窓に

文久戊春

筆耕舎隅畫記

助六がゆかりのはちまき黒小袖ふたへまはりのくものおびとづまへひとつさけまさのけた尺八蛇の目傘こいつはまたなんのこつた江戸の花富士筑波まけの開から見えずくのがあはかづさめうでんすなはなのあなやかたぶねけこまれるなつがもねへ。

四

「ひげや初花箱根山いざり勝五郎車にのせてめづなはづなを兩手にとつてもみちのあるに雪のふるさぞおさむうござんしやうわしはさむうはなけれどもそなたはふびんやさむからう初花しんせつかたじけなはなしのうちかたきが四五人一度にうちかゝるけらいの筆助かけつけて主人の大事とたたかへばにけてゆく。

五

「うぬが田へ水をひく獅子追ごやでなるこひくしはるではまくをひく猫めがとだなで魚ひくとうふやがまめをひくおさるが水をひくよいざめがかせをひく女郎衆はおちやをひくとやでひくびつこひくきやだひくるまひくかん田に山わうまつりのだしをばうしがひくてんてん。

「夕ぐれに小舟で急がして土手の景色は萩きやうつゆはおばなのうはだまのあれ見やしやんせつぢうらやまつばかんざし疊ざん更けて逢ふ夜の氣苦勞は人目を兼てかうしき男心はむごらしい口説してびやうぶが戀の仲立とけさのあめにかへさりやうかお互にこいちやの仲じやもの。

二

「ふたぢやわんかうがらし下にはたねへきりほしざぜんまめきやうだいにさくら草れんじにこまけたしなさんなあをむけてうがひ茶椀にかけのふさやうじゆかうにひかほたるかこ火鉢でうまいねほたてがい見せひけすぎからのろけばなしまぶのふみをかきやおたのしみびしやもんさまのおそないをねづみがおとしてことばしらにあたつてしぐれの松風ころりんしやん。

三

「花の雲かねの音はたしか上野かあさくさかあけまきの

六

「わしが心はやばせにはやるふねかたひやくそくいし山寺のあきの月とはきがしれぬかたにおつる鷹がねもぬしはからさきひとつまつふたつならびし瀬田のはし思ひぞつもるひらの雪ほんにみるではござんせぬぜやゆへいま、であはづにいたものをこゝで大津のしゆなれば日頃の願も京かのふ。

七

「てんもん堂ねんぶつ堂上のにちうどう二ツ堂はりのうちそし堂せいどうきやう堂かいさんどうおんくらまいゑんまどう小日なた大日堂ふか川三十三間堂こまがたどうやさゝるどうやくし堂おひがんまいりはあみだどうゑんどまめだいし堂おんまがひんどうとうかいどう。

八

お正月初日の出禮者に萬ざいくらびらき二月は初午地口とうろに三月ひな様白酒にしめ四月お釋迦様初かつうに時鳥五月のほりに柏餅六月天王まつり七月七夕「天の川精靈まつり八月お月見九月菊ざけ十月夷講霜月祝の子極

月やくはらい。

九

江戸前のかばやきや大和田岡本大こくや大金に和田平に
鮎新に尾張や藤やに原文菊や柳川むさしや丹波や春本松
や北川足立や宮下森山椎木大和や成田や前川濱や白川晝
澤伊豆やゑさや重箱きつね二葉千歳やつこ松深川屋。

一〇

仲の丁花くらべ玉やの薄ぐも久喜の瀧川さのづちは盛之
助彦太郎の尾倉登にゑひやのかもみどり倉田やのにほて
るに岡本は長太夫松葉の若みどりいづみの左海に岡田の
すがはらみうらや紅梅に姿ゑひの七里相摸の相生中萬
字のしづはま稻本小ひな。

一一

花のさと太夫揃造酒藏南甫民中紫曉松造に秀太夫宮子に
與佐太夫鯉昇清次鳴海太夫藤治靜太夫新三三孝六平民太
夫六二榮五郎藤十郎新治に小三次和州に露助あは太夫
清三郎に政次郎に千代作磯海桂藏榮喜林藏七平里八綱太
夫。

一一一

「さかづきの飲まわし堀川よじろはさるまわしけんすい
はこままわしなけなしめくらはめをまはし女房はきをま
わしけいしや衆はとりまわしやりもちしりをふりかんぬ
しごへいをふりまわしいのりかけこどもは……をふり
まわしやくばでじつていとゑはしごをふりまわし。

一一三

「思ひあきらめかくふみのりもあとやさきそばにおし
ゆんが見ぬふりも今はこの身にあいそもこそ月よのそ
らやとりかねをうらみしこともあだまくらでんべいさん
かんにんして下さんせ變る心のつれなさをさぞやうらみ
てふがひない女と思はんしよがいふにいわれぬおしうの
なんぎを救はん爲の身の願ひ。

一一四

「ぬしに見とれてつい日ぐらしの明りをとほしてひとり
虫なかぬほたるが身をこがす見せはまがきのすむしで
やりてはがやくくつわむしんぞかむろはいもむしで
けい者はちやうしをしやくとり虫さかなをちよいとはさ

み虫お客はかへるといへどいつでこがね虫をつかわ
すうちでは女房がまいくつぶりてつのをだす。

一一五

「さかづきを思ひざしせんどうしゆはふねできをさすさ
むらひはかたなきすかたさすすつれさすちから
もちいしをさすととりさはさをさすあねさんかんざし
くしをさすほろさすゆびさすはいをさすふたをさすおだ
んごしぎやきおでんにしほやきくしをさす。

一一六

「すみだ川の名物は黒やのさくらもち大七のこるこく
しらわのすいものにうを十のざつざかならくやき梅や
しきあれくあきはのこいもみぢれんけんじもくほ寺い
ほざきちやうめい寺みめぐり牛のごせんしらしけほりき
りしやうぶあなのうなぎあれみやこどりうゑきやでいも
でんがくをしとみじる。

一一七

「きりぎりす時節とて虫うりげけんの手にかへり江戸町
をかごにのりうられるかはれるつとめの身ほんにくがひ

じやくのせかいきうりきつてもかごすまひおやはくさば
の蔭でなく思ひきりくすりなくざしきにて客につら
れてよを明しこぢれにじれてもまゝならぬほんにこの身
はぜひがない。

一一八

「戀しくばたづねきて見よいづみなるしのだの森のうら
みくすのはわがほんしやうはきつねなりきいてやすなは
びつくりぎやうてんしたとへそなたはきつねでもこの子
をいまでうみ育てま一度逢ひたい見たいと立ちあがる
くすのはもいまさらなごりおしけれどひよくのちぎりも
是までとふるさとさしてかへりゆく。

一一九

「落人もよをしのびいろであひしもきのふけふかたいお
やしきに御奉公その悪縁かは知らねどもとまりくのほ
たごやでほんのたびねのかりまくら主君の大事をあとに
してかんべいはいきてはいられぬさらばやとあれまあた
んきなまたしやんせとおかるはふりそですがたでいただき
とめ。

二一〇

御大名はしごまき雷太鼓は板倉家安藝は丸にたかの羽よ
二かい笠柳生にふじ青木やつとふは丹羽の紋井伊たち花
京極四ツ目津經はかにほたん^一立つてるあおひは鬼本田
やり島津びわの葉は山の内榎稻葉内藤は下り^{さか}ふじ^{かりがね}鷹増山
矢はづ毛利。

二一一

兩國の川びらき鍵やの花火かけ芝居家根舟にばかばやし
橋間のすゝみはやかた船なら茶みせに與兵衛の五もくゆ
で玉子に枝豆さとふ水^{ツツコイ} 麥湯甘酒いくよ餅^一三人兄
弟に新内がたり竹澤はとふじで一番こまのきよくするめ
に天ふらだんごやにしめやにぎりすし。

二一二

「やなぎばしから舟にのりけいしやおつこちふたりづ
れつめびきでこゝろいきのんだりくつたりふざけたり兩
國を出はづれてすみだ川みやこ鳥すだれをおろしかけし
ばしむごんの船の内よかつたねへなにか………
…せんどはおあいだ水ざをがおつたつには困ります。

れの子國はいづくで名はなんとときのふそつたも今同心ち
ちのなは コレははまだま
くはできぬかや そりやきこへませぬでんべいさん
せきのぢごさまきなこついたらなをよかる。

二一六

おゝむく尾ながどりそのがん山下にて喰ふよいちど
りひるとんびいへくかもでもござりせんよしきりには
とりにうさぎも鳥のうちやぶくさへづるうぐひすとし
ぎかもめがんのくびめくひさごなり^一神代のむかしにせ
きれいしつほでヒョーおしへ鳥ハチャリ

二一七

おゝいゝひへまきやその金魚こつちへ出してお見せ興
一兵衛みのを着ていへくさぎではござりまんむすめが
手細工のよチできたいかのこふうさぎもこしらへるやれ
やれきよふな小細工とよくみればなんのこつたよつちに
んぎやう^一今戸でやいたはかわらけあねさんわれやすい
パツッ

二一八

二二三

「お正月あそびごとおりはや双六歌がるたごしやうぎに
草ざうしそのほかなりもの酒のきやくやりはごにまりを
つくとのさまよいだほれに御家来も大なまゑいけんやら
のむやらわやくとまくらにきせるたから舟 ながきよのとは
のねぶりのみ
めさめなみのりふねのおとの
よきかな正月二日はつゆめに 一ふぢ二たかすみゑのさんなすび
んくしめ

二二四

「十に九ツおきやくのくせはきりやうじまんやけいじま
んうぬほれて女郎にほれぬふりしていきすぎた思はせぶ
りのやほらしさそれにひきかへ今夜のお客は ほんとうに
まはしといひわちがすいた座敷つきものかすいわずほんに人
がらでこふとふでほどのよさそなじつに今夜はしみん
うれしいよ。

二二五

「かゝる所へしんどうけんば首みるやくはまつわう丸門
口にさむらひ二人 二人 はやのかんべいどのはざいしゆくめさ
るかときいておゆみはとんでいでてもかわゆらしじゆん

きさらぎの初午に稻荷まつりをかこつけて向じまぶらぶ
らとわうじいなりをあとにして袖すりいなりをよこにな
し三めぐりいなりもそこく^一に竹屋の舟とよぶこどりさ
てく^一ほどなく土手八丁大門 は 入ればよし原五丁町^一て
つほうの筒先狐ににぎられてかりうどもおあなへひきづ
りこまれ。

二二九

名にし近江のはつけいをこ^一にうつして三井寺やせたの
夕照 せきやう いまこ^一に夕ぐれてらす仲の町きみにかた田のかり
ねさせま^一にあはずのせいらんと軒 のき のとふるやもの見月
やくそくかたい石山のぬれていろますから崎のまつかひ
もなふきはんもはやきやばせ舟。

三三〇

百目がけぶうらしやら見るより女房 にようば はたまりかねこれも
うし旦那 だんな さん………(以下缺文)………

三二

おまへを見染たその日より紺びらさんへむりいふて忍び
のたよりを松葉いろわたしが黒をするのを草いろとすこ
しはさつして下さんせお前はしら絹のかほをしてたびた
び送る玉すさをみんな反古染にしやしやんすをいろく
氣をもみやうくなれ染ていろになり。

三二

「けいしやしうが三味を引く。あこぎがうらでは平次が
あみを引く。つきよかけそでを引く。わかいしゆがら
をみてきやくを引く。芝居で幕を引く。やばせでむ
やみにふねを引くとうふやは朝起きでまめを引く。あ
たむすこがころんでびつこ引く。おやじはちよ
こくかぜを引く。上鼠がもちを引く。ちくがくらしい所
へ客を引く。

三三

「日本中は土の上船といかりは水の上との様は御馬の上
かみなりさまは雲の上火がりのいさみの若衆はわれもわ

三六

「平家の大将の。これもりさいも。こひぢにまよふてし
ばらくあしをとめ。こひは心のしあんの外とやら。すし
やのやどなるかりまくら。あしはよしの、花むすめ。梅
とさくらの花くらべ。どちらが梅やらさくらやら。あや
めに似おうた杜若あさつゆにしつほりぬれたるあだすが
た上「娘心のあとやさきごんたおやこはじつぎをはなし
おみがわり。

三七

「けいしやべこく三味をしくやぶれ衣にやぶれ笠ゆら
の介花みち送きてぎよふてんしいもりのくろやきほれぐ
すりとんびにあぶらけさらはれたためあきのふへふきあん
まおさきがあかるかろはりこのとらもぐらくくびをふ
りにやくねこのしたわさびおろしにこいつはきみよふ
お月様くものなからてらくと。

三八

「こひしくばく。たづねきてみよいづみなる。しのだ

れもと家根の上三味線はひぎの上さわぎは酒の上。わた
しやいろの上くろふした上で又。させた上ほれるもかね
の上よくの上ほんにおちよは助兵衛で夜晝床の上。

三四

「ひけや初花。箱根山。いざり勝五郎くるまにのせて。
めづなをつなを兩手にとりて。もみぢのあるのに雪がふ
る。さぞおさむうござんしやう。わしはさむうはなけれ
ども。そなたはふびんやさむかろう。ほつ花しんせつか
たじけない。はなしのうち。かたきが四五人一度にうち
かゝる上「けらいの筆助かけつけて主人の大事とたゝか
へばかたきは逃けて行く。

三五

「おふいくお、かほちや。すな村そだちかかつてやろ
よめなかへ。ほうれんそ。いへくかれなほございませ
んむかごしんごほふ。よふくけがはえた。あきつきな
ますでおさらばへ。山のいもつくいもおやいもねぎはし
やうが。なんのくなすも一口にゆりは。す。かれぎとか
らみの大こんふた又で。

のり。うらみくづのは。わがほんしやうは白狐なり。

きいてやすなはびつくりぎやうてんし。たとへそなたは
きつねでも。この子を。今までうみそだて。ま一度あひ
たい見たいと立あがるくすのはも。今更ら名残はおしけ
れど上「ひよくのちぎりもこれまでと古郷さして立かへ
る。

三九

「かつてどうぐこうじんさん。へつついなべかま茶がま
に火けしつほ。火ふき竹。すりばちすりこぎ。まな板ほ
うてう火ばしみそこし。おはち水がめておけにこおけ。
お玉じやくしやかいかくし。しちりんごとくにわさび
おろし。ぜんわん茶わんにどんぶりばち小ざら。平。お
つほ。ちよこにとつくりちりれんけ上「ふたものゆのみ
にどびんてつびんやかんすみとりちやだるにほくちば
こ。

四〇

「ぬいほを。かたよれくと。これはどなたさんのお通
りと。藤原の時平公。なんときいたか櫻丸。ぞんぶんい

をふじやあるめいか。車やらぬとうしろから。大音あけて松王がこのひきかけた御車を。わるらんとするのだ。ならば手がらにとめてみよ。梅松櫻のばつさりならんで拍子まく。

四一

酒をのむ人。のまぬ人下こと上ごのその中に一合のんではまだたりぬ。ばんとうさん。あとをこんのじかけてくれ。のむとすぐさまくだをまく。なにさした杯なぜのまぬ。のまぬとぬかしやがりやおらきかぬさてくわりやいがこわいのか銭がないのか。ほんにあかにしな人さんじやごむりいそぎの用があるのにほんにばからしいじやふたんじやならよしなせ。

四二

小町姫。關の戸近く。もうしちと町案内たのみます。關兵衛は。關の戸あけてとふりたくばとふしてやらふが手形があるか。イエー。手形はござんせん。手形がなくては通されぬ。宗貞おくより聲をかけ。そのよにいわずと此雪に。さぞさむからう。こちへくと通されるよ。小

でがさく。虎がすむ。うさぎはお月様みてはねる。くろいくもに辰がまく白いへびがによりと出たら。こいつは又雨がふる。さいた櫻にこ馬つなぐ。いさみます。羊が紙をくふ。きやアノ。がもくをくふにはとりとけこ。う犬はわんく。てつほうみてにけるし。

四六

子どもの又平は大つゑをかくぬしやの手間とりうるしかくさかんの手傳ひはこまいかく。弱いしやうぎで恥をかく。おてはなんだへ金に角まけてしまいに。あたまをかきいけんをいわれてた。みかく。おやじはおこつてあせをかくしのだのもりのくすのはは親子の名残りを口でかく。隅田川ではうなぎかくろうそく屋の子僧はねてもかく。

四七

もふしく。お師匠様。いろはをさかきよみませう。京すせもひゑし。みめゆきさ。あてえこふけまやくおのるうむら。なねつそれたよかわるぬりち。とへほにはろいで四十八文字。おてほんの通りでござります。おの

町は見るより宗貞さんかへおなつかしいと涙ながらにいだきしめ。

四三

三國一のふじの山。雪かとみれば花ふき。よしの山ちりくるあらし山。朝日に山々見渡せば。さよの中山石山で。すゑの松山大江山。いくののみちは遠けれど戀路にかよふあさま山。ひとよのなさけありまの山こえて上。ゑんをむすびしいもせ山ふたりが中のこがねやま。

四四

落人も。世をしのびいろであひしもきのふけふかたいやしきの。たがひに御奉公。ふたりがゑんやの御家來で。そのあくゑんかはしらねども。泊りくのはたごやで。ほんのたびぢのかりまくら。主君の大事をあとにして。かん平は。生きてはいらぬさらばやと上。あれまアたんきなまたしやんせとおかるはふりそですがたでいだきとめ。

四五

十二支の子はちうく。丑はもふく。車ひくさ。やぶれはあきれたばかりやう。父母はいづくの生れと問ふたれば。越後の國の角兵衛獅子の悴とへらず口をたいてかへります。

四八

七福神舟あそびそろいの衣しやうをあつらへる呉服屋は。ほてい屋で金主はきのいね大黒や壽らう神いふ事にやよいに神樂坂はくろくどでござんすあらしの寅やのびしや門も辨天につこりわろうゑびすがほお寶船にはさほ竹六本さしまする。

四九

吉原の夕けしきのきをならべし茶やの數大見せまじりみせそのほかあまたの遊女みせ見世すが、き内證で鈴をふるあんかけ茶めしにいなり様かいわりつぢうら八代目けいしやがちりからたいこにけんをうつりう五ちへはまはらつて一ツおあがんはいよへほやく。お酒がのみた。いねなんかのとて時もちはんにおやもふ引たよ火の用心さつしやアりましたよヨウ。

五〇

「はなの下二本ほういふなりに大そう入りあけてにのう
でいれほくろこれからおまへのつまじやぞへめをかけて
くださんせ外のおきやくはいりませんとほろりと泪を
こほします片氣の名妓ほつきして親方へかけ合ひとうと
身うけする新道こいきな住居で置たにすほんと逃けられ
た。

五一

「おふうい〜おやしきさんそのよにすましていきなま
すよひの内あがらんせいへ〜おかねはござりせん六ツ
には御門ぎれよふ〜二百あるおさきへまわりましょや
れ〜しわいおやしきさんむりむたいなんのくもなく引
あける一ばん二百でてつほうはなす二ツだま。

五二

「さくら月うかく〜とさけのきけんて衛あしむかふじま
たいこもちあまたのどうぜい引つれてくる〜と三めぐ
りや大七のお〜一ざゆふ日にかややく隅田川たけやの舟
と呼子鳥土手八丁大門はいれば仲の町だんなおはやいみ
なさま玉樓と艶言のよさ。

天し鬼に成た蛇になつたと堤をさしてぞ逃けてゆく。

五六

「おふうい〜山とんほさん小金虫をそつくりこつちへ
かしておくれ聲もくつわ虫にびつくりきり〜すいゑい
ゑ兜むしじやござんせぬ蝶々がしてくれた用の玉虫で
おさきへありきましょよさて〜しぶといも虫とぬきは
なしなんの蜘蛛をば一つぶし命と蠶蚊のおんあいわかれ
のひとつぶし。

五七

「お伊勢もどりのあい宿にかたいやくそく石部宿旅のそ
らのゆめ見草その馬士節におこされて解かゝるお半をばと
いたる長右衛門それから思ひ染ゆかた色のいろはお師
匠さんお手本をかいてもらふた床の内嬉し恥しはつまく
ら紅絹のきれいろにでる。

五八

「三丁まらひやうばんきしよさではいつでも成こまや八
代めいへのかぶとうじは日の出ではやりますむすめでは
条三郎かぎります紀の國やいつでもはづさぬ大當りじだ

「人にしられし景清は五條の遊君にかよふては弓矢のは
じと遠慮がちことさら今はひかけの身しのぶ格子先あみ
笠ごしおまめなら比よく運理のかたらひに昔のきぬ〜
ひきかへてもめん〜と零落し身の果あはれなこりや又
おきの毒なものがたり。

五四

「おかるはせきあけてたよりのないのは身のしろのやく
にたて〜の旅だちかいとまごひにもみえそなものとうら
んでおりましたもつたいたいことながらおとつさんほと
しのうへかんぺいさんは三十になるやならいで死ぬると
はさぞ口おしかつたるむねんでござんしよあひたかつた
ろ。

五五

「あふうい〜せんとさんその舟どうぞはやくわたして
おくれ舟長はぶつてうづらイエ〜渡す事はなりません
夜があけたら渡さうと喧嘩しかけの挨拶に清姫くわつと
せき逆上渡つて見せんと日高川飛込は舟をさびつくり仰

いは彦三にたて小團次おやまではしうかに梅幸菊次郎か
たきは海老藏ぬれごと羽左衛門九藏におかじま屋。

五九

「ゑんあればすゑかけてやくそくかため身をかためせた
いかためておちついてア、うれしやおもうたがほんに
一日あらばこそだいな男をそゝのかせよるひるとなく
引つけてしやうばいごとはうはのそらひるきでよんでく
だんすごしんせつらんでうどのとゑんをきりふた〜びよ
んでくだんすな。

六〇

「番頭の丈八はこそうや用があるからちよつとこへ長松
ははい〜なんでござります通り丁のおはりやへいつて
のき十丁と小わりの代金をいそいでとつてこひ犬のつる
むを見てゐるなおこまは才三にあいたさにでるすがた丈
八みるよりもしおこまさんおまへの事をばくよ〜おも
ふてしやうばいの杉丸太が……………。

六一

「内にはいていしゆがすわり込うら里を庭の古木にいまし

めにくもりつけおりしも降りくる雪ふき浦ざとはなみ
だぐみくるしみも男故たとへしんでもいとやせん男は用
意の腰を口にくわへしのびくゝてやねづたひよふくゝ
三人へいの上とぶかと思へばあけがらす。

六二

かほらまちあぶらやのひとり娘にお染とてとはまだ
二八ごろ人もめにつくさくら花こがひの久松はまいがみ
のつほみ花まだ床なれぬ室の梅夜毎々にしひのびあい寝
あぶらをおやたちやゆめにもしらしほりあぶらやの娘ゆ
へ……………のうちからまいばんとほさせる。

六三

なにし近江の八景と里にうつして三井のかねせたの夕
照を今こゝに夕ぐれてらす仲の町のきのとをろの物ずき
をゆきみかたゝのかりねさへあだにあはずの晴嵐と約束
かたき石山のひらの雪濡れて色ますから崎のまつかひも
なや歸帆も早き矢ばせ舟。

六四

まいにちふみをもたせ。たづぬるけれど。いまごろは

おくにはへしのびよくしのびこみ折しも雨がふるかわ
づのなきごろに岩藤がしばらくたちどまりさてこそふし
ぎやたいせつなおには先なにものじやはいゝ尾上のめ
しつかひはつでござりますさてゝねがひがござります
上おつほねさんあなたのいのちははつがもらいますく
はいけんすらりとぬいて主人のかたきととめさす。

六八

おもひをば重菊。わたしが心は石竹で。草をとり。杜
若。つねくかわせしことのはも。ごゑん朝がほか。夕
顔とまちあかしかふしに立花でおまへのこゝろは鬼あざ
み。藤。つゝじ上むねにうらみのやま吹も。一夜おま
へにあおへでにつこり福壽草。

六九

居酒見世。のみましよ山ざき増田に角近江。四方市兵
衛ぎやうてんし。いゑく居酒はいたしません。瀧水の
ますうりで。萬屋は飯田町でおさきへあがりますよ。さ
てきてしぶといおやじばしいも酒や。なんのくもなく一
升とていつでも酒やはすじかい内出の二ツ引五合。

どこにどふいさんすか。人のうはさのよしあしを。きく
につけてもきぐるふな。かだあはしま大明神。おなごは
一代まもりがみ。あはしまさまへあけますと。かほ見あ
はせば丹七さんかと。おどろけば上ほふばい女郎はわ
れがちに。すいつけたばこそぞでしほる。

六五

大橋親父橋。笄橋。こつちへ鍛冶ばしで。和泉橋びく
にばし。禪正ばしイエく神田橋じやござんせぬ。乙女
橋が思案橋。兩國橋日本橋。お先へ幸橋。やれく種木
橋湊橋。鮫がはし。なんの昌平橋一ツ橋。上石ばし
龜島橋三枚橋和國橋に二子橋。

六六

さくら月うかくとさけのきけんてちどりあしむかふ
じまたいこもちあまたのどうぜい引つれてぐるくとみ
めぐりや大七のおふ一ざゆふ日にかやく隅田川上た
けやのふねとよぶこどり土手八丁大門はいれば仲の町
んなおはやいみなさま玉樓とせじのよき。

六七

やみの夜にくるわぢかくうかれてはいりこむ吉原へき
やくじんはのりこみ三まいで大判小判をうちならべきん
らんどんすのしかけてらせたのおびをしめておいら
んはまじめがほかむろはきやくのふみづかい中にもよく
ふかいたいこもちがざしきをながめどらむすこをおひ
やりちらかしもらひしかみいれとしうぎをもつてゆく。

七一

はこね山ひとめぐりめでたくゆもとのふくすみや茶や
のかずとうの澤むそうこくしゆのどふがしまりがたの
みやの下夕ぐれにそこくらへきがもめますではないかい
なよふきにたいまつ足のゆどまりよがあけりやみやまに
そがけふだいの兩しやあり上みづうみお關所おてがた
すんで通りましよと旅人のありがたサ。

七二

かむろぎくかはゆらしめもとにほんのりさくらいろす
がたこそかきつばた香ほり床しきむめのはなにくらしの
たちかぜやあいらしのゆりの花ひとりできをもみじ上

とけてねたよのゆきの下かわい／＼とまでしこのみ
はらんぎくですへはたまつばきの千代も八千代もさきそ
ろふ。

七三

〔大谷友右衛門。半道中山文五郎。親ゆづり。錦升が。
實悪かねてのぬれ事し。みよしやと福助を。よふう才見
やしやんせ。おさきへはいります。やれ／＼しぶとい奥
山と。關。三十郎なんの小六に廣五郎。男女藏新車に〕お
やまのしうちは菊次郎。

七四

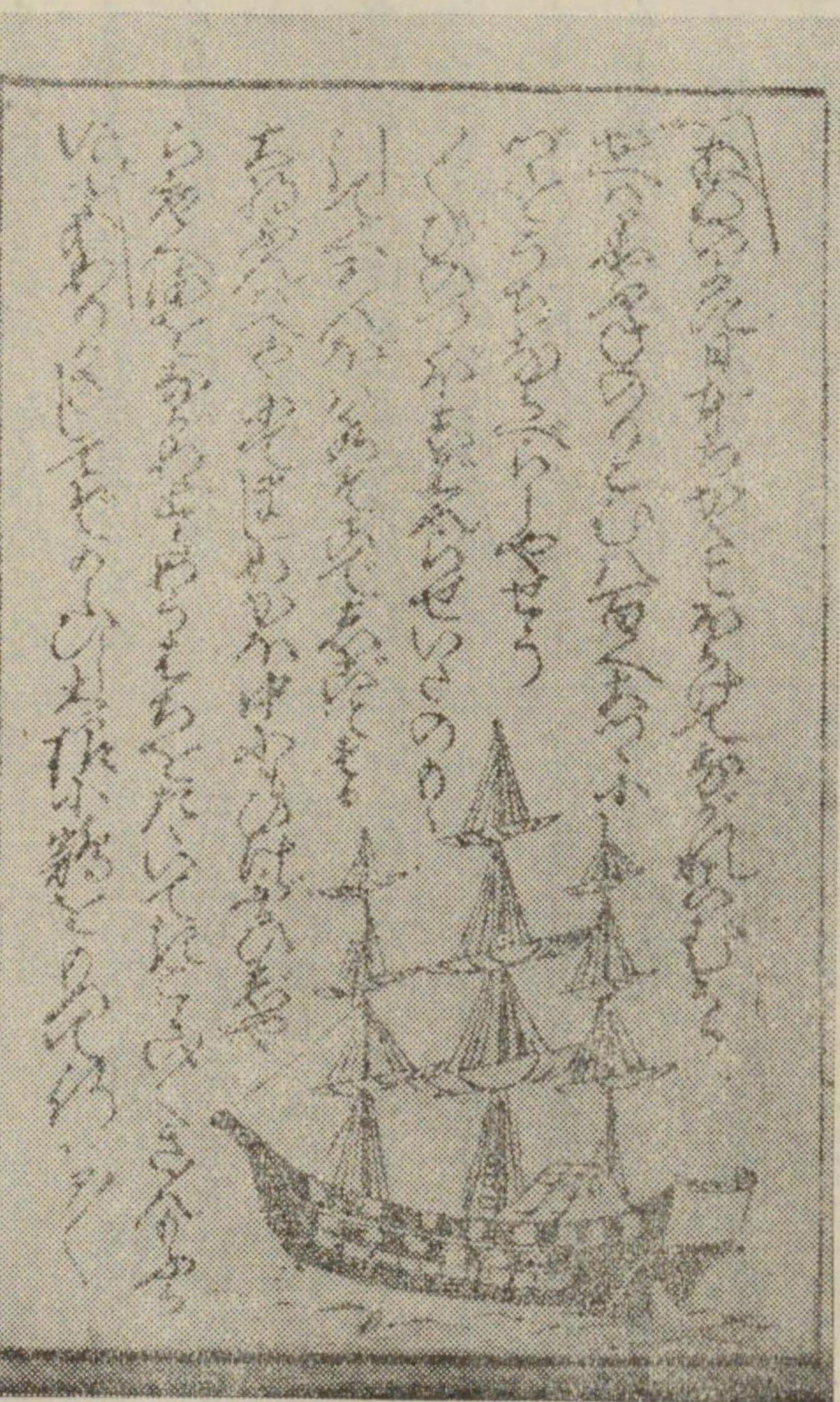
〔三丁町ひやうばんき。しよきではいつでも成駒や八代
目いへのかぶ。とふじは日の出ではやりますむすめでは
糸三郎おばけじや菊五郎いつでも中のりはやがはりじだ
いは彦三にたて多見藏おやまではしうかに梅幸菊次郎上
〕かたきは芝十ぬれごと羽左衛門九藏にきのくにや。

七五

〔よびだしのやつこさへこゑもいさまし土俵入。にしひ
がしわかれても。中をむすびし庄之助。ひきでの名人天

七八

〔多見藏に仁木をさして。とほけて中山文五郎糸三郎か。
關三八百藏。大友小六をうちならべ新車宗十郎に彦三郎。
所作事は歌右衛門。九藏は三津五郎でしうかする。竹三
郎へやすみまじめが
ほ。中村ひるきのあ
るのは海老藏むすこ
の八代目どらみよう
はちをたゝいてこれ
これは上使のやくめ
と舞臺をさしてにら
みし目玉でそのまゝ
すツと行ドン／＼。



ほとまめをくひ。とんびはひよくひよりみるからすは
かア／＼その日の吉をしる。しらすぎはこくびよかたけ
るみやこ鳥上／＼ふくろはよあそびみづくおけつこかご
のとり。

八〇

〔よし原五丁町。お
ららん道中ひがから
ささきはこはかわい
衆でおかちはんぞ
しゆ手ぞろいでたる
こもちのやつこさ
ん。おつなるみぶり
して。みち／＼おど
つてやりをふり。お
そばは禿衆。あとお

七九

〔ほうおうけん／＼
きじのこゑ。くまたか御山でつぺんかけてほとゝぎす
にはとりはとけつこ玉子うむ。おし鳥はみやうとづれう
ぐひすは。ほうほけけうとはるのとり。はとめは。ほつ

さへやりてしゆ。ぎようれつそろふたせんせいを上／＼だ
いみやう見とれてうかく／＼くるはへかよひます。

八一

津風。やはすの名人常山ととりくみ七日目のはれ角力日
のしたかるさん秀の山劔山手とりの名人御用木上／＼とふ
じの日ではあら馬小柳これこそ力士のかゝみ岩。

七六

〔吉原くるはのけいこ角力四本ばしらとなぞらひて六枚
びやうぶたてまはしまくらは土俵とかたどりて手とりの
名人お茶引山つきでの名人いのこり山行司のやくめは中
どんで四十八手のうらおもて手をつくしたがつひにつかれ
てみづをいれ／＼のこり山がお茶引山を四ツにくんで土
俵の中へとちよいとなけた。

七七

〔あめのよに日本ちかくとほかけてながれこむうらがへ
は黒ふねのりこむ八百人大づ／＼小づ／＼をうちならべらし
やせう／＼ひのつ／＼ほじばんらせたのも、引でくろん
ほは水そこでしごとする大將ぶんはへやにてまじめがほ
中にもひけぶかひじやら唐人海をながめどらめうはちを
たゝいてきこらい／＼きんもふらいと上／＼あめりかさし
てぞもらひし大根小鶏をもつて行ハア／＼。